
バイバイ、バタフライ。?理念戦争

みかなぎあやめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイバイ、バタフライ。？理念戦争

【Nコード】

N2920R

【作者名】

みかなぎあやめ

【あらすじ】

あの日全てが始まった――

棘木緋香里高校二年生、両親を中学二年の時に亡くしながらも平和に生きていた。そんな彼女の前にある日、両親の親友と名乗る女性が現れ彼女をごく平和な日常の裏で行われている両親が関わっていた異界からくる者たちを相手にした戦争、その戦場へと連れて行く。

そしてその女性は緋香里に聞いた。「戦うか、それとも今日見た物を忘れて安穩と過ごすか、どちらかの道を選びなさい」

その答えに悩む緋香里だったがそんな中、町が異界から来た者たちの襲撃にあつて――

恋に学業に戦いに悩む青春系現代戦争ファンタジー。

* 一話一話を短くし短時間で読みやすくしています。ちょっとした待ち時間や移動中にでも読んでいただけると嬉しいです。*

第1話少女の願いと（前書き）

いろいろ詰め込んだらこうなりました。
異世界間戦争をテーマとした小説です。でもファンタジーっぽく
るのは4話あたりからです。
流血描写があります。

第1話少女の願いと

あの日、私は明日を忘れた。

約束は消えて残ったのは絶望と終わらない苦痛。

もう、失うことなど 怖くない。

すべて失ってしまったから――

#

朝、一人少女は電車に揺られながら空を見ていた。

「なにも知らない方が幸せか」

少女の名前は棘木^{いざなぎ} 緋香里^{ひかり}。いま高校2年生である。

それほど目立たずに生き、そのまま死んでゆくことがたった一つの彼女の夢だ。

その理由は簡単にして簡潔、もう何も失いたくないという恐怖。緋香里がまだ中学2年生だった頃、彼女の両親は彼女の目の前で手首の動脈を切り自殺した。彼女はその事を断片的にしか覚えていない。医者の話では自我の崩壊をふせぐために衝撃的な記憶を脳がロックしたと言っていたいたが緋香里はそれを思い出したいと思っていた。

――思い出した方がいつそのこと楽だと考えていたからだ。

『次は終点宮岸、宮岸でございます』

彼女がそんな事を思っているうちに電車は彼女の住む町宮岸市に着いた。

ここから約20分も歩けば現在緋香里の暮らしている和岸家に着く。

そんなことを思いながら緋香里はホームの改札を出て帰路を急い

だ。

#

「おかえりなさい緋香里」

家に帰ると彼女を引き取り夫婦で育ててくれた和岸^{わかし}夫妻の妻、音^お菜^{とな}が緋香里が帰ってきた事に気づきそう言った。

「病院はどうだった？」

「いつも通りだったわ」

そっけなく言う緋香里、微かに音菜はさびしげな顔をする。

「そう」

心配そうに音菜が見つめるがそんなこともお構いなしに緋香里は自室に入りベットに横になり夕食までの少しの時間宿題を片付ける事にした。

「ふう」

誰かと会話をすることを緋香里はとても疲れる事だと思っていた。だが実際には違う、単に関わり合いになり自分の過去を知られたくないうえ知られて嫌われて一人になることが嫌なだけだということでもくだらない理由人を拒んでいた。

「会いたいよ」

彼女が一人になるたび思い出すのは両親の顔だ。

あの日、緋香里の全ては一度壊れた。

赤い血が床を濡らす。

泣き叫ぶ自分。

冷たくなっていた両親の躰^{カラダ}

それはすべて後、その場にいたはずなのに緋香里は何も思い出せなかった。

それが悔しくて彼女は今も泣く。

泣いてもどうにもならないと知っているのにも関わらず只々泣くことしかできなかった。

#

翌日、チャイムが高らかに鳴る中、緋香里はゆっくりと立ち上がり弁当を片手に教室を後にした。

そう今は昼休み、今日も緋香里は一人静かに教室を離れ校庭の隅っこにひっそりと立つ櫛の木の下で音楽手製の年頃の少女らしい、ただし甘そうなおかずが多く明らかに男子用のサイズの弁当を食べる。

「あ、緋香里ちゃん！」

半分ほど食べ終わった頃、一人の少女がこちらに向かって歩いてきた。

「いつしよに食べよー」

彼女の名前は若月水仙^{わかつき すいせん}、緋香里の数少ない親友の一人である。

「いいけど」

「えへへ、今日はゼリー作ってきましたっばい作ってきたから緋香里ちゃんにもおすそ分けー」

そう言って水仙は緋香里に大量のゼリーの入ったタッパーを笑顔で渡す。

「多すぎ」

「作りすぎてお昼はゼリーだよ」

その手には1つのバケツ、まさかと緋香里は顔を引きつらせる。

「これみんなゼリーなんだ！」

案の定そうだった。

水仙には料理は上手だが多く作りすぎるという妙な癖がある。

おもにそのとばっちりを受けるのは近くににいる緋香里や運動部の面々であり、放課後野球部に引き渡したら鯉に麩を与えたかのよう
にすぐ消えたのは別の話。

#

緋香里が家に帰ると玄関前に見知らぬ黒い車が止まっていた。

（お客さん？）

彼女はそう思いながら家に入る。

軽く挨拶だけはした方がいいと思った緋香里はリビングの戸を開けた。

「あら緋香里ちゃん、久しぶりね」

そうその客人は親しげに緋香里に言った。

「あのどちら様で？」

しかし緋香里はその顔に見覚えがとんと無く思わず聞き返した。

「そりゃあ覚えてないわよ。最後にあなたが会ったのはこの子がまだ2歳の頃だもの」

「それもそうね」

客人は朗らかに音楽と共に笑い、その後に顔を引き締める。

「今日は緋香里ちゃんに話があつて来たの」

そう言う客人に緋香里は不思議そうな顔をした。

「両親の仕事の事、知りたくない？」

第1話少女の願いと（後書き）

ブログ連載を加筆修正、意外と大変でした。
緋香里ちゃん、可愛いです。

3月3日、水仙、音菜の名前に振り仮名つけました
7月22日に大幅改稿。

第2話希望と言つ名の花を抱いて

—— 両親の仕事の事、知りたくない？」

「っ！」

「やっぱり何も知らないか。あの人の事だし教えてないか」

両親の仕事の事、その事を緋香里は一度も聞いた事がない上言つた事もない。なんとなく禁効いてはいけない事のような気がしたからだ。

「まあいいわ、あなたにはその仕事を継いで欲しいのよ」

「それって——」

いったいどう言う事？ 緋香里はそう言おうとした。だがその言葉は途中で遮られた。

「ねえ緋香里ちゃん、あなたは異世界って信じる？」

いきなりの一言に緋香里の思考が一瞬止まる。

「はい？」

「だから異世界って信じる方？」

「あの何言ってるんですか？」

傍目にはふざけているようにしか聞こえないがその客人の目は至つて真剣そのものだ。その眼力に押されるように緋香里はこう答えた。

「信じ・・・ません」

「はあ」

客人は思わずため息を付く。

（やっぱりって感じかしら）

予想が的中し客人は少し考えてから言つた。

「今度の土曜、空いてる？」

「空いてますけど」

「なら見せてあげる、あなたのご両親の仕事場を。あ、私の名前

は桜木さくらぎ 語かたりよ。桜の木と書いて桜木、語ると書いて語よ」
言い忘れたことを付け足すように言々と客人、桜木 語は去って
行った。

#

「はあ」

ベツトに横たわり、天井を見ながら緋香里は溜息をついた。

「なんでこうなったんだろ」

そうつぶやく緋香里は自分の考えがまとめられずに先ほどから延々とこのような事を繰り返している。

思考にピリオドを打てぬまま延々と考え続けているがなにも答えは出ない。

「気にしても仕方ないか」

そう思うと緋香里は布団を被ると瞳を閉じ、思考を中断し眠った。

#

とてもおかしい夢を見た。

白黒のチェックの部屋に閉じ込められ、その中でなにか音楽を聴いている夢。

どこかで聞いた事のある曲で何度も何度も繰り返して聞いた。

その夢の最後に声が聞こえた。

——君はイケニエだ」と

#

「っ！」

緋香里は思わず飛び起きる。

「なに今の夢」

とても大切な何かが欠けた不自然な夢だった。

「ひかりー時間よー」

緋香里を呼ぶ音楽の聲がし緋香里は時計を見る。

―― 7時50分、急がないと遅刻である。

「はやくしなさい」

「っ！」

一瞬とんだ意識を元に戻すと緋香里は制服を手に取り素早く着替え通学に使っている手提げ鞆を手に下へと降りる。

「はいお弁当。後、これ」

そう言って音楽は弁当と500円玉を緋香里に手渡した。

「これで駅の売店のパンでも買って食べなさい。朝食抜きは体に悪いから」

「ありがとうございます」

こうして緋香里の日常は始まる。

緋香里が気づかない程度のほんの少しの非日常を混ぜながら。

間章1約束

全ては始まり、全ては終わる

契約は踏み躪られ

約束は地に落ちた

祈れ、祈れ、祈れ、祈れ

約束を

契約を

祈れ

先刻の時はもう近い

盟主は約束の名を呼ぶだろう

刻印
*****の名を

その時こそが全ての始まり

全ての祈りが再び生まれ

全ての約束は再び結ばれる

時よ廻れその時が来るように

いつかの少女の夢はその時のためにあり

全ては予定運命の上に記され、この世の始まりからの決定事項
それが覆うことはない

永遠に、永遠に

間章1約束（後書き）

あーうー2話の続きを書こうかと思ったんですが度重なるミス操作によるデータクラッシュにより間章に変更。
ちくしょー

3月3日、ある場所を修正

第3話 とある車内の会話と回想

賛美せよ、賛美せよ、賛美せよ
生きていることを賛美せよ

それこそが最大にして最もありふれた奇跡である
だからこそそれを忘れぬよう賛美せよ、賛美せよ、賛美せよ

#

土曜日、なぜか水仙と共に緋香里は語の運転する車に揺られていた。

「楽しみだね！緋香里ちゃん！」

「うふふっ」

なぜか知らないが緋香里の目頭が熱くなる。

（なんでこうなのよ）

何故、こうなったか。それは約2日前——木曜の事である。

・ ・ ・

「緋香里ちゃん、今度の休みどこか遊びに行こうよ」
そう言われて緋香里は内心どきりとした。

「あ、ちよつと・・・」

「用事あるんだよね。知ってるよ」

「っ！何で知って——」

水仙はそつと緋香里の耳元で囁く。

「水仙もそつち側の人間だから」

緋香里は混乱した。

「たぶん緋香里ちゃんよりも緋香里ちゃんの両親の事は知ってると思うよ」

そう笑顔で言う水仙、だが緋香里は戸惑いを隠せない。

「だから・・・ね」

水仙の顔に悲壮な影が宿る。

「逃げちゃだめだよ」

その一言は緋香里の胸をついた。

「水仙も一緒に行つてあげるから」

・ ・ ・

「それで今、どこに向かつてるんですか？」

ふと緋香里は行き先が気になり語に聞いた。

「うーん行つて見てのお楽しみかな」

「水仙も気になります」

その会話にかじりつく水仙。

「だーめ、教えてあげない」

茶化すように語はそう言い車のハンドルを切った。

「でも下手したら吐くかもね」

「・・・・」

今のは笑えないだろう、心の中でそうツツコミを入れる二人を乗せて車は走る。

最悪の場所に向かつて。

第3話 とある車内の会話と回想（後書き）

コメディと次回への課題を残して3話終了。
次回流血表現があります

第4話 ようこそ戦争と言つ名の地獄へ（前書き）

流血表現あります。

第4話 ようこそ戦争と言つ名の地獄へ

車に揺られ気が付くと緋香里たちを乗せた車はどこかの山奥の細い道に入っていた。

「一つだけ、聞いてもいいかしら」

ふと語が緋香里にそう問うた。

「どんなものを見ても逃げ出したりしない？」

その問いに緋香里は顔をこわばらせる。

「わかりません・・・何を見ることになるかわからないので」

緋香里は正直に答え前を見た。

「そうたぶんあなたなら大丈夫、絶対に目をそらさないでね」

「はい」

もう引き返せないのだ、なぜか緋香里はそう思い苦笑いを浮かべる。

「どうしたの緋香里ちゃん」

水仙が緋香里に聞く。

「なんでもないわ」

緋香里はそう答え前を見た。

「さて車から降りてもらおうかしら。これから先少し歩いてしか行けないから」

語がそう言うのと緋香里達は車から降りる。

周りには何十台もの車が停まり沢山の人々が忙しそうに歩き回っていた。

「桜木さん！」

そう言って一人の男性がこちらに向かって走ってくる。

「どこ行ってたんですか、連絡取れなくて心配してたんですよ」

「いやあねえ上からのE級緊急秘匿命令でちよっくら出かけてたのよ」

とぼけたように言う語に男性は青筋を立て怒鳴り散らす。

「何であなたと言う人がいくら緊急秘匿命令とはいえE級の仕事を引き受けるんですか！そんなんだから始末書書かされるんですよ！」

「あはは」

「あはは、じゃありません！」

目の前で繰り広げられるコントに緋香里は固まり水仙は笑い転げる。

傍目から見ればかなりおかしかったにちがいない。

「まあ正式に申請は取ったと言うよりとらされたから始末書ものじゃあないわよ」

「私が言いたいのそんなのじゃ――

「ほらこの人の事置いといて行きましょ」

そう行つて語は緋香里の手を引き歩き出した。

「え、あちよつ」

慌てる緋香里を余所に小走りで語は前に行く。
当然のごとくぴつたりと水仙はついて来ていた。

#

「さてと」

語はそう言うつと足を止める。

「用意はいいかしら」

語は緋香里達に問う。

「はい」

しつかりとした声で緋香里はそう答え水仙はうなずく。

「ようこそ・・・そうすべきかしら」

そつと語の手が空気しかない場所に触れる。

――この地獄へ――

まず最初に血と死んだ者の死の臭いが鼻を突いた。
次に少しづつずれていたピントが元に戻るように周りの風景が変

わり始めた。

「っ！」

思わず水仙は目をそらした。

あまりにも惨い風景がそこに広がっていたからだ。

足元には死体、前を見れば傷ついた人々、そして遠くからは戦いの音が聞こえて来る。

語は言う。

「ようこそ戦争と言う名の地獄へ」

むせ返るような死の臭いに思わず水仙はしゃがみこんだ。

「これが緋香里ちゃんのお前のいた場所よ」

そう暗い顔で言う語の声をただただ緋香里は聞くことしかできなかった。

第5話 迷い路

「『道を選びなさい』か・・・」

和岸家の自分に割り当てられた部屋の中で語に渡された名刺を手にそつと緋香里はつぶやいた。

あの後様々な説明を受けたがその内容はほとんど頭に入っていない。

それほどあの風景が頭から離れなかったのだ。

それから数時間車に揺られ、ふと気が付くと家に着き車から降りていた。

そしてそこで言われたのだ。

「戦うか、それとも今日見た物を忘れて安穩と過ごすか、どちらかの道を選びなさい。戦うのならばあなたの両親が自殺した日の記憶を取り戻すのを手伝ってあげる。戦わない道を選ぶのならそれは出来ないけど。決めたら連絡してちょうだい、答えを聞くから」

その言葉を言い切ると語は名刺を緋香里に渡した。

「じゃあね」

走り去っていく車を緋香里はしばらく見つめ、見えなくなった後に渡された名刺に目を落とす。

——境界守護委員会 正式雇用才花 桜木 語

そう名刺には書いてあった。

「ホント、なんなのよ」

緋香里は思わずそうつぶやき天井を見る。

「もう寝よ」

緋香里は考えを中断し早めに寝ることにした。

——また同じ・・・夢？)

緋香里はまた夢を見た。

前と同じ白黒チェックの部屋に閉じ込められどこかで聞き覚えのある曲をくりかえしくりかえし聞く夢を。

(うつん、どこか違う気がする・・・)

何かが前に見た夢とは決定的に違った。でも緋香里にはそれがわからなかった。

「君はここに来ちゃいけないはずだろう？だって君はイケニエなんだから」

そうはつきりと耳元で声が聞こえた。

#

——っ！

緋香里は何かいけないものを見た気がして飛び起きた。

「何、今の」

寝汗を掻いていることに緋香里は気が付き汗をそっと拭う。
ぐっしよりと手が湿った。

「気持ち・・・悪い」

微かななんてものではなく立ち上がるのも困難なくらい体調が悪い。
「今日は出かけられないな」

緋香里は携帯電話に手を伸ばし水仙に電話を掛けた。

【あ、緋香里ちゃん？どうしたの？】

すぐに水仙は電話に出た。

「体調悪いから今日遊べない」

【え、もう用意しちゃった】

「ごめんなさい」

緋香里はそう言うと言電話を切る。

「つつつ、下に降りて体調悪い事言わないと」

ゆっくりと緋香里は体を起こし足を少し引きずりながらあるき始めた。

「大丈夫?! 本当に顔色悪いわよ」

リビングに緋香里が入ると真っ青な顔で音菜はそう言い緋香里の額に手を当てる。

「すごい熱——今日は1日寝てなさい。後で薬とか持っていくわ、だから寝てなさい」

緋香里は言い返しませずにゆっくりと自分の部屋へと戻るとベッ
トに入ると布団にくるまった。

第6話 festival

「こっこかー、やつらの町は」

宮岸市で一番高い創縁山の上にある展望台、そこで一人の少年が
明るい声音で言った。

「そうだ、我等の仕事はこの町を潰すこと。早いところ終わらせ
るぞ」

「へーい」

#

「っっ」

緋香里が次に目を覚ました時、すでに時計は午後3時を回ってい
た。

「もう、こんな時間・・・」

緋香里は体をゆっくりと起こし周りを見る。

ベットの近くのナイトテーブルの上に風邪薬らしい錠剤と空腹時
に飲むこと！と書かれた薬に関する注意書きそしてコップと水がな
みなみと入っている水差しが置いてありそれ以外は特に何も変わっ
ていない。

「薬、飲まない」と

そう言つと緋香里はコップに手を伸ばした。

「あっ」

見事に倒した。

#

「そう」

緋香里が自分の部屋でコップを倒してしまっているその頃。

音菜は語と共に話をしていた。

「やっぱりもう限界を迎えているのね」

とても苦い顔をしながら語はそう言い下を見る。

「ええ、これ以上抑えて置くのはもう無理、私が戦うのをやめて全部を回しても暴走を引き起こしかねないくらい」

音菜も苦い顔をする。

「ならやっぱりあそこに連れて行って教えるしかないか・・・」

「それしかないわよ。今は簡単に言えばコップの淵ぎりぎりまで水を注いだようなものだから何かあったらすぐに暴走する状態よ。もうこちらにも時間は残されていないわ」

もう時間がない、その言葉に語はうなずく。

「調整はこちらでするわ、その代り緋香里ちゃんに必ずイエスと言わせて」

その時だった。

「つつつ、まさか!？」

微かな頭痛を感じたのは。

「なんでこんなタイミングで」

音菜は頭を抱えながらそう言う。

「とりあえず、待機させてる子たちを向かわせる。音菜は本部に連絡入れて」

「わかったわ」

音菜と語はそれぞれ鞆から携帯電話を取り出し電話を掛けた。

#

——宮岸市内、某高校。

「ふうん」

赤みの強い茶色の髪をした少女はにやりと笑い携帯電話を閉じた。
「どうしたの？」

そばにいた少年が少女に問うた。

「命令よ、宮岸市内に敵の侵入を確認。敵は5人以上15人以下、状況は最悪、少なくとも二人はクラス3、それ以外は5以上。繰り返し宮岸市内に敵の侵入を確認。敵は5人以上15人以下、状況は最悪、少なくとも二人はクラス3、それ以外は5以上——でも私達でやれない事もないってなわけだ。出撃命令よ。幸い敵の位置はわかってるんだし」

「そうだね」

少年はその答えに満足した。

——もう決まったことだしね」

その言葉に愉快そうに面白そうに少女は言う。

「祭りが始まるわ」

——争乱の火蓋が切って落とされた。

第7話 それは始まり、そして――

「はあ」

溜息を付きながら赤髪の少女は銃の弾倉を入れ替えた。

少女の名前は朝屋野々夏^{あさやののか}、この町で生まれ育ちそして戦う訓練を受けた少女である。

「めんどくさ」

そう言う少女に隣に立つ少年は――

「しかたないよ命令なんだから。ほら、顔顰めない。台無しだよせつかく綺麗な顔してんだし」

「な、恥ずかしい事言わないでよ。気が抜けるっ！」

少年の言葉に野々夏は顔を真つ赤にし怒鳴った。

「ちょ、怒鳴らないでよ。吃驚するし敵も気が付いて寄って来ちゃうかもしれないし、それに――」

「それに？」

言葉を切った少年に野々夏は聞き返す。

――来た」

その言葉に野々夏は緊張を高める。

「この話は後にしましょう」

なぜならその周りには土塊^{ゴレム}の人形が何体も直立していたからだ。

土塊^{ゴレム}の人形と言ってもその体はズルズルと溶けたように泥が落ち生理的な不快感を醸し出している代物だ。

「こんな気色悪いもの倒してからにしたほうがよく聞けそうだし」

戦いが始まる――

#

緋香里は夢を見ていた。
あまりにも悲しい夢を。

その言葉に緋香里はハッとした顔をする。
「行くわよ」

緋香里はその言葉に従うしかなかった。

第8話 ゴーレム（前書き）

戦闘表現があります

第8話 ゴーレム

あらかた周りの敵を蹴散らすと野々夏は銃口を降ろし、隣で日本刀を持参したタオルでふく少年に話しかけた。

「ねえ」

話しかけられた少年——日野 戸一ひの ひとは日本刀を鞘に納めながら、

「何？野々夏？」

とだけ答えた。

「いやあね何かこう言う付き合いも長くなるなーって。思い起せば生まれた時からだし、この腐れ縁もいつまでも続くモノなのかなーってね」

少しだけ考えると戸一はこう言った。

「うーんいつまでも続かないと思うよ、僕は。だってさ、いつまでも同じ道、歩く訳にはいかないだろうしそれに性別だって違うし」

「そう・・・よね」

声のトーンを落としたうえで聞こえないよう小声で野々夏はつぶやく。

「戸一の隣に居たって思いが伝わらないと意味ないもんね。だからあんな事言えるのね」

野々夏は顔を上げ、空を見る。

「さーて、行きましようか。そろそろ体も温まってきたとこだし敵さんも復活してきたしね」

その周りには先ほど蹴散らしたはずの泥の塊のような土塊ゴレムの人形がすっかり再生し口らしき部位をあけ立っていた。

「うわー日本刀錆びるからやなんだけどなー」

そう言いつつも戸一は日本刀を再び抜く。

「文句言わない。約束でしょ、戦ってる時絶対に文句言わないってしたはずだけど」

「あははは」

乾いた、明らかに棒読みな声で戸一はそうわらい、刀を正眼に構える。

「戸一はあいつ等を炎で思いつきり焼いちゃってちょうだい固めちゃえば再生しなくなるでしょ、それにたぶんだけど固まったら動かなくなると思うから手間が省けるしね」

簡単に会話をしているあいだに思いついた作戦を野々夏は戸一に説明し、うなずくのを確認してから銃の安全装置を外し弾の残量を慣れた手つきで確認した。

「行くわよ」

野々夏が地を蹴ると同時に戸一は刀を思いつきり右に振る。

「火炎泉！」

それと同時に暗示として大声でそう言う戸一、その時その手に握られた刀の先から炎が迸った。

一気に土塊ゴレムの人形達を炎が包む。

土塊の人形はそれに抵抗するかのようには足らしきものを動かすがそれを野々夏が拳銃の弾で撃ち抜き固まるまでの時間を稼ぐ。

それは一分の隙もなくあつという間に泥の塊のような土塊ゴレムの人形は出来損ないの土偶のようになって行動を停止した。

「あつたりー！」

声高に野々夏はそう言うのと近くにあつた物の頭を弾丸でぶち抜いた。

「うん、すっかり固まったみたいだね」

「あ、念のためにもうちよつと焼いとして、奥までしっかり焼かないと復活するかも」

「結構これ維持するのめんどくさいし、しんどいんだけど・・・」
辛そうな顔で言う戸一に野々夏は。

「私じゃ無理だから」

とだけ言った。

第9話 何度でも

「知ってたん・・・ですね」

緋香里は服の裾をつかみながらそう言った。

あれからしばらくして、音菜が逃げる用意を済ませた後の事だった。

なにかを必死に堪える様な顔で俯く緋香里に音菜は気が付きそつと話しかけた途端、微かな怒りの色を滲ませながらそう聞いてきた。

「そうよ」

短くそう答えると音菜は俯く。

あの日の事を今でも音菜は昨日のように思い出せる。

だが肝心の緋香里にはその記憶がほとんどない。だからこそ言えない。

「でも、詳しくは話しちゃいけない決まりなのごめんね。もう少ししたら話してもよくなると思うからそれまで待って頂戴。その時は絶対に全部話すから」

それにあの件の事は音菜の属すとある組織では第一種秘匿事項に値する事だ。

事件に関係した記憶を失いほぼ単なる一般人と変わらない状態になっている緋香里にはそう簡単には教えられない。

「ごめんね・・・」

「ごめんねで済むものなんですか？」

しばらくの空白の後、緋香里がそう切り出した。

「それって普通にごめんね程度で済むと思ってるんですか？」

明らかに怒っていると思われる声音で緋香里は続けて言う

「何にも知らなくて私は本当に辛い思いをしたのを音楽さんは知ってましたよね。それなのにどうして知らない振りをしてたんですか？どうしてすべてを知っているならどうしてもっと早くに言うてくれなかったんですか？どうして？何回言っただけで付きません何回でも言います。どうして隠していたんですか？教えてください」
一氣にそう言うのと緋香里は言いたいことを言っけすっきりしたのか再び荷物をまとめる作業に入る。

ただそれを音楽は苦虫を噛み潰したかのような表情でそれを見つめる事しかできない。

その全てが的を射ていてからだ。

（もう少しだけ、もう少しだけ私に権力があつたら）

何度も音楽はそう思った。

そうすればもう少しだけ今がましになっていたような気がするからだ。

（ごめんなさい、緋香里ちゃん）

何度だって音楽はそう心の中で言う。

それが彼女にできるせめてもの償いなのだから。

第9話 何度でも（後書き）

緋香里ちゃんが音楽さんにたいして丁寧語なのは音楽さんが自分よりも目上の人物だからです。

第10話 記憶と願いと

空が上がっていた太陽がだいぶ沈みかけているのに気づき野々夏は足を止めた。

「もうすぐ日が暮れるか、暗視スコープ取りに行った方が良さそうね」

そう言う野々夏、一方で戸一は、

「夜の市街戦——やりにくそうだね」

と、のんきに言った。

「そりやそうってあんたある程度視力強化するだけで暗いところでも昼間のように見えるはずじゃない。私みたいに遠くを見る事しか出来ないのとは違うんだから」

「そうだったねー」

その態度に思わず野々夏が戸一の事を殴りたくなったのは別の話。

閑話休題

「ねえ野々夏？」

いきなり戸一が野々夏にそう聞いた。

「ん、何？」

「やあ、なんか嫌にみんなの行動が静かだなーって」

「そりやあね、だって今日はあの子がすぐそばにいてそれをできる限り戦いに関することを感づかれないようにしないといけないからね。みんな慎重になってきてる」

野々夏はそう言う空を見る。

夕暮れの微かに桃色がかった空を。

「もう少し歩いたら着くから少し休憩しましょう」

音菜はやや厳しい顔で緋香里にそう言った。

家を出て早2時間、まだ5月の空はほんのりと朱に染まり出していた。

それでも緋香里は音の一つも上げず（緋香里は怒っていると黙り込む癖がある）ついて来ている。

「ねえ、緋香里ちゃん」

無反応。

「どうしたの？」

無反応。

「はつきり口で言ってくれない？（怒）」

無反応。

「はあ」

ここまで無反応を貫くということはそれほどまでに緋香里が音菜に対してとも腹を立てていると言う事だ。

そう音菜は思い、あえて無視することにした。

「つつ」

ふと緋香里が頭ををさえしやがみこむ。

「緋香里ちゃん、どうしたの？」

思わず走り寄る音菜。

だが緋香里は何かを恐れたかのような顔で地面を見つめるばかりだ。

「緋香里――」

もう一度音菜が話しかけようとしたその時――

「い、いやっ。来ないで、来ないでっ。いや、いや、いやあああ

ああああああああああああああああああああ

緋香里がいきなり叫び始めた。

何かを拒絶している。

とつさに音菜は思いあたりを見渡すが拒絶を起こしそうな物も人物も全く見当たらない。

「いやああああ、来ないで、来ないで、来ないでっ！」
だが、緋香里は何かに怯え、何かを拒んでいる。
そう音菜には見えない何かに対して――

#

緋香里にはそれが聞こえていた。

「御出でなさい貴女にすべてを全てをあげる。大切なものを守る
力もあげる。貴女が忘れてしまった事もみんな教えてあげる」

緋香里にはそれが観えていた。

飛び散る火花、異形の怪物、火を噴く刀。

全てがいきなり目の前に現れ脳裏に無理やり焼き付けられる。

響く悲鳴、壊されて行く町、動き回る何か。

そしてそれはどんどん古く忘れられた出来事を情報として強制的
に緋香里の中に情報として入ってくる。

それはこの町の全てであり一部であった。

それはこの町の記憶であり歴史であった。

そして緋香里の一部だったはずのものだ。

(思い・・・出した)

そして緋香里は――

#

「緋香里ちゃん？」

いきなり立ち上がった緋香里にそつと音菜は聞いた。

「行かないと」

そつつぶやく緋香里は走り出す。

「ちよっ、待って緋香里ちゃん！」

音菜はそれを慌てて追いかけた。

それが何を意味するか知らないままに。

第11話　そして始まる物語

——少し邪魔が入ったので作業を少し中断します」

そう異国風のワンピースを着た少女が言うとすぐ傍にいた男は緊張を高めた。

「邪魔？」

「そうです。『場』が番人に干渉を行ってその残留した力によって暫くこちらが干渉できなくなりました。そのためしばらく作業を中断します」

事務的な口調で少女はそう告げるとすぐ傍にある大木の根本に背中を預ける様な体勢で座る。

「ダメージが大きいので少し休息を取ります。何かあったらたつき起こしてください。あと調整が狂わぬようこの世界の人間を近づけないようにしてください」

そうとだけ少女は言うと瞳を閉じ眠りについた。

「はあ暇だなあ」

男はそうとだけつぶやくと周りを見渡す。

ここは宮岸市の中心部からやや離れた場所にある自然公園。

その奥にある立ち入り禁止区域のさらに奥、そこには異常なまでに成長した大木が高層ビルのごとく乱立している場所がある。

そこに男と少女はいた。

とある目的の為に。

「さあてと何して暇潰そうかねえ」

男はそう言うと凶悪そうな笑みを浮かべ森の方を見る。

「早く来て俺を楽しませてくれよなあ。古株たち」

#

「緋香里ちゃんそっちに行ったら駄目っ」

緋香里の腕を握り力づくで音菜は止めようとした。
なぜならその方向では今市街戦の真っ最中だからだ。
だが、

「放してっ」

その腕を無理やり引きはがすと緋香里は再び歩き出す。

「だから駄目っ！」

再び今度はとある力で強化した握力でその腕をがっしりと音菜は
掴む。

「五月蠅うるせえいつ！」

だが緋香里はそれ以上の異常な力でそれを振り払った。

「つつつ緋香里ちゃん！！」

全力で走り出す緋香里を音菜は痛む腕を抑えながら追いかける。
(早くいかないと)

緋香里はただその気持ちにかられある場所へ向かっていた。

自分があの日記憶を失った原因である場所へと。

#

「ん？」

サブマシンガンをフルオートで撃っていた野々夏はふと違和感を
感じ空を見た。

「どうしたの野々夏？」

手を止めた野々夏に戸一は聞いた。

「やあなんか違和感感じて。ま、気のせい気のせい」

そう笑顔で野々夏は言うと同化した泥状の土塊ゴレムの人形に向けて銃
を乱射する。

(ねえその絵面結構ひどいよ)

そう戸一は言いそうになってやめた。

今なら流れ弾やらなんやらの事故として撃たれそうだったか
らだ。

（ま、ホントは勘違いなんかじゃないんだけどね）
そう心の底で野々夏はつぶやくとポケットから携帯電話を取り出しある人物へとメールをした。

#

ブルルルルル

「ふみやつ！」

ポケットから響く音に背の低く貧乳の少女、水亀^{すいき なつめ} 夏目はは思わず飛び上がった。

「え、あ、あの何か連絡ですか？」

夏目に背の高い巨乳の地味な印象しか与えない少女、神谷^{こうや} 天音^{あまね}は聞いた。

「うげえ、野々夏からメール来てるなにに自然公園に行つて姫の到着を待てつてさ意味わかんない」

「と、とりあえず行きましょう」

そして二人は駆け出した。

第12話 さよなら

「あーもーなんでよりにもよってあいつに頼らないといけないのかね」

野々夏はそう言いながら銃で目の前にいる異国風の男の頭にゴリゴリと銃口を押し当てた。

「さーとつとと白状した方が身のためよー一等兵さん。でないとあんたの頭ぶち抜くわよー」

「し、死んでも吐くかつ！」

そう言い張る男を野々夏は銃床で軽く殴る。

「ぐっ」

「はいはいはい、威勢がいいのはいつまでかなー」

「野々夏、それ悪役のセリフ・・・」

テンプレートな悪役の台詞を言う野々夏に軽く戸ーがツッコミを入れたが野々夏はそれを華麗に無視し引き続きゴリゴリと銃口を男の頭に押し当てる。

「さあとつとと吐くっ！そうすれば楽に、楽になるわ———今すぐにでも」

「うわぁ」

野々夏のあまりの悪役っぷりに戸ーはドン引き、ついでに言えば男の顔も真っ青である。

「さあどうする？全部吐いて楽になる？それとも痛い目見て苦しむ？」

「絶対俺は吐かない！！」

男は逃げようともがくが野々夏は至って冷静な顔で銃口を近くのビルに向けた。

「どーなるか見せてあげる」

野々夏は銃の引き金を引いた。

ズドオオオン

ビルがあっけなく倒壊した。

「ん、なあああ!!」

それに驚く男、だが野々夏との付き合いが長い戸一は平然として
いる。

「はあ」

そつと野々夏は溜息を付くと銃口を男の頭に向けた。

「さあ、さっきの頭に食らってトマトジュース状態になりたい？
それとも吐いて楽になる？どっちがいい？」

それもありいい笑顔で。

「ひいひいひい、吐きます！吐きます！」

男は真つ青な顔でそう言った。

「じゃあまず最初になんでこの町に来たか吐いてもらおうかしら

」

そして男は話し始めた。

自らの保身のために――

#

「はあ、はあ、待つて、緋香里ちゃん」

あれから30分、空が紅に染まった頃やつと音菜は緋香里に追
いついた。

「いったい何があつたの？話して」

その肩をつかみやや強引に音菜は聞いた。

だが緋香里は――

「絶対に言えない!!」

そう言い緋香里は音菜の腕を振りほどく。

そして再び全力で走り出そうとしたその時――

「ちよつとまちにやさい!!」

囁んだ。

「待ちなさい!!」

そして言いなおした。

「あなた棘木緋香里さんね」

そう言ったのは茶色く髪を染めゆるくパーマをかけた今どきの美少女だった。

ただしその背はかなり低い方だった。

「あたしはあなたが来るのをずっと待っていた。ずっと、ずっとあなたがあの記憶を失ってからひたすら待ち続けていた。歓迎するわ棘木緋香里、あたしの名前は水亀夏目、あなたを非日常へと連れに来た者よ。さああたしと来て、この馬鹿げた戦いを貴女の手で終わらせて」

そう言つて夏目は少しだけ偉そうな態度で緋香里に手を伸ばした。その手を緋香里は黙つてその手を取った。

躊躇いは一切ない。

「音菜さん」

緋香里はそつと音菜の方を見てこう言つた。

「さよなら」

とてもとても悲しげな瞳で。

夏目の手を取ると言う事の意味を知っているかのように。
はつきりとそう言つた。

第13話 邂逅

「こつち」

あれから5分ほど経った頃、緋香里は夏目に手を引かれるまま古そうな坂島神社と言う神社に来ていた。

「ちよつと待ってて」

夏目はそう言って緋香里の手を放すと神社の方へと掛けて行き――

「起きなさい！！このドア（しじ）も紫月！」

思い切り怒鳴った。

「ふえ、なんか用か？」

「なんか用か？じゃないわよ！用意はできてる？それ以前に何で寝てたの！あたしはゆるしやにやいからにえ！」

また、噛んだ。

「許さないからね！」

「そこで噛んだらいろいろと台無しだろうが」

冷静なツツコミを緋香里からは影になっていて見えないところから入れる紫月、だが夏目は怒った様子で自分の事を棚に上げながら怒鳴る。

「とりあえず早いとこ用意しなさい！！」

かなり怒った様子の夏目に緋香里は目を向けた。

「すぐ猫っぽい。」

緋香里はそんな事を思いながら待つ。

しばらくして。

「待たせたな」

そう言って紫月は神社の社から出てきた。

紫月は身長はそこそこ高く髪は長く伸ばしうなじの所で軽く止め

ていたどこか飄々とした空気を漂わせる少年だった。

「うわ、こいつ夏目より背が低いじゃんか」

緋香里の蹴りが紫月に飛んだ。

「のわっ」

顔面に決まった。

#

「で、何か用かしら？」

かなり怒った状態で緋香里は紫月に聞いた。

「すいませんあんな事もう言いません」

それに対し紫月はなぜか謝る。

「私、今すごくあなたに対して怒っているのー」

すごくいい笑顔で、そして青筋をビキビキ立てながら緋香里が丁寧語で話しかけてきたからだ。

「もう少し態度で表してはくれないかしらー」

「すみませんすみませんすみません」

「もう平謝りはやめて欲しいんですけど」

夏目にはそれを眺める事しか出来ない。

——かなり怖いから。

「まあとりあえずもう一発殴るくらいで良しとしましょう。齒、ちゃんと食い縛ってないと舌噛みますわよ」

「はい」

そして緋香里の拳が紫月の頬に吸い込まれるようにして当たった。

「ぎゃふっ！」

綺麗に乗った体重はそのまま紫月の脳を揺さぶる。

「さて、いったい何の用なのかしらー」

緋香里は再び笑顔で言った。

説明を受けるために。

「そう」

野々夏はそう呟くと男に向けていた銃口を外す。

「これで必要な情報は手に入ったわ、嘘だった場合は——わかつてるわよね」

野々夏のキツイ眼光に男はビビった様子で何度もうなずく。

「よろしい」

まるで興味のなくなつた玩具を捨てる子供のように野々夏は男を視線から外す。

「じゃ、戸一、早いとこ行こうか」

「んんじゃあ飛ぶんだね」

「正解」

野々夏はそう答えると集中を始める。

自らの持つ異能を発動させるために。

彼女達やその敵はそれぞれに異能を持ち、それを使って戦争を行っている。

基本は全ての人間に宿っているが発動するのは本当に強い願いを持ち、尚且つ才能があるほんの一握り人間だけであり野々夏や戸一、夏目、天音、そして紫月もそのほんの一握りの人間だ。

その能力は才能と言ふ言葉から才と言ふ字を取り才と呼ぶ^{さい}

もちろん個人差があり戸一であれば炎や熱を操る事そして野々夏は自分自身を除いた人間以外の物に変身すると言ふものだ。

「こんなもんかな？」

そう野々夏は言うところりと体を捻る。

すでにその姿は人の物では無く俗に言う上半身は鷲、下半身は獅子の幻獣、グリフォンの姿に変わっていた。

「すごいねー野々夏は僕にはそんな事出来ないよ」

素直に褒める戸一に野々夏は少しだけ不機嫌そうに、
「早く乗んなさい」

とだけ言った。

「ああうん」

素早く戸一は野々夏の背にまたがると軽く首の後ろを叩き合図をする。

そして野々夏は空へと飛び立った。

第13話 邂逅（後書き）

ちなみに、夏目の身長は159cm、後はわかるな

第14話 籠の小鳥は夢を見る(1)

「はあああ」

深く深く野々夏は溜息を付くと酔ってぐったりとした戸一を冷ややかな目で見た。

「うつぶ、なんであんな飛び方す——うつえー」

「仕方ないでしょ、相手も対空用の技持ってたんだし」

野々夏はそうさりと言い手に着いた土埃を払う。

「頼むからいきなりレッドアウトターンとかヤメテ、マジで荷重で死ぬ——うつぶ」

「仕方ないでしょロックされたんだから」

シレッと野々夏は言い放つと携帯電話をポケットから取り出し夏目とは別行動を取っているはずの天音に電話を掛けた。

「もしもし、かめちゃん聞こえてるー？」

【聞こえてますっ！もうかめちゃんって呼ぶのやめてください！】
そう大声で言う天音の声に携帯電話のスピーカーがキーンとなる。

「あははは、ライトジョーク、ライトジョーク。それでそっちの様子は？」

あくまで楽しげに、そして微かな毒を含ませながら野々夏は天音に聞いた。

【あ、はい、自然公園にいるのは少なくとも4人紫月くんと夏目ちゃんが来るとカウントしてもちよつと危ういと思います。私の個人的な意見なんですけどたぶん相手の本隊だと思います。だって街中にいるのが比較的弱くコストの少ない泥状のゴーレムだけってちよつとおかしくありませんか？それに——

「それに？」

途中で言葉を切った天音に野々夏は聞きかえす。

—— 一番の実力者が森の奥、それも一番危険な立ち入り禁止区域

にいるみたいなんです】

その言葉に野々夏は少しだけドキリとし声音にそれを出さぬよう偽ってさらに天音に聞いた。

「それで『番人』は必要になりそう？なんなら一級装備の許可も取るけど」

【『番人』は要りそうです。状況が状況なので、一級装備ですが御願います】

「りょーかい」

そうとだけ言うとなつ々夏は携帯電話の通話を切った。

「さーて面白くなりそうねー」

さも面白そうに言う野々夏の横顔には獰猛な笑みが浮かぶ。

それは獲物を見つけた猛獣のそれとはたいして変わらない表情だった。

#

緋香里はただ夏目の後ろを黙って歩きながら思考を巡らせていた。まだあの日の記憶は一部しか思い出せないままで微かに思い出したのは宮岸市中心部よりやや離れたところにある宮岸自然公園の立ち入り禁止区域に両親と知らない誰かと一緒に入った記憶だけでありなぜそこに立ち入ったか、そこで何が起きたかまではまだ思い出せていない。それでも少しずつ引つかかりが取れていくようにあの日の記憶を思い出している。

「もう少しで自然公園に着くはずだから」

夏目はそう緋香里に言うとなを向き緋香里に見えないように気を付けながら苦い顔をした。

第15話 籠の小鳥は夢を見る(2) (前書き)

ひさびさの更新です。

第15話 籠の小鳥は夢を見る(2)

少しづつ宮岸自然公園に近づくにつれ緊張していくのが夏目にはわかった。

(あと少し、あと少しであの場所に着く)

あの場所さえなければ夏目はもっと幸せな生活を送っていたはずだ。

それでも夏目は足を止めない。

少しでもこの後に続く人々を楽にするために。

#

「うーん」

野々夏は唸りながら自分の持つ拳銃4丁、手榴弾^{バイナッブル}14個、拳銃の弾倉10本を広げ行く前にさらに追加を補給部隊から貰うべきかそれともこのまま敵陣の真っ只中へ戸一、夏目、天音、紫月とあと一人と棘木緋香里を守りながら突っ込んで行って素早く鎮圧を図るべきか悩んでいた。

「どうしたの野々夏？」

「あ、いや行こうか、行くまいかどっちにしようかなーって」

そう言うのと野々夏は素早く拳銃を腰のホルスターに、手榴弾をポシェットに、弾倉をポーチに仕舞うと立ち上がる。

「ま、こういう時はうちの参謀と話してみますか」

野々夏は先ほど手榴弾をしまったポシェットから携帯を取り出し恐らくは戦闘があちらこちらで始まる前——すなわち侵入を確認した時点から自然公園の近くに潜伏しているであろう人物に電話を掛けた。

【もっしもし田中君聞こえてるー？】

「僕は田中ではなく山田です」

そう言った電話の相手山田やまた たろう 太郎はやや不機嫌そうにパソコンのキーを素早く叩く。

「えっとこれからの指示ですがとりあえず僕が合流するまで南口で夏目たちのグループと待機、その後一気に突っ込みます。これ以上の事態の悪化は避けなければいけません、それに棘木緋香里のストレス、体力などの問題と乗っ取りまでのタイムミリットを考えると正直な話、それでもかなりギリギリです。なので急いでください。補給は無しでも一級武器の許可が下りているのでたぶん行けるはずです」

それだけの長台詞を一気に太郎は言うと言とパソコン画面の地図をにらむ。

（本格的に危険ッ）

内心ひやひやとしながら太郎はこの後の作戦を脳内で練り上げる。

【りょおーかい】

そうしている間に野々夏は通話を一方的に切った。

「さて、戸一。南口に移動するわよー」

明るく野々夏はそう言うと言と拳銃を1丁ホルスターから引き抜き安全装置を外す。

「あ、うん」

戸一は返事をすると言と立ち上がり野々夏と共に歩き始めた。

第16話 籠の小鳥は夢を見る(3)

「えつとーあーそのー」

だらだらと冷や汗を掻きながら緋香里は天音と共に目の前で繰り広げられる喧嘩を見ていた。

「ちよつと何よ誰がガンヲタですって！私の才は周りの被害を抑えるのに向いていないから仕方なく拳銃だとか、手榴弾だとか使っているのよ？あんたと一緒にしないで頂戴」

方や洋風の人形めいた顔立ちをした赤髪の黒いロングコートを着ている少女——野々夏。

「なんですって————じゃあにやんであんにやに武器庫に大量の銃やらなんやらがごろごろしてんのよ！ナイフだって使えるはずでしょっ！」

方や今どきの女子高生と言う感じのする噛み癖のある夏目。

「ま、まあ落ち着いて」

「うるさい！！！」

余計なひと言を言った戸一もその喧嘩に巻き込まれる。

「第一、何で銃にやのよっそれ以外の物もあるはずよ！」

「はあ？何？チームのバランスを考えたらこうなっただけだけどー？」

「ムキイイイイイイイイイ」

揚げ足を取られ怒りをあらわにする夏目。

「ほらほら喧嘩はいけないよ」

何とか二人をたしなめようと戸一は頑張るがそれは明らかに水の泡と化している。

「あれ、何とかならない？」

思わず緋香里はそう漏らした。

「あ、もしかして身長低いからロリキャラで後援ってたかった

のかしら？」

「なんですってー！」

「だつてまな板だしその上よく噛むしロリキャラ狙つてるとしか
思えないわよー」

上から目線で言う野々夏、そしてついに夏目が地雷を踏んだ。

「じゃああれ（緋香里の事）の低身長はどうなのよ!!」

ブチブチブチツ

その言葉と共に凄まじい殺気としか言いようのないものがあたり
に立ち込める。

「あーあ」

思わず紫月はそうつぶやく。

「だーれーがー低身長ですってー」

聞こえてきた低い声に夏目はビクリとする。

「言っている事と言ったらいけない事があることは知ってますわよねー」

パキパキと指を鳴らす緋香里、目は完全に座っている。

「ちゃんと教えてあげますわ——どんなにいけないことを言いましたか」

「いやあああああああああああああああああああああ」

約5分後

「いったい何があつたか説明を」

ようやく着いた田中は呆氣に取られたような表情で目の前で正座をする夏目と夏目に向かって丁寧語でビキビキと青筋を立てながら懇々と説教をする緋香里。

傍から見ればかなり怪しい光景である。

「説明をと言われてもなあ」

そう言いながら紫月は必死でこの5分間に起こった事を忘れるか
脳内に封印しようと思っていた。

「まあ、人には触れてほしくない所が一つはあると言っ事だ」
「そうですか」

納得していない顔で田中はそう言つとそつと溜息を付く。

（桜木さん、やっぱり僕には無理そうです）

第17話 籠の小鳥は夢を見る(4)

—— やっぱり、忘れちゃってるのかー」

緋香里の話を一通り聞いてから野々夏は呆れたような顔でそう言った。

「私とあなた、あの日に一度会ってるのよ？まああの後忘れても仕方がないことがあったし仕方ないか、覚えてくれていたらいたでいろいろ楽だったんだけどね」

あつさりとしたその言葉に緋香里は驚く。

たぶんこの人はあの日にあった事を知っているのだと。

「あ、私の名前は朝屋野々夏、このチームで後方支援兼、裏工作担当。でこっちが——」

そう言つて無理やり戸一を野々夏は緋香里の前に立たせる。

—— アタッカー兼、武器のメンテナンス者、日野戸一。あとあなたと一緒に来た紫月は中距離戦闘、夏目は気に食わないことに私と同じ後方支援、あそこにいるおどしてるのが神谷天音、ああ見えてがっちがちの肉体派でアタッカー、メガネかけてる典型的な委員長スタイルな人は山田太郎、うちの参謀ね」

そう言つと野々夏はパンパンと手を叩き全員を集合させた。

「さーてこれから一気に中心部へ殴り込みに行くわよ、作戦は一切ナシ、敵の出現による人数分散はアリ、ガンガンぶつかっていくわよ——！！」

「「「「「オー！！！！」」」」」

無理やりテンションを上げると野々夏はその足を宮岸自然公園へと向ける。

緋香里はそれについていく。

自分でもわからぬままに。

「！」

木陰で眠りについていた少女は違和感を感じ飛び起きた。

「どーした、お嬢？」

のんびりと男は少女に聞いた。

「敵に侵入されました。方向は南西、人数は7人うち2人からは奇妙な反応があります」

少女はやや事務的な口調でそう言い立ち上がる。

「私は引き続き同調を行います。あなたは敵を直ちに排除してください」

「へいへい」

男はそう言うといつと凶悪な笑みを浮かべる。
これから待つ戦いに興奮して――

#

鬱蒼と生い茂る緑の中を瞳を閉じ、歩きながら野々夏は普通では見えないものを見ていた。

（あっちの方が乱れてこっちは正常ね）

野々夏が見ているもの、それは才の流れである。

才自体はごく普通の自然――生命活動が盛んな場所に漂っている、わかりやすく言えば生命活動の残りカスのようなもので才を使える人と言うのはそれを自然と体内に溜め、尚且つ自由に発散、収束が出来る人と言う事だ。

才を見ると言うのは体質に依存するもので才を使えない人間が訳ありの持っていることが多く野々夏はその訳ありのグループに入っていた。

「野々夏、反応は大丈夫なの？」

戸一が不安そうにそう言った。

「うんまーねさすがにあっちも警戒しまくってるけど、たぶん私

と緋香里の事にも気が付いてるはずよ」

「やっぱりそうなんだね」

やっぱりと言う表情で戸一は言つと鞆を左手で軽く叩いた。

第18話 籠の小鳥は夢を見る(5)

ねえ、知ってる？自然公園の中心の方に幽霊が住んでるんだってさー

うそーマジなのそれ

マジマジ、うちの彼氏が言ってたんだからー

じゃ

あ今度見に行こうよ

いくいくー

それは他愛もない噂、真実と限りなく近い嘘

#

「つつー!」

少女は全身に激痛を感じ身を固くした。

(やはり一筋縄ではいかないようですね)

そう心の中で呟くと再び少女は瞳を閉じ浸食を始める。

#

「?」

ふと寒気を感じ緋香里は思わず足を止めた。

「どうしたの?」

疑問に思ったのか野々夏がそう聞いてきた。

「なんでもありません」

緋香里はほぼ反射的にそう返事をする。

すぐにその寒気も消えてしまったので言う必要性は無いと判断し

たからだ。

「ならいいわ」

野々夏はそうあっさりと言い捨てると周りに意識を集中させる。
その様子を高い梢から見下ろす影が二つ。

「ねえまちがいないよねー」

「うんまちがいないよー」

その影はどこまでもそっくりだった。

「じゃあいこっか」

「うんいこっか」

そして二つの影の主は梢から緋香里達7人の前にストン、と降り立った。

#

「はあ」

目の前に現れた敵を見てまず野々夏がしたことは溜息を付くことだった。

なぜならその二人は極彩色のド派手な服を着、ピエロのような化粧をしていたからだ。

「なんで誰も気づかなかったのよ」

「さあ？」

まったくもって謎と言う顔で戸ーが言った。

「ぼーくのなつまえはスルベ」

「わったしのなつまえはスルガー」

「二人合わせてスルベスルガッー!!」

（うわーよりもよってウザそうなの来たー）

野々夏はそう思いながら素早く腰のホルスターから拳銃を取り出し、パンパンと2発何の予備動作もなく撃った。

「ぎゃひつなにをするのかなー」

（チッ外したか）

避けたのか一発も当たらない事に心の中で野々夏は舌を打つと今度はしっかりと戦闘態勢に入る。

「野々夏、先行つてろ。ここは俺と天音で食い止めとく」

そう言つて紫月は天音と共に敵と対峙した。

「・・・ええ、頼んだわ」

野々夏はそう言つと緋香里についてくるようジェスチャーをし、走り出した。

「そうはいっかないよ」

そう言つて敵の片割れが野々夏に向かって飛びかかろうとする。だが、

「フギユツ」

天音がそれを思い切り殴りつけ軌道をすぐ傍にある大木に無理やり修正した。

「ちょ、スルガ！おーまーえらー、よくもぼくのスルガをー」

怒り心頭にスルベは天音と対峙する。

「女の子を傷つけるのは気が引けるけどスルガを傷つけたんだから僕の手でやつつけないとね」

「え、えつとお手柔らかにお願いします」

一方で紫月はスルベと対峙した。

「よーし、お前らの事、ボッコボッコにしてやつから掛かってこいよ」

「へーそれはそつちだと思つよー」

口元に先ほどの攻撃は効いていないと言つ趣旨の笑いを口元に浮かべながらゆらりとスルガは立ち上がる。

「よくみたら、男の子なのに綺麗な、顔してるねー嫉妬しそー」

「そりやどうも」

軽口を叩きながら紫月は頭のギアを戦闘用の物へと変えていく。

一方天音は拳を開いたり閉じたりしながら感覚を確かめた。

戦いが始まる――

第19話 戦闘開始

「セイツ！」

「うわあととと」

天音の先ほどとは明らかに違うキレとスピードの拳を見て慌ててスルベは避けた。

「次は外しません」

きりりと言う天音に対しスルベは

「え、ちょこれはないよ、女の子が肉体派ってうわっ」

腹部にしっかりと入った天音の拳にスルガは吹っ飛ばされる。

「どんだけー、体力どんだけー」

空中で体制を立て直したのかスルベはしゃがんだような体制で着地。

「まあ僕にかかれればあつという間に倒せるはずだけどね！」

自意識過剰なのかそれとも本気なのかスルベは偉そうに言った。

「さあ始めようかー幻想茶会イイー！」
ファンタスティックパーティー

スルベがそう言った瞬間、ぐにやりと空間が曲がるような感覚が天音を襲う。

否、重力が増えたのだ。

「ふーん3倍でも立ってられるんだーすごいねー」

そう言うスルベの手には先ほどまで無かった手棍ワンドが握られている。

「なら次は4ばーい」

ズドツと天音の体にかかる重力が増える。

「つつああ」

思わず天音は喘ぎ声を漏らした。

「へーまだ耐えるまだ耐える。ホントにすごいねー」

他人事のように言うスルベ、だが天音は顔を上げる。

「おお、すごいすごい」

全身の関節が軋む音が体の中から聞こえ天音はそろそろ普通の状

態で立っていることが限界だと悟った。

そして――

「来いっ、ソウガ双牙ッ」

天音がそう言った次の瞬間天音の両腕を鈍色の光が包んだ。
そしてその光は徐々にある物の形を取り始める。

――手甲だ。

手甲と言ってもよく時代劇の忍者が付けている物とは違い手の甲から肩に至るまでが完全に鈍色のプレートで覆い隠されている。
ファンタスティックパーティー

「それなんだい、防具？ そんなでばくと幻想茶会と戦う気かい？ ばっかじゃないの」

小馬鹿にするようにスルベは言った。

だが天音はまっすぐスルベの方を見ながら体を起こす。

「これは単なる防具ではありません」

その目には闘志だけがあった。

#

「いつちやうよー！」

先ほどから自分の方に向けてすっ飛んでくる水の玉を避けながら紫月は勝つための算段を立てていた。

（天音の野郎双牙使いやがったな）

そんなことを思いつつ紫月はスルガの才がなんであるか大体の見当を付けて行く。

（水関係なのは明らかだな、だがなら何で剣の形にして飛ばしたりしてこねえんだ。そっちの方が攻撃力が上なのに・・・）

そして紫月はとりあえず攻撃をすることにした。

「来い、レイライ黎雷」

彼がそう言くと目の前に稲光が一瞬だけ走りその中から一本の槍

が表れる。

「奔れ」

紫月がピタリとスルガにその穂先を向けた。

するとその穂先から一筋の雷光が伸びスルガを襲う。

だがスルガはその雷光を水で叩き落とし紫月の方を見る。

「へえ君雷使いなんだー」

顔はへらへらと笑っているがその目は笑っていない。

「どうだろうな」

紫月は含みを持たせた笑みをスルガに向けもう一度雷光を射出させる。

「うわつとと君危ないなー」

それをギリギリで避けたスルガ。

「まあわたしも本気出すだけし――

ノウンセンスハット
「戯言帽子！」

スルガがそう言ったその時、世界が捻じ曲がった。

第20話 動く者、静まるもの

何度も、何度も、地に這いつくばり強くなろうと私はもがいた。けれどみんなは先に行つてしまつていつも私は一人、残されるばかりで私は無力だった。

守られてばかりで何も出来ない事に腹を立て、全てを捨て去ろうとした。

けれど――

#

「少し、休憩しましょう」

野々夏は少し慌てた様子でそう言つとあたりにざつと目を通した。

「はあ、はあ」

緋香里はかなり状態であつたためその休憩をありがたいと思つていた。

「あの、すみません」

「っ！」

いきなり声をかけられ思わず緋香里は飛び上がる。

「驚いているところ申し訳ありませんが、少し荷物を持つていてくれませんか」

太郎が――あまりにも似合いすぎる――ずり落ちたメガネを戻す動作をしながらそう言った。

「あ、はい」

反射的に緋香里は返事をする。荷物を受け取る。

（意外と重い・・・）

見た目に反しかなり重いバックの持ち手を緋香里は握りしめた。

#

「ついさっきまでここに居たっぽい感じ」

そう言って少女は足元の土に触れる。

「まあこんなことわかってもしかた無い、早いところ被害食い止めないといけないしねえ」

つまらなさそうに少女は言つと限りなく白に近い白銀ブリチナの髪をかきあげた。

「ほんツツツツツツとに野々夏とか太郎とか仕事遅すぎて死ねって感じ」

そして少女は市街地の方を見た。

「さ、面倒くさいけど行きますか。上司直々の命令だし」

コートのように羽織っている白衣の裾を翻し少女は町へと走り去っていった。

#

「ふんっ」

全力で天音はスルベに向かつて一撃を放った。

だがスルベはそれをひらりと避け迷わず蹴りを繰り出してくる。

それを天音は手甲で受け止めそのままその勢いを利用してバランスを崩そうとした。

「へーなかなかやるじゃんかー」

スルベは両手をわざと地に着け逆立ちのような格好になるとそのまま後転しそれを守る。

「さーってどうしてそうも立てるのかなー？フシギ、ビックリ、驚愕ー」

スルベがそう言った途端に天音の体を感じる重さが一気に増える。「いい加減、倒れたらどう？」

天音はその言葉をあえて無視すると自分に与えられた力を体現するべく集中を開始した。

「まだ、悪あがきする気なんだーでもぼくが、倒してあげるー」。

だってスルガを傷付けたんだからー」

脂汗が額を滴り落ちていくのを感じながら切れ切れに天音は言った。

「悪あがき、なんて、私は、いつも、してます。けれど――

――けれど、だからこそ、私はいつも、いつも、一番前で、戦う事が、一番、あつて、いるんだと思います」

そしてゆつくりと小声で天音は囁く。

ソウキョウハンガ
「双鏡反牙」

#

「へえ、すごいじゃん、わたしのアレで狂っていないのー」

そう言うスルガの前に紫月は息も絶え絶えの状態になっていた。

「まあ、いいや次で止め刺したげるー。わたしの兎の踊りラビットダンスでね」

スルガは残忍で冷酷な微笑をたたえながらそう言った。

第21話 一人目

何十合目になるのかわからない攻撃を槍で受け止めながら紫月は少しづつ、だんだんと相手の攻撃が速くなっていることに気が付いた。

「あれえ、気づいちゃった〜？」

明るい声でスルガは言いながら再び長剣で切り付けてくる。

「わたしのチ・カ・ラ」

カキン、と言う甲高い音を立てその刃を槍の穂先で受け止めると紫月は距離を取るべく後ろへ飛びずさった。

「まあ、遅いよね。わたしの『^{ラビットダンス}兎の踊り』はもう発動しちゃってるんだしっ」

狂ったようにケタケタと笑いながらゆっくりとスルガは紫月の方へ向けて歩いてくる。

紫月はこの現象を見た事があった。もう二度と戻る事のないあの日に。

（クソッ、才の暴走による精神崩壊かつ！）

才は絶大な力であるため常に使用者は強大な精神力を必要とされる。

そうであるが故、その力に耐えきれなくなった人間の精神はいとも簡単に崩壊してしまう。

今のスルガがまさにその状態だった。

「安心してえあんたの事たっぷり黴ってやりたいから殺さないからあ」

やたらと耳に着く甘ったるい声でスルガは物騒な事を口走った。

「あ、でも、あの身長が高いあの女の子なら殺しちゃうかも」。すっごくいじめてからね」

一気にダッシュで紫月との距離を詰めると剣の背の方でまるで棍棒を扱うかのように紫月を殴る。

「ぐあっ」

吹き飛ばされたものの紫月は空中で体制を立て直し受け身をどうにか取る。

「だあめでしょう避けちゃあ、全然つまんない」

（完全にイツてやがる）

紫月は心の中でそうつぶやくと立ち上がった。

「むふふう、まだ立つんだあ」

それを見てスルガはより一層邪悪な笑みをこぼした。

#

ゴウ、と言う音に慌てたようにスルベはその体をのけぞる。
だが、

「うわっ」

その体が急に重くなっただかのように感じそのままバランスを崩してしまった。

「な、何で僕の力を・・・」

驚愕の表情を隠せないスルベ、だが天音は動きを止めず蹴りを繰り出す。

その蹴りを地面を転がりながらスルベはどうにか避けるとその勢いのまま立ち上がる。

「そう簡単に教えませんよ」

そう言つと天音は今までの倍近い速度の拳をスルベの腹部に叩き込む。

「グホッ」

その拳に乗った速さのまま、スルベはかなり離れた地面に叩きつけられた。

「どう・・・して」

地面に這いつくばるスルベの方へ向けてつかつかとブーツのヒールの音を立てながら天音は歩く。

「どうしてってわからないんですか？それならそれで都合がいいですけど」

天音はスルベのすぐ傍でポケットからある物を取り出す。

それは拳銃によく似た形をした俗に言うNNI——無針注射器と呼ばれる許可を持つていない一般人が持つてはいけない医療機器で、その隙間から見えるアンプルの中にはとある人物が作り出した毒々しい蛍光色のしびれ薬が入っている。

もちろん、そんなものであるとスルベは知らず何をされるか、と言う恐怖でスルベの心はいっぱいだった。

「安心してください、何日間か体が動かなくなるだけで特に大きな副作用は無いのは自分で体験済みです。しばらく眠っていてください」

そう言つと天音は脳震盪でろくに動けないスルベの首にNNIの先端を当て銃で言つトリガーの部分を引きいた。

第21話 一人目（後書き）

やっちまっ た感があるのはたぶん気のせい・・・

第22話 Combat Scientist 前篇

[illegible]

神速で迫ってくる剣の刃を前髪を何本か犠牲にしつつどうにか紫月は紙一重で避けた。

「つうつつ
レイライ
黎雷つ
」

槍の石突で紫月は地面を一度叩き地面に電圧を流す。
だがスルガはそれをもとめせずに突っ込んでくる。

ここまですでに紫月は何度も剣で浅くだが頬や腕を切っており、とても万全とは言えない状態になっていた。

スルガにも何度か入った紫月の攻撃のダメージが蓄積されているはずなのにもかかわらず戦闘当初よりもスピード、やキレが格段に上がっている。

（マジで死亡フラグ総立ちじゃねえか！）

何度か紫月は死を覚悟させられたがそのたびにスルガはわざと攻撃を寸止めし、宣言通りに紫月を全力で倒そうとしてはいなかった。

「あはははははははははは。本当にすばしっこいやあ、でもわたしが仕留めてあげるー。絶対に絶つつつつつつつ対に仕留めてあげるー。これ決定だからあー。きやははははははははははは。」

完全に狂ったスルガを前に紫月はただ防戦一方しかない。

そしてその言葉に死よりもひどい目に合うと紫月が思ったその時

「ふーん、面白そうな検体じゃないの」

「最悪の、想定だにしていなかった最も最悪の援軍の声が聞こえた。症状はレベル7の才の重度の暴走による精神崩壊、加虐衝動タイプ。これだけ狂ったタイプは初めてね」

冷静につらつらとその白に限りなく近い白銀の髪ブラチナの少女はカルテ
か何かを読むように言った。

「まあ、安心しなさい、処方さえ間違えなければ死ぬことなんか
ないんだから」

そこまで言うとう今度は少女は全くもって無防備な姿でカッーン、
カッーンと履いている赤いハイヒールの靴音を響かせながらスルガ
の方へと歩いていく。

「な、何でお前がここに――」

思わず紫月はそう言った。

なぜなら彼女は全く別のところで戦っているはずだった。

きちんと野々夏隊長の命令を聞いているのならと言っのならば。

「ん、やあ暇だし、桜木さんがあっちの方が面白そうだから行っ
て来いと言ったから泥人形に合うたんびにその辺にいるやつらに

――トレインって言っただけまあ要するに擦り付けてはまた
会って、そしてまた擦り付けてを繰り返して来た」

「周りの迷惑じゃねえか――」

しれっととんでもないことを言う少女に思わずいつものノリでツ

ッコむ紫月。

だがそれは思わぬところに火種を飛ばした。

「わたしのこと無視するなあああ――」

才の暴走によって極度の興奮状態にあるスルガがその呑気な会話
にブチ切れ力任せに剣技を少女に向かって繰り返す。

だが――

「言っとくけど、あんたの攻撃で私は倒せない、近接戦闘タイプ
ならなおさらね。逆にあんたがミンチになって無駄死にするだけよ」

――その剣の刃を無数の黒光りする刃が抑え込みその少女の肌
には全く届かない。

「くうっ」

もちろん、周りには紫月とスルガと少女しかいない。

その刃は少女の体から白衣を突き破って生えてきていた。

「この、虚城^{うつしろ}、白莓^{しろいすけ}、患者^{あんだ}のことを救ってあげるわ。確実に」
そう言つと少女——白莓は白衣を脱ぎ捨てた。

第23話 Combat scientist 後編

白苺が現れてから約10分、戦いは白苺が一方的にスルガを弄んでいた。

「っ！くそつあたれ、当たれええええええ」

無茶苦茶でそれでいて一撃一撃必殺の威力を秘めた一撃を白苺はある時は手の甲から、ある時は指先から生やした刃で受け止めている。

「そんなに慌てて、当たる訳なんかないわよ」

冷静に白苺はそう言うと言っているハイヒールのヒールでスルガのから空きの腹部へと蹴りを一発入れた。

一度スルガはバランスを崩したもののすぐに立て直し白苺へと切り込む。

だがその一撃は呆気なく避けられ当たることはない。

「ふん、本当にばっかみたい」

白苺はそう言うところある程度の距離を開けるため一気に後ろへ飛びずさる。

「まあ、私の患者^{相手}なんだし、本気で行かせてもらいますか」

無論、スルガがその隙を見逃すはずもなく剣を大上段に構えまっすぐ白苺の方へと突っ込んでいく。

それが最大のミスだと気づかずに。

「首狩り大鎌ッ」
ギロティン

次の瞬間、白苺の手には大鎌が握られ、白苺はそれを何のため躊躇^{ためら}いもなくスルガに向けて振り下ろした。

スルガはとつさに足を止めその大鎌の刃を剣で受け止めようとする。だが大鎌はさも当たり前のようにその剣をすり抜けスルガの体に吸い込まれるように牙を剥く。

「あんただけが痛みを背負う必要なんかないわ。楽になんないわ」
シュキン、と言う軽い音を立てその刃はスルガの体を――

「ゲホッゴハッ」

白莓に助け起こされ紫月はどうにか立ち上がる。

「ふん、ボロボロじゃない。女の子相手に手加減でもした？」

「そんなこと言うな！ウエホッ」

思わずツツコミ紫月はむせた。

「お前こそ、あいつの事、助けられたのかよ」

そう言う紫月の目線の先には倒れてこそいるものの小さな傷しがなく大きな刃物による傷など全くないスルガが横たわっていた。

「まあね、暴走の原因がトラウマっぽかったからね」

白莓はあっさりとした口調でそう言うところからともなく青い、明らかに怪しげな薬の入った試験管を紫月に渡す。

「飲みなさい、治療薬よ。飲めば数分で傷が癒えるはず。私が調合した薬だからたぶん大丈夫よ」

すたすたと白莓はスルガの方に歩み寄りその首筋に先ほど天音の使っていたものと中の薬品まで同じNNIを付き立てた。

「もう次に目を覚ましたら怖い事なんてないわ、だから安心して眠りなさい」

そして白莓は何の躊躇いもなくトリガーを引いた。

第24話 白い霧と緑の閃光

「白苺が来たみたいね」

野々夏は白苺の才を感じ取り戸一に向けて言った。

「うん、そうみたいだね。たぶん、どっちかの方に助太刀に行っ
たんじゃないかな？」

「たぶんそうでしょうね」

野々夏は戸一の言葉に対しそう答えると後ろに向けて気を配る。

今、殿は突発的事態に強い太郎が担当している。
しんがり

その前に緋香里、緋香里の左右に戸一と夏目。そして野々夏は先
頭だ。

（まあ敵もそれなりに警戒してみたいけど私も一応警戒してお
いた方がいいわね）

心の中でそつと野々夏はつぶやくと前方に意識を向けた。

#

「野々夏ちゃん達、上手くやってるんでしょかね」

語は思わず空を見ながら祈るように言う。

「はい？」

その言葉に直属の部下である空野そらの いのち 祈は思わず聞き返した。

「いや、ちよつとこのあいだの子がさ今、野々夏達と一緒にいる
んだけどさ。ちよつと不安でね」

「ちよつと、ちよつと言い過ぎです。まあ、たぶん大丈夫でしょ
う。僕的には少し、特に夏目あたりが不安ですが」

「それもそうよね」

語はそうつつぶやくと目の前にある敵を見つめ祈と共に敵陣へと切
り込んでいった。

（あーもー、何よこの子）

夏目はそう思いつつ周りを警戒する。

正直な話、夏目は緋香里と言う少女とは今日が初対面だ。

野々夏はどうやら一回あった事があるらしいがそんなことは当然、

夏目には関係なくアホな上司の命令でなかったらはずきり言つてここには来なかっただろう。

「ふう」

隣で緋香里がなぜかいきなり溜息を付き夏目はビックリした。

（ちよ、今のなんなのよ！）

そう思いつつ夏目は口にはしない。

「あ」

ふと、野々夏が足を止める。

「戸ー、煙幕張つて。指定は特になし、範囲は半径20メートルフラッシュで援護するわ。太郎はここに残って敵の追撃を」

野々夏が言ったその言葉に少し戸ーは驚き、そしてすぐに行動を

開始した。

「来て、ヒエン緋炎、ヒヨウ氷葉」
アウエイク
スインヨウ

「目覚めて！翠昌」

野々夏と戸ーが同時に太郎に聞こえる最小限の音量で言う。

野々夏の手には翡翠色の光が、戸ーの手には緋色と淡い水色の光が集まりそれぞれが形を成していく。

「ねえ、それいたい——」

「少し、目を閉じてなさい」

野々夏はそう言うと言に現れた巨大なライフルによく似た銃を空へ向ける。

「いくよ、ヒョウエンバクム氷炎爆霧」

戸ーが言った次の瞬間ボボボボンと言う音を立てて周りに煙幕——と言うよりむしろ霧と呼んだ方がいいものがあたりに現れ

た。

「いつけえ！」

すかさず野々夏が躊躇いなく銃のトリガーを引く。するとそこから激しい緑の閃光が走り回り、周りが一瞬見えなくなる。

「逃げるわよ！」

野々夏は素早く身をひるがえし迷わず緋香里の手を掴むと走り出す。

「え、ちょ、うわっ！」

バランスを崩しながらどうにか緋香里はついていく。しばらくするとそこには太郎だけが残された。

「そろそろ、隠れてないで出てきたらどうですか？ご客人」

誰のいないはずの梢に向けて太郎が言うとその梢の上に突如として一人の男が現れる。

「やっぱり、ばれていましたか。うまく隠れたと思っていたんですが……」

女性的な微笑みを浮かべながら男は目を細める。

「バレバレです。その程度で騙せると思わないでください」

太郎はただ冷静にありのままの事を言う。

「さて、始めましょうか」

男は狐のような笑みでそう言くと梢から飛び降りた。

第25話 めんどくさがり

（はあ、何で僕はいつも面倒な役回りなんでしょうか？）

心の中でそう思いつつ太郎は目の前の男と対峙した。

（まあ、そんなの関係ありませんが）

正直に言って太郎はとも体力がなく天音の超近接格闘や野々夏の銃剣による近接戦闘のような近距離戦闘ははつきり言って全く向いていない。

その上、才もどちらかと言うと補助向きで直接的な攻撃には向かず、攻撃するにしても一步間違えるとあたり一帯焦土と化す。

（かつたるいですね、野々夏の指示とはいえ僕が直接攻撃に向いていない事は百も承知、なぜ？）

「君、どうして私に攻撃しないんだい？」

気障なしぐさで男は言った。

「まあ、君を倒すのがこの私、フェデリウスの仕事だしね」

一気に距離を詰めにかかるフェデリウス、太郎は後ろへ飛びずさりさらに距離を開ける。

（やっぱりやるしかないんですか）

「はあ、おいで知識書架」
ノウエンジブックケース

太郎がそう言い手を空中へと向ける。

一瞬でその手のひらには古びた革表紙の分厚い本が現れる。

「僕って面倒くさいことが苦手で、5分で形をつけましょう」

バララと一気に本をめくり適当なページで太郎は手を止め朗読を始めた。

「It was in the old days of England, when instead of one King, there were many, who divided the country between them, and

d constantly made war upon each other, to increase their possessions. The noblest of all these Kings was Arthur. He was the son of Uther Pendragon, and he succeeded to the throne at a very early age, though not without great trouble, as the knights and barons said they would not be ruled over by a "beardless boy," and if he wanted his crown he might fight for it. However, by the aid of an old man named Merlin, who was supposed to have magic powers, the rising insurrection was stopped, and young King Arthur was crowned with great pomp in London.

低く朗々とそして早口で古英語からなる伝説の一説を太郎は読み上げる。

「来たれ」

短く太郎が言つとその背後に光の門のようなものが現れた。

「君、それはいったい――」

フェデリウスが戸惑いを隠せないと言う表情でその光を見つめる。なぜならその向こうからとても大柄な人間が歩いてきたからだ。

「僕の力ですよ。単なるね。まあ古英語なのは単なる僕の趣味ですが」

事も無げに太郎は言つと本を閉じる。

もうその必要はなくなつたと言わんばかりに。

「さて、やっちゃってください、先を急いでいるので」

誰に言うでもなく太郎は言うとすたすたと歩いていく。

「御意に」

彼とほぼ入れ違いに一人の大男が光の門をくぐりフェデリウスに切りかかる。

フェデリウスの意識が刈られるまではそう時間は掛からなかった。

第25話 めんどくさがり（後書き）

太郎君が読み上げていたのはアーサー王の伝説の一説です。
と、言う事は――

第26話 とにかく欲しい状況説明

手を引かれるまま、緋香里は野々夏達と共に走っていた。

もちろん、野々夏の片手には長大な深い緑に輝く恐らくは形状が

アンチマテリアルスナイパーライフル

ら言って対物用狙撃銃と思わしき明らかにその辺の女子高生が持つていては、それ以前に戦場で最前線で戦っている兵士でさえ持っていないブツだ。

しかも、質量はかなりのものであるらしく彼女が一步、地面に足を付けるだけで足元のふかふかの土にかなり深く足がめり込んでいる。

それ以前にどこから出したかすらもかなり怪しい。

「少し、足を止めましょう」

そう言って野々夏が足を止めたところで緋香里は少しカマをかけてみる事にした。

アンチマテリアルスナイパーライフル

「ねえ、それって対物用狙撃銃よね」

緋香里がこの手の銃器の事を知っているのは偶然にパソコンでやっているMMORPGでよく似た銃がそう分別されていたからだ。

「そうだけど、どうして知ってるの？コレ対物用狙撃銃の正式名称がアンチマテリアルスナイパーライフル対物用狙撃銃だって」

第一段階終了。

心の中でひそかにガッツポーズを決めると緋香里は第二段階へと移る。

「たしかそれってかなり重いはずよね」

たしか小学2、3年生とほぼ重さは変わらなかったはずだと思いつながら緋香里は言った。

「うーん、重い、のかなあ？正直な話よくわからないわ。でも、歩きたびかなりの勢いで足が地面に沈み込んでるし、わっかんないなあ」

野々夏はそう言っとぼりぼりと頭を掻く。

「ま、いつか」

「ま、いつかじゃいけない気がするんだけど」
思わず戸一はツツコミを入れた。

「それよりも、いろいろ説明しなくていいの？アレとか」

「べーつに後でいくらでも出来るでしょ」

「そう言うもんかなあ？」

二人の会話から作戦が失敗したことを緋香里は悟る。

（まあ、そのうちわかるか）

あきらめが早い緋香里だった。

#

「うーん」

背伸びをして背中 of 筋肉を伸ばす白苺を見て紫月はすっかり治った頬の傷に触れる。

（本当に治りやがった）

白苺の力は既存の物を変質させたり、無理やり叩ききったりすると言つもので先ほど紫月に飲ませた薬や背中から生えた刃もその応用にすぎない。

「さーで、野々夏を追いかけてかないと、あんたはもう少し休んでなさい。こっちで何とかするから」

「ああ」

おとなしく自分は休んでおいた方がいいと判断し紫月はその行為を有難く受け取る。

「それにしても、少し野々夏がおとなしいわね」
疑問に思ったのか白苺がそう口にした。

本来、野々夏の戦闘スタイルは超近距離からの銃の乱射とあたりに爆音をまき散らすため先ほどの閃光の際の一発だけだと明らかにおかしい。

「まあ今回は仕方ねえだろ出来る限り静かにしねえと簡単に居所

を知られちまうみたいだしな」

「ふーん、なーるほど」

わかっていそうでわかっていない、そんな口調で白母は言つと紫月をその場に残し走り出した。

第26話 とにかく欲しい状況説明（後書き）

やっと、好きな銃器の説明が。
いやっほう

第27話 少女は大剣を手に

心は要らない、戦いに情けは無用。戦うための人形として自分を作り替えられる人間こそ至高の存在。

何度もそう言われた。けれど無理だった。
ある一人を守るにおいて以外は。

#

（ヒソヒソ、ヒソヒソ）

なにかが近くで囁いてきたような気がして緋香里は足を止めた。
「どうしたの？なんかあった？」

野々夏が呑気に銃を背負いながら緋香里に聞く。

「誰かが耳元で何かを囁いた気がしたけど、気のせいかなと」
たぶん気のせいだ、緋香里はそう自分に言い聞かせると前を見た。
「それもそうね、戸も夏目もそんなことするわけないし」

野々夏もそう言い切り、周りを軽く見渡す。

とくに人影もなく、さらには動物と言った物の気配まで無い。

（さすがに不気味ね）

前に野々夏がここに来たときはもう少しいろんなものの気配がした。
た。

それなのにもかかわらず全くと言っていいほど静けさに森は包まれている。

（危険を察知して逃げ出したのね、ま、関係ないけど）
安楽的に野々夏はそう考えると軽く溜息を付いた。

#

「ふー、こんなものかしらね」

語はそう言つと手にした細剣を軽く払い祈の方へと歩み寄つた。

「こんなものかつて、何度か危なかったですよ。何でそれを軽く言えるんですか」

冷静に祈は言つとそのまま手にしたメイスをまだ足元で腕一本になつてもなお動かんとする土塊ゴレムの人形に振りおろしグチャ、と言う音と共に粉碎する。

「ほら、現にいま生き残りがいたじゃないですか」

そんなこともどこ吹く風で語は明後日の方向を見ていた。

「うん、まあいいじゃないの」

「よくありません」

すつぱりと語の一言を祈は切り捨てると、長い溜息を付く。

「どうしてもう、あなたはだらしな――」

ドゴオッ！

――いすねって今のっ！

凄まじい音と共にいるか前方で盛大に土煙が上がった。

「ええ、あれだけ盛大に土煙上げる馬鹿はひとりしかいないもの――」

――私が知る限りは」

冷静に語は言つとそちらの方へと走り出した。

#

「ふう」

少女は泥の中に立っていた。

「これで終わるか、齒ごたえがないやつらめ」

あつさりと少女はそう言つと手にした剣を持ち上げる。

その剣は見た目こそごく普通の西洋剣とは大差がないがサイズは軽く少女の背丈の3倍はあった。

それを軽々と少女は振るうと再生を始めた土塊ゴレムの人形を一気に薙

ぎ払う。

「遅い！」

鈍重な土塊ゴレムの人形はその一撃を避けきれずあっという間に再び泥水へと戻っていく。

そこからはひたすらに一方的な戦いだった。

第28話 瓦礫の山

「なんでこうなるのかしら」

語は半ば諦めの表情でそう言う。目の前の光景を見た。

散乱する瓦礫、アスファルトは抉り取られむき出しになった水道管からは水が噴き出しその上周りの家は一軒残らず全壊して瓦礫の山になっているか半壊状態になりながらもしぶとく立っているか。大地震どころか戦争——実際そうなのだが——が起きたかのように見える。

だが、それは実際には一人の少女の攻撃の余波を食らっただけであり直撃していれば確実に砂と化しているはずであることから当人もある程度の手加減はしたらしい。始末書を書かされる語にとつてはいつそのこと砂にしてももらえれば片付けは楽なのと言う世界だった。

「仕方ありません、あのユイなんですから」

同じような顔で祈も言うとはあ、と深い溜息を付く。

「そうよね」

——和音 かずね ゆい ユイ、別名破壊屋。

絶対的な破壊力を持つ身長の3倍を超える大剣を常に担ぎ一撃でビルを倒壊させるまるで人形のような女子高生、それが和音ユイと言う少女である。

語は何度か会った事があるが真面まおもに会話出来るのは白莓と野々夏くらいなもので常に無表情、その上常に寄って来るんじゃねえオーラと言うべきものを発散させているため語としては実に扱いづらいタイプの人間だ。

とはいえ、彼女は語の管轄のうちにいる野々夏が部隊長の部隊に半ば押し付けられるような形で入っている上、野々夏や白莓ストッパー、破壊力で言ったら同レベルの天音が抑止力となっているため目立った行動はあまりしていないのだが。

「はあ、もうちょっと後片付けの事、考えてもらいたいところだわ」

野々夏の部隊は正直な話、ユイや白莓、そしてフランス人形が立って歩いているとしか思えない双子の姉弟などふつうなら手に余る人間ばかりが集められている部隊で語クラスの上官なら3つは抱えるはずの部隊を語は野々夏の部隊だけしか管轄に入れていない、むしろ入れられない。

「しかたないですよ、成果はほかの部隊よりも上げてますし」

「でも問題も多いわよ」

語をフォローして逆に祈はジト目で睨まれ硬直する。

他人が観たらさぞや滑稽に見えたのかもしれない。

#

そのころ、遠くで自分の話をされているとは露知らず、和音ユイは口元に着いた土を乱雑に袖で拭う。

「せいぜい雑魚ザコはこんなものか」

あたりには元土塊ゴレムの人形の泥が飛び散りユイもまた髪や服の一部に泥を付けていた。

「そろそろ、行かないと白莓あたりにド叱られそうだな」

そんなことを思いつつユイは口元に微かに笑みを浮かべる。

「その前にこれを片付けないとな」

その前には先ほど倒した泥の土塊ゴレムの人形とは違う明らかに質量感が違う灰色の岩でできた灰色のビル並みに大きい土塊ゴレムの人形がそそり立っていた。

そのころ、野々夏達は。

「これ、さすがに無理そうね。一人残して突破なんて」

「うん」

「そうにえ」

その前にはユイが対峙している土塊ゴレムの人形とまったくもってそっ

くりな土塊ゴレムの人形がいた。

第29話 憂鬱少女へアンドロイドガール 少々キレる(前書き)

今回少々グロ目めな表現が出ます

第29話 憂鬱少女へアンドロイドガール 少々キレル

ゴアアアアア。

大きな声で咆哮する土塊ゴレムの人形を前に野々夏は平然と銃を構える。
「動くなよ」

しっかりと標準をゴーレムの脚部に合わせると躊躇マズルいなく野々夏は引き金を引く。ズドオと言う大音量と同時に緑の噴射光マズルフラッシュがたかれ弾丸がまっすぐに土塊ゴレムの人形へと直進していく。

だが、

「うそ、戦車でさえ木端微塵なのに」

それだけの威力は無いでしょう、緋香里は心の中でツツコミを入れ目の前の土塊ゴレムの人形を見つめる。

とはいえ、対物用狙撃銃は人が食らうとジューズ状態になりかないほどの威力があり、非人道的な武器として対人使用が禁じられている銃で岩ほどの硬さの物ならばいとも簡単に打ち砕く——はずだ。

だが土塊ゴレムの人形は直立していた。脚部に恐らくは着弾点と思わしき穴をあけながら。

「夏目」

と、ここで何かを思いついたのか野々夏が夏目を呼ぶ。

「なに？あたしは言っとくけどサポートしか出来にゃいわよ？」
また噛んだ。

「ちよつと耳貸して」

そう言つて野々夏はそつと夏目の耳元に手をやり何かを囁く。

「ほらさ家にある——みたいな感じに出来ない？」

「出来にゃい事もにゃいけど・・・」

「よし、決まりね」

肝心なところは聞こえなかったが勝算が立つたらしい。

「御出で、啼月^{ナキツキ}」

音もなく、光もなくすうと夏目の手に一つの弓が現れた。

「そいじゃ、お願いね」

言われなくてもわかつていいると言つ顔で夏目は何も番えていない弓を構える。

「矢は？」

思わず緋香里はそう口にした。

「ああ、あれは武器と言つより楽器つて言つた方が近いかな」

その疑問に戸^{めいげん}ーが答えた。

「あれは鳴弦^{めいげん}つて言つ神事なんかで使う、弦をはじいて音を出す専用の弓で元から矢を番えられない——番える必要のない弓なんだ。だからあれは武器つていふより楽器つて言つた方が近いんだ」

「へえ」

緋香里はそう言つと夏目に視線を向ける。

「動かないで頂戴ね。ずれたら周りが大惨事なんだから」

ゆっくりと腕を上下左右に動かしながら夏目は標準を合わせるかのようにきりきりと弓を引き絞る。

「えいつ」

ビイイイビイイイビイイイ

短い呼気と共に夏目は一度二度三度と弓を弾き音を鳴らす。

そして土塊^{ゴレム}の人形はその音と共に砂屑へと姿を変えた。

#

「ふん、やっぱりデカブツだから言つても所詮は雑魚^{ザコ}の使い捨ての雑兵か」

ユイはそう言つて大剣を薙ぎ残つた腕を粉々に破壊する。

「私は本当にこつ言つ戦い方をする奴が大っ嫌いだな」

それは独り言。

「だから、だから私が止めを刺してやる」
明確な殺意の籠った独り言――

第30話 溜息少年、憂鬱に

「げほつごほつ」

砂煙にむせながら緋香里はどうにか立ち上がる。

あの後一気に土塊ゴレムの人形が倒れ掛かってきてそのあおりを食らい大量の砂ぼこりにまみれながらバランスを崩し地面に倒れてしまったのだ。

小石が飛ぶ中どうにか無傷だったのは単に運が良かったとしか言いようがない。

「なんで、あんた手加減しなかったのよ！おかげで頬、擦切っちゃったじゃない！」

「充分手加減しましたわよつ、それを避けきらないあなたがわるいんだからねっ！」

「それに第一、あれだけド派手に飛ばすなんて聞いてないわよ！」

「はあ？あれだけデカいの倒して残骸の被害がないなんてそんな訳ないでしょうが！」

だから後ろの喧嘩は完全に無視する。

「ごめん、いつもあんな感じだから気にしないで置いてね」

戸一がフォローとしてそう言うがあの喧嘩は止まらない。

（あーもう、どうにでもなりなさい）

心の中で緋香里はそうつぶやくと空を見上げた。

#

「あー、白莓め、やりやがったな」

森の入り口の茂みを見て少年は溜息を付いた。

少年の名前は赤原あかはら 最早いちばはや、最も早いと言う名前を冠している割に

は足がとても遅く、その上その辺にいつぱいいそうな少し個性がある今どきの高校生と言う風貌の先に森へ突撃していった白莓とはた

だならぬ関係の少年である。

「皮膚を刃物に変える薬を飲んで森の木を早い話ぶった切って突き進んでいったなありゃ」

足元に落ちている試験管に残っていた微かな液体の匂いを頼りに最早は白莓がどんな薬を飲んだかを推測、そのまま白莓が突き進んでいった道を歩きはじめる。

「あーもう、こんなことすんなよ、普通の女の子アピールするくらいなら」

その場に少しの憂鬱を残して。

#

まるで空を飛ぶようにビルを足場としユイは例の大剣を手に移動していた。

（少し、風が強いな）

そう思いつつもユイは足を止めずに移動を繰り返す。

何度か脆くなっていたビルに足がめり込み動けなくなったがそれでも周りを大剣で破壊し、再び地面をけり上げる。

その繰り返しでユイは大分、町の中心街から離れた創縁山のふもと付近まで来ていた。

「ここ、みたいだな」

おそらく、ここに来ればあの土塊ゴレムの人形を操っている当人がいると連絡が入り、それと同時に倒してしまうよう命令が入ったからだ。

「さて、とつとと倒して――」

「そうはいかないよ」

後ろから突然声を掛けられユイは振り向く。

「最初に来たのがお姉さんだとは思わなかったなあ、まあ倒しちゃえば一緒だよな」

そこにいたのはまだ年端もいかない一人の少年だった。

ここは鳥籠、鋼鐵^{こうてつ}でできた冷たく狭い鳥籠。

だから私は逃げ出したかった。でもそれすら私には許されなかった。

私がいたのはそんな世界だった――

#

「はあああああつ！」

強い呼気と共にユイは踏み込み一気に距離を詰める。

ズパンと言う小気味のいい音と共に空と人形が叩ききられた。

「あはははは、おねーさん足、速いなあ。でも、ぼくは足早い方が好きだよ、だっていつぱい楽しめるんだもん」

明るく少年は言うとともに3体の人形をユイの元へと向かわせる。だがユイはそれを一刀の元に斬り捨て足元に叩きつけた。

「これが間違っているとは思わないのか！」

ユイは少年に対し問うた。それが無駄だと知っていても。

「え、そんな訳ないじゃん。いつだって一番力がある人間が正義で一番弱い人間が悪なんですよ？それならばくはいっつも正義だよ！」

自信満々に言う少年、ユイはその間違った答えに昔の自分を重ねた。

『もう、誰も信じたりなんかしない！だって、いつも私は弱いから悪なんでしょう？それなら私はもう誰も信じない！』

その時に自分の全てを受け止めてくれた『人形遣い』の事をユイは絶対に忘れたりしない、だからこそユイはこの少年の在り方に対し間違っているとは思えないのだ。

「そんなのは違う、誰かを信じる事が正義なんだ！」

誰かを信じない限り届かない声、それでもユイは少年に向けて言
った。

あの『人形遣い』が諦めなかったように。

#

「うーん」

携帯を片手に唸る野々夏を見て緋香里は何をやっているのだろう
と思う。

「やっぱり少しずれてるわね。私達、どっかで攪乱されてたみた
いね」

どうやら携帯のGPS機能で現在位置を調べているようでどうや
ら予定していた場所と位置が違うらしい。

「やっぱり、太郎の所の人が幻覚師なんじゃないかな、それで位
置がずれたんじゃない？」

太郎の意見に野々夏はうなずくと携帯を閉じる。

「5分くらい歩けばすぐ着くわね移動しましょう」

野々夏はそう言うのとゆっくりと歩き始めた。

その後ろにほぼ惰性で緋香里は付く。

迷子になりそうな気がしたからだ。

この予感はその遠くない未来に現実となるのだがそれはまたいつ
かの話。

閑話休題

（さつきから足が痛い）

緋香里は先ほどから足に微かな痛みを感じていた。

家を出た時に履いていたのはその辺で売っている運動靴だったが、
森に入るまえにやたらゴツイ鉄入りのブーツを野々夏から履くよう
に言われそれを今は履いているがなんせブーツを履きなれていない

ためさつきから踵と爪先が痛い。

そして鉄が入っているため靴底や脇の部分が固く、かなり歩きにくいのもまた原因の一つだ。

一方で野々夏は長ズボンを穿いていることからくるムレにイライラしていた。

（あーもう、痒い。今すぐ掻きたいけど目の前で掻くのはちょっとはしたないなあ）

結局、二人とも我慢した。

第31話 小鳥よ小鳥、願わくば飛び立たん事を o p 1 . 聖者は誰がために

今回の話にはテーマがあります。

そしてこれがプロローグのラストエピソードとなりますのでお楽しみ。

第32話 小鳥よ小鳥、願わくば飛び立たん事を o p 2 聖者の騎行、深紅の

今回、かなりの流血表現があります。

何度目になるかわからないもののユイは目の前に現れた人形を大剣で叩き切った。

「あれー、まだ死なないんだ」

「・・・」

ユイの体はすでに怪我でボロボロの状態になっていて体の彼方^{あちこ}ち方から血が噴き出している。

（くっ、もう少しスタミナを考えれば良かった）

目の前の少年は『人形遣い』であるがために防御も攻撃も人形任せであり全くとっていいほど体力を使っていない。

一方でユイは特大の大剣を振り回す上、動き回らなければ敵の攻撃を食らいかねない。

とはいえユイも前方での戦闘向きであるがために体力は高いが、避けきれない攻撃を身に受けるたび少しずつダメージが溜まり、動いている最中であるため呼吸法を使って痛みを抑える事も出来ず気が付いたらこの様である。

（アレを使うにはまだ出血量が足りない。だからと言ってこれ以上怪我を負うと後で敵が来る前に輸血が必要に―――輸血？）

ユイの力はある程度の出血量が無いとないと攻撃に使えないと言う代物なので常に自分の血をあらかじめ輸血用として抜いておきそれを隙を見て輸血していたりする。

そしてそのパックは幸か不幸か無事ですぐに使える。

（さて、隙はあるか？）

人形の攻撃を受け流しながらユイは考えた。

少年の攻撃には一定の恐らくは指示を出すための隙がある。その隙を付き砂埃を立てるなりして視線を逸らせれば充分に取り出せる。そう確信し一瞬の隙を突きユイは自分の立つビルに思いつきり刃を付き立てその破壊を利用し砂埃を立てる。

（頼む、上手くいってくれ――）

そう思いながらユイは素早く腰のポシェットに手をやり輸血パックを取り出す。

「おねーさん何やってるのかなあ」

目の前から人形が現れもげかけの腕から矢を射出する。

「つつ！」

ユイはその矢の前にワザと輸血パックを投げ破裂させ当たる前にわずかに体を逸らし避けた。

「ねー中身はなあに？なんかの薬なの？」

「お前には関係のない話だ」

そう言つとユイは高く高く跳躍し残りの輸血パックを放り投げそれに思い切り剣を叩きつける事によって破裂させる。

「？何で血を――」

匂いで気が付いたのか少年は顔を上げた。

「私だけの騎士団を呼ぶためさ」

ユイは混乱を招くためにそういう中で神経を集中させる。

「騎士団？ばっかじゃないのそんなのなにに決まってるよ」

「それはどうかな？」

そしてユイは呼ぶ、自分が使える力を使って作り出したものを。

「来い！」

その瞬間、瓦礫を核に血液を外殻にした深紅の騎士が次々と周辺のビルへと飛び乗っていく。

姿は槍を手にしていたり、剣を手にしていたり、同じく瓦礫を核に血液を外殻にした深紅の馬に跨ったりとしているものの全て同じ鎧を着こんでいる。

「形成、逆転だな」

先ほどまで少年は数で上回っていたが見事に逆転され苦虫を噛み潰したような表情になった。

「そんなの見かけ倒しだ！行け！」

少年はやや焦った表情になり言つと人形たちにユイを襲わせる。

だが。

「言つとくが騎士は全て自我を持ち、私に忠実でなかつ命令などなくても私の事を守り、敵を滅ぼそうとするぞ」

その人形はあるものは刺し貫かれ、あるものは切り捨てられ、あるものは吹っ飛ばされていた。

「う、嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ、嘘だああああ」

のどが張り裂けんばかりに少年は叫んだ。

「己が道の恥を知れ！」

ユイがそう凛々しく言つと騎士たちはいっせいに人形の方に向け襲いかかった。

そのユイの姿はまさしく騎士団の団長に見えた。

第32話 小鳥よ小鳥、願わくば飛び立たん事を o p 2 聖者の騎行、深紅の

一部ユイのセリフを変更

第33話 小鳥よ小鳥、願わくば飛び立たん事を o p 3 ・ 威風堂々(前書き

前回に引き続きグロい表現が多いです。

全力で森を駆け抜けながら最早はひそかに自分の足の鈍さを呪った。

とはいえ才で強化しているので一般人から見ればそこそこに足が速いように見える。

（くっそーこれくらいの距離、白苺なら40秒だぞ、何俺は1分もかけてるんだ）

そんなことを思いつつ彼は走る。

ひたすらに、ひたすらに。

#

森の中心に近づくたび、少しずつ何か、得体の知れないものの気配が強まっていくことに緋香里は密かに恐怖を感じていた。

（何でかは知らないけれど、すごく怖い）

そう思いつつも緋香里は同時にそこへ行かなければ行けない気がし足を少しだけ早める。

その事を目線の端でとらえながら野々夏はそれに合わせてペース歩くペースを少々あげた。

「野々夏、今たぶんユイがどこかで派手に殺りあってる。このままいくとアレを使わずに済みそうだね」

戸一がそつと野々夏の耳元に囁いた。

「さあね、まだ肝心の要がどうなるかわからないから一応用意しておいて」

野々夏はそう言うと言の腰の拳銃の重みを確かめる。

（もう、引き返せない。ううん、引き返したくない。引き返したりしたらあの人に悪いから）

目頭が熱くなってくることに気が付き軽く目元を袖口で拭う。

その袖口は様々な思いを秘めた涙で湿っていた。

#

「だあああああッ」

一息に手にした大剣をユイは振るい目の前の人形を打ち砕く。

（大分脆くなってるな、弱って来たか）

そう予測し、ユイはズブズブと近くにいた深紅の騎士の体に腕を沈める。

（正直な話、ある程度力で失血処理はしているが最初の方の失血量でしんどい。このままギリギリと長期戦に持ち込むよりも一気に短期決戦にした方が後から楽だから一気に攻めるっ！）

「来い、喰滅^{クメツ}」

そう言つてユイはその手を騎士から引き抜く。

「ひ、ヒイッ！」

「どうしたのか？怖いのか？それも当たり前だなコレはそう思われても仕方ないからな」

そう言つてユイは先ほどまで使っていた大剣を足元に捨て騎士の中から引き抜いたものを両手でつかむ。

ゴポリ、と薄気味悪い音を立て気泡がソレの表面に浮かび上がった。それは破裂し膿をまき散らした。

生理的な嫌悪感を土塊^{ゴレム}の人形以上に催すソレをユイはまるで剣を構えかのように持つと目の前の少年をにらむ。

実際ソレは剣の形をしており大ききだけなら先ほどの大剣と同じだが明らかに別のなにか——そう、まるで得体の知れない化物をそのまま大剣にしたかのように見えた。

「これが醜悪極まりない私の唯一の武器だ。敵を食らう、剣の形をした本物の化け物。さて、お前はどつする？」

ユイは超然とそう言つと喰滅^{クメツ}と呼んだ化け物を手に騎士らと共に人形の群れへと飛び込んでいく。

威風堂々とした足取りで。

——いつか、いつかずつと一緒に平和なところでいつまでもあな
たと幸せに過ごせますように』

君はただ囁くようにそう言ったね。

けれど、俺は全く別の事を祈った。

『君がいなくなつて仕舞いませんように』

そうとだけ俺は願った。

裏切りだとしても。

#

「よお、やつと来たか」

突然上から聞こえてきた声に野々夏達は顔をあげた。

「ふうん、男1人に女3人か、しけてんな。俺は女子供苛める趣味はねえのによ」

木の上に瘦せたごく平凡な見た目の男が立っていた。

そう言つと瘦せた男はポリポリと頭を掻きながら戸一の方を見た。

「ま、せいぜい楽しませてもらいますか」

男は木から飛び降りる。

剣を構えたまま。

「暇つぶし程度にね」

戸一はとつさに前に出て緋炎^{ヒエン}でその剣を受け止める。

コキンと言う乾いた音と共に剣をはじくと戸一は氷葉^{ヒョウ}の背で男の体を薙ごうとした。だが男はそれを紙一重で避けると一気に至近距離へと踏み込んでくる。

「せいやつ」

気合と共に戸一は二刀を構え剣を弾く。

「野々夏達は先行つてて、こいつはたぶん僕が目的だ。だから早

く！」

その声に野々夏はハツとし、慌てたように緋香里の手を握ると走り出す。

「ふーん、わかってるじゃないか若人よ」^{わこひ}

男は楽しげに言う。

「さて、どんな事をして俺を楽しませてくれる？」

戸一はただ刀を構え答えない。

それこそ研ぎ澄まされた刃のように。

#

「だあああっ！」

呼気と共に白莓は一気に手にした大鎌を振り下ろす。

彼女の周りには市街地をうろついているものとは違っしつかりと岩でできた土塊^{ゴレム}の人形が山のようにいた。

（くっ、せめてあいつが居れば・・・）

そう思い歯噛みをしつつ白莓は舞うように戦っている。

白衣が翻るたび辺りには破壊がまき散らされ、時折投げられる試験管の薬品によって周りには爆風が巻き起こる。その繰り返しでどうにか白莓は身の安全を守っていた。ただし、試験管の薬品をすべて使い切るまでと言う制限つきの安全だが。

（クソッ、私は、無力だ）

近くまで寄りついてきた土塊^{ゴレム}の人形をどうにか吹っ飛ばすと白莓はそのままの勢いで後ずさる。

「せやっ！」

再び、薬品を投げ込み土塊^{ゴレム}の人形を粉碎すると白莓は深呼吸をし、再び群れへと突っ込んでいく。

その時だった、彼が来たのは。

「うおおっ！」

ブウンと言う低い音と共に土塊^{ゴレム}の人形が一気に粉碎され、白莓の

目の前に少しだけ気づった自分の一番好きな、むしろずっと傍に居て欲しい人物が現る。

「馬鹿」

ほんの少しだけ照れたような表情で白莓は言つとその人物の元へと走り寄つていく。

「悪い悪い、ちょっと手間取った」

少し長めにカットしたシャギーの入った黒髪を掻き揚げると少年はニイと笑う。

「ホントに待ったんだから、この最早の大馬鹿」

白莓はそう言つと真つ赤に染まつた頬を隠そうともせずまっすぐ最早の顔を見る。

「まあ、少しくらい良いじゃないか。さて、どうする？ 久しぶりに一緒にやるか？ こう見えても俺、強くなつたんだぜ？」

それくらい虚勢だとわかつている。でも白莓は躊躇わず頷く。

最早しか自分の動きにぴったりと合わせ、尚且つミスも完全にフオーしてくれる人間はいないからだ。

「よし、久しぶりにやりますか」

最早がそう言つて手に持った巨大な槌を肩に担ぐ。

ちよっぴり、その背中が白莓には頼もしそうに見えた。

それが願いであるのなら、君は望めばいい。心のままに。

#

「はあ、はあ」

息を荒げながら野々夏は手にしていた銃、スィンヨウ翠晶を腕で抱えた。

（少しはこれで・・・）

そう思いながら野々夏は木に背中を凭せ掛けながら緋香里に言った。

「緋香里さん、これからたぶん、命がいくつあっても足りない状況になってくると思う、嫌なら私達と一緒に来なくてもいい、ただしそのかわりあなたはとても大切な物を失った上で失った記憶を取り戻すチャンスはもう二度と来なくなる。一緒に来るのなら命を失ったり、一生残るような怪我を負うかもしれない、二度と元の自分に戻れなくなるのかもしれない、だからこれから5分だけ時間をあげる。よく考えて答えなさい」

「ちよつとそれっていつたい――」

野々夏に対して問いかける緋香里、野々夏は言いたいことを言つたと言う風体で精神を集中させるため目を閉じる。

後には呆気に取りられた様子でたたずむ緋香里と、暗い顔で俯く夏目が残された。

#

「おうおう少年、速いねえ」

戸一が二刀から繰り出す変則的な太刀筋を一本の剣でいなしながら瘦せた男は後ろへ後ろへ下がっていく。

「そうですか？避けているあなたのほうが速いと思いますが」

「だはは、それは言わない約束だ」

男は晴れやかに笑うと素早く剣を戸一の太腿めがけ剣を付く。だが戸一は素早く左手の氷葉ヒョウで防ぎ躊躇いなく弾きあげる。

「行けっ！」

緋炎ヒエンから緋色の炎が吹き出し男を襲う。だが男は弾かれた勢いを利用してその炎を払った。

「ふーん、その剣からは炎が出るんだな」

男は感慨深げにそう言うのと距離を取るべく後ろへ下がる。

「さーてこれからは本気で行こうか」

そう言うのと男は髪をかき上げ剣を構えた。

「少年にも本気を出してもらうよ、見た感じまだ5割も出してない感じだし」

#

5分後、野々夏はそつと瞳を開け緋香里の方を見た。

「さて、決まったかしら」

野々夏は出来る限りはつきりと言った。

「ええ」

緋香里は野々夏の顔を不安がっているような、それでいて決意に満ちた表情で見る。

「私は、あなた達と行くことにした。もう、後悔はしたくないから」

（いっちょまえにいい顔して――）

そう思いながら野々夏はゆっくりと自身の口の中で転がすように言いかえす。

「判ったわ、それが『答え』であるのなら。どんな危険があっても進む覚悟があるのなら。私は構わないわ」

（たとえ引き返せなくなっても棘木緋香里と言う人物は自分で進

んできけるのかしら)

心の中に一つの懸念を胸に潜ませながら。

第36話 小鳥よ小鳥、願わくば飛び立たん事を

o p 6 ・ 約束、重ねて（前

今回短いけど許して

野々夏と夏目は早足で、しかし緋香里が追いつける速度で宮岸自然公園の中心、表向きは自然保護のために通常は立ち入り禁止になっているエリアを歩いていった。

（しかし、いつ来ても気配が濃いわね、ホントに吐きそう）
そう思いつつも野々夏は足を止めるわけには行かない。

役目を果たすまでは進み続けなければいけないからだ。

「緋香里さん、顔色悪いけどどうかしたの？」

ふと見ると緋香里の顔色が心なしに青白くなっていた。

「何でもないわ」

はつきりとそう言い緋香里はどうにか強がる。

「そう、でも我慢し過ぎないでね、倒れたらこっちの責任になるんだから」

もちろん、野々夏はそれに気が付いていた。

（むしろ気が付かない方が変よね）

それくらいに緋香里の顔色は悪い。

（あー、なんかやな予感がするわ。白苺が最早とどんちゃんやってる気配があるし、ユイは喰滅^{クメツ}持ち出してきたみたいだし、ほんと報告書書く私の気持ちになつて欲しいわ）

そう思いつつ、野々夏は向かう。一番大嫌いな思い出の詰まった場所へ。

#

「恵土^{ケイド}！」

そう言つて最早は思いつきり地面を手に行っている大槌で叩いた。
地面があつという間に地割れを起こし数体の土塊^{ゴレム}の人形を飲み込んでいく。

「草走、雷底、水破つ！」
クサバシリ ライテイ スイハ

今度は数体の土塊ゴレムの人形をまとめて吹き飛ばしそのままその先の
大木がその体を抱き留め雷を浴び水で押し流されていった。

それらは全て白莓に対し攻撃を加えようとしたもので最早はそれ
を正確に狙いつつ敵を殲滅させていた。

（さすが、この年にして最強の名を欲しいままにしてるわね幼馴
染。最早ま、御人好し過ぎるしフオーロー向きな性格してるから天音同様
何にも言われてないけど）

そんな事を思いつつ白莓は大鎌を振りぬきまとめて土塊ゴレムの人形を
吹っ飛ばす。

（あーもー私なんか立つ瀬無いじゃない）

それでもと白莓は思う、それでも最早は白莓と交わした約束を。

その約束を最早が守り続ける限りずっと自分の傍に立ち続ける事
を。

#

足りない、まだ足りない。

主の命令にはまだ足りない。

あの者を消さなければ――

第36話 小鳥よ小鳥、願わくば飛び立たん事を o p 6 ・ 約束、重ねて（後

はいはい、次回鬱でっせ。

にしても終わるかわからねえ

8月中にはどうにか第1章に入りたい・・・

その気配に一番最初に気が付いたのは野々夏だった。

「伏せて！」

いきなり野々夏はそう言うと同方へ向け銃を乱射する。

ド派手な着弾音と共にチャリと何か金属が地面に落ちる音が微かに緋香里の耳に入った。

（大当たりってどこかしら）

そう思いつつ野々夏はさらに銃を今度は誘う事を目的に数発発射、そのまま前方へと走りながら後ろの夏目に守りつつ付いて来る様合図を出す。

（さーて、本腰入れますか）

はつきりと言って流れ弾が当たらないか少しだけ心配で全くと言っていいほど野々夏は銃を撃たなかったが夏目がまだいるためその心配はいらない、そう心の中で思いつつ野々夏は頭のスイッチを戦闘用へと切り替える。

スライショウ
「翠晶形態変化、モード銃剣」
パヨネット

野々夏がそう言うと同にした銃器、スライショウ翠晶が形を変え2丁の長い銃剣を取り付けられた接近戦向けの拳銃へと姿を変えていく。

「勝てるといいわね、冗談抜きに」

嘆息しつつ野々夏はこちらに向けて投げられた金属製のなにかの投擲地点へと向かう。
とつてき

木を無理やり蹴り上げ、邪魔な太い枝を拳銃による狙撃で壊す。

野々夏はそうして前へ前へ突き進んでいく。

（さあ、来なさい来なさい来なさいっ！）

発砲音など大きな音を立てているのは相手の注意を引くためとイラつかせるためだ。恐らくこれで夏目達に戦闘の飛び火は来ないだろう。

——ジャララア

（鎖！？）

こちらに対し飛来してくる物体の形状と音で野々夏はとっさにその判断、それを銃で撃ち軌道を変える。

（危ない、危ない。もうちょっとで間に合わないところだった）
今ので野々夏は敵がいる方向がはっきりと分かった。

「さーて、行かせてもらうわよ！」

一気に足に力を入れ野々夏は距離を詰める。少しでも早く決着をつけるために。

「だああああ」

野々夏はまるで指が痙攣を起こしているかと思えるほどの速さで連続して拳銃のトリガーを引く。

「遅いわ」

ほんの少しだけ、幼さを残した声が響き次の瞬間には鎖が銃弾の全てを弾き飛ばしていた。

「趣味悪いのね、そんな騒音を出す物を使って親がよく怒らないわ。まあ、戦いには関係ないんですけど」

「ああ、そう。鎖の方が趣味悪いと私思っけど」

野々夏の視線の先には一人の黒い日傘を差した真つ黒な見るからに暑そうなフリッフリのコスロリを着たまだ小学生低学年程度の年齢にしか見えない少女だった。

「あらそうかしら？　そう言うあなたの髪色の方が派手すぎて私的にはとても戴けませんわ。染めるならもう少し上品な色になさい」
ワザとらしくそう言う少女に対し野々夏は青筋を立てつつこう言った。

「ごめんなさいね、これは地毛なの。だからあなたにどうこう言われる筋合いはないわよ」

「あらまあ、あなたみたい髪色の方がほかにいますって、ああなんと汚らしい。すぐに皆殺しにさせていただきます」

（あ、今カチンって来たかも）

野々夏はひくひくと口角を無理やり吊り上げ髪を軽くかき上げる。
そして一深呼吸。

「てんめえぶっ殺すぞオラ！家族の事バカにすんじゃねえ！」

#

「っ！」

いきなり聞こえた大声に緋香里は思わずビクリとする。

「あー野々夏キレた。私は知らない」

夏目はそう言つと深い溜息を吐く。

（ああ、本当にキレさせた相手、ご愁傷様。せいぜいボロボロに
されるがいいわ）

野々夏をキレさせた世にも不幸な人の事を考えながら。

第37話 小鳥よ小鳥、願わくば飛び立たん事を o p 7 . 鎖（後書き）

真打登場ツツツツ！

ズドオンと定期的に響く銃声を余所に夏目は緋香里の手を引きつつ前を目指していた。

（もう少ししたら開けた場所に出る。少し場所はずれちゃうけど仕方ないわ。あの戦闘の中心には出て行きたくないしね）

そう思いつつ夏目は緋香里がいまだ持ったままの太郎の荷物に目をやる。

（太郎、あんたいつたい何がしたいのよ。私にはさっぱりよ）
中身はなんとなくであるが夏目は見当を付けていた。だが、それをいつ使うのが問題なのだ。

（あーも、何で私はこうもいつも面倒臭い役回りなの）
そう思いつつ夏目は緋香里を誘導する。

「ちよつと、いつたいどこに向かつてるの？」

緋香里が後ろからそう言うてきたが夏目はあえて無視した。

説明したからと言って特に状況は変わらないと判断したからだ。

こうして二人は森の中を歩いていく。

#

「こんの、避けんじやないわよ！」

野々夏はそう言いながら銃のトリガーを引き鎖を足場に少女の方へと接近していく。

「避けなければ私は死んでしまいます。だから避けたまです」

冷静に少女は言うつと鎖で自分の周りを取り囲み弾丸をすべて弾き返した。

「黙んなさいこの餓鬼^{ガキ}がああ」

「私としては餓鬼、などの呼び方はやめていただきたい所なのですが」

あくまで少女は冷静を貫く。

（本当は餓鬼と言われて腹が立っているんですが表に出してはア
レなので隠しておきましょう）

表面的には。

「だああああ」

そんなことを露知らず野々夏は少女に向けて銃口を構え乱射する。
取り乱した振りをするために。

#

「ふん、口ほどにもない」

ユイはそう言うと言前に立つ人形に向け喰滅^{クメツ}を振り下ろす。

「やはり、捨て駒として扱っているから弱いな」

グシヤリと言う音と共にその人形の一部が消える。否、喰滅^{クメツ}に食
われたのだ。

「ひ、ひいつ」

「少し喰ってしまったみたいだな。まあいい、この程度ではあま
り影響がないだろうしな」

ユイは喰滅^{クメツ}を大上段に構え目の前の人形をまとめて吹き飛ばす。

「さーて、始めようか」

ユイが息がかかるほど近くに素早く近づいてきたことに少年は気
が付いた。

だが、遅すぎた。

「倒れる」

ユイがゆっくりとそう言った次の瞬間、少年は思いっきり飛びず
さる。

「良い反応だな、だが――」

――遅い」

さあ、どこから語ろうか――

#

「ちっ」

野々夏は軽く舌打ちをするとポシエットから手榴弾を取り出し齒でピンを抜くと少女に向けて投げつけた。

（まだ用意できてないの夏目！少しは急ぎなさいよ私は時間稼ぎが苦手なんだから）

軽々と少女が手榴弾の爆風を避け自分に向けて鎖を放ってくるのを見ながら野々夏はそれを軽やかなステップで避け樹上へ飛び上がる。

「あなた猿か何か？そうでなかったらそんな事しません」

「五月蠅い！」
うるせえ

（時間稼ぎ目的じゃなかったらバズーカー発ぶつ放して終わらせるんだけどな――――辺りがすごい事なと思うけど）

「何が五月蠅いか理解しかなます私はただ言っただけのことを述べているだけです」

（ああ、もう今すぐにもぶん殴りたいわこのクソガキ）

そんなことを思いつつ野々夏は戦う。

大切な人と自分自身のために。

#

森が少し開けた、昔森林散策の際の休憩所として使われていた草地に着くと夏目は足を止めた。

（ここで場所は良いわね、あとは棘木緋香里がどれだけ協力して

くれるかだけど)

「さて、太郎から預かつてる荷物を渡してくれないかしら？これからの作業に必要なものが入ってるんだけど」

「あ、はい」

緋香里は大人しく夏目に太郎から渡されたバックを夏目に渡す。

夏目は受け取るとすぐにバックのチャックを開けタオルに包まれた物を引っ張り出した。

(あたり！)

心の中でガッツポーズをすると夏目はそのタオルを優しくめくる。そこにあつたのは――

(巫女さんの鈴？)

神事などで使われる白木の柄に数個の鈴を付けた道具だった。

「これは、神楽鈴っていうの。はい、これ持って」

「は、はあ」

半ば押し付けられる形で緋香里はそれを受け取る。

「ん、じゃあ、踊って。テキトーでも何でもいいから」

「・・・はい？」

いきなりもたらされた爆弾発言に緋香里は固まる。

「ん、だから踊って。私はこれから作業があるし、それに踊るのはあんたじゃないとダメだから」

軽いノリで夏目は言うつとバックの中からパソコン一台と食塩と赤字で書かれたビニール製の袋を引っ張り出す。

「はい、早くして早くして。あんまりもう時間がないから」

理解が追いつかない緋香里、夏目は軽く呆れながら真剣にこう言った。

「あのねえ今、すっごく急いでるんだけど早くしてくれない？言っとくけどあなたの行動ひとつで状況はいとも簡単に変わるものなのよ？戦争って言うものはねたった一人の一般人の行動でいとも簡単に状況が変わったりもする。私はあんたの行動に賭けた。だから御願い」

その言葉とその裏に隠された気迫に押され緋香里は頷く。
「踊って」

第39話 小鳥よ小鳥、願わくば飛び立たん事を o p 9 ・ 戦争と言つ意味

あと少しでやっとプロローグがおつわるー♪

これでやっと野々夏の可愛いとことか書けそ（以下、白母にぶん殴られたため中断

第40話 小鳥よ小鳥、願わくば飛び立たん事を

o p 1 0 ・ F o r t h

プロローグ、ラストまで一気に投稿します。

シャン。

ふと澄んだ鈴の音が聞こえた気がして男は視線を一瞬だけ戸一から逸らす。

シャン。

大気を震わせ化け物を振るうユイの耳元へ鈴の音が聞こえた。

シャン。

その音は傷つき空を見上げていた天音の耳にもはっきりと聞こえた。

シャン。

その音は消えることなく町中に響き渡った。

シャン。

空白を超えて、どこか遠くへ。

#

緋香里はただ踊っていた。

夏目があの後言ったのだ。『自由に踊って』と。

だからこそ緋香里はただ自分の知っている動きをつなげ、鈴を鳴

らし、舞い踊っていた。

（体が軽いッ）

そして緋香里は舞い踊るたびに体が軽くなっていくのを感じていた。

気分がどんどん興奮してきたことも。

時折、パンと言う手を叩く音が耳に届くが緋香里にはそれすら気にならない。

只々舞い踊っていた。

#

鈴の音が聞こえ始め野々夏はそろそろ本格的にやり始める事にした。

（これで時間稼ぎも終わりよ。ふふ、我ながらちゃんと我慢した演技もしたわよ。これで全力で戦えるわ）

怪しげな笑みを浮かべつつ野々夏は翠晶^{スィンヨウ}を消す。

「あら、その五月蠅い^{うづめたい}ものを消してどうするのですか？あなたの武器なのでしょう？習わなかったのですか？敵の目前で武器を消すなど。それとも自身の敗北を認めたのですか？」

野々夏が翠晶^{スィンヨウ}を消したことに気が付き少女は一気に攻めかかる。

だが、野々夏の頬には余裕の笑みが浮かぶ。

「私が何の策も考えず消すと思った？来なさい、^{リンゼツ}燐絶」

野々夏はそう言ってさつと手を下に下げ軽く手を開く。

「絶て」

野々夏はコートの袖口をすべりおちてきたナイフの柄を掴むとそのまま少女に向かって投げた。

少女はその内の自分を直撃するであろう3本を弾き残りの5本を見逃す。

「あら、何ですかその程度の物は、そんなのでは私を傷つけるなど――」

「かあかつたあ」

野々夏はにやりという笑いを浮かべるとコートの袖口に隠れるように仕込まれた小型の巻き取り機のスイッチを押した。

「っ！」

なにか仕掛けられていることに気が付き少女は虚空へ身を投げる。
だが、

「うわっ」

なにかに足を取られ少女はバランスを崩しそのまま一気に体を持つてかれる。

「あ、言っておくけど動いたら体バラバラになるから」

野々夏はそう言っただけでヒョイと片手をあげた。

「こー言うのをチェックメイトって言うのよ、ねえ？」

野々夏はそう言うのにやにやと笑いながらその場に座る。

「さて、タイムオーバーをここで待ちましょうか。二人で」

もうすこしで終わる物語を待ちながら野々夏はにやにや笑いを微笑みに変えた。

たえすべてが終わっても私はあなたを忘れない。
それが約束だから。

#

（もうどの位こうしてるんだろう？）

ふと緋香里はそう思い踊りながら考える。

（思い出せない・・・）

不思議と緋香里は踊る直前の事を思い出せなかった。

（これも・・・何だっけ？）

神楽鈴と言う言葉が緋香里の脳裏によぎったが緋香里はもつと別の名前な気がしてやまなかった。

（たしか、たしかこれの名前は――

――鳳仙花）

緋香里は心の中でそつとそう呟いた。

次の瞬間、鈴が深紅の光に包まれ形状を変える。

細長く形状を変え上部に大きな飾りが現れ、その姿はもはや神楽鈴と言うよりも錫杖と言った方が近い。

「あ、ああ、あああああつ！」

それと同時に緋香里の脳裏に様々な光景が浮かぶ。

「いやあああああ」

その一つ一つが凄惨極まりない光景で緋香里は足を止め地面に蹲すくまった。

そこに見えている顔のほとんどは緋香里が見た事のない人々の物でそれでも緋香里は心を痛めた。

「私は、私は」
一体なんなの、という言葉がのどから零れ落ちかける。
だが緋香里はそれから先を言う事出来ないまま気を失った。

#

「大丈夫、死んでも私の遺したいものはここに遺していけるから」
そう誰かが言った。

「そう、ならいいわ安心して、たとえすべてが終わっても私はあなたを忘れない。それが約束だから」
そう言って赤毛の女性はそつとナイフを誰かの手に渡す。

「あの子はきつと一回全てを失ってしまう、だからあなたの代わりに大切な思い出を渡してあげる。あの子がきちんと自分の道を見つけられるように、少しでも幸せな道を歩けるように、自分の大切なものを見つけてそれを落つことさないように見守ってあげる」
つうつと赤毛の女性の頬から涙がこぼれた。

「さよなら、蝶谷ちようや 静葉さん、いいえ棘木静葉さん。あなたと久く那なは二人とも死んでしまっけれどそれでもあなたが守りたかった娘とこの町は生き続ける。だからきつと、いいえ絶対にあの子にすべてを伝えるわ。どんな方法を使っても」

女性はそつと涙をぬぐうと微笑みながら言った。

「さようなら、この狭い籠から飛び立った唯一の小鳥、棘木静葉。あなた同様いろんな人々がいつかの子供たちの願いを背負って飛び立っていくことをここから祈ってるわ。ずっとね」

その言葉は暗闇に消えた。
溶けるように、優しく。

気を失った緋香里の閉じられた目蓋からそつと涙が零れ落ちる。
それを見て夏目はそつと安堵の溜息を吐く。

（よかった、いきなり倒れた時は心配したけど呼吸も落ち着いてるし、それに――

夏目はいきなり形状を変えた元神楽鈴の錫杖に目をやる。

（始まつたみたい）

ゆつくりと光り始めた杖に夏目は全ての終わりが近い事を悟る。

あの日から始まつた自分たちを巻き込んだ物語の終末を――

#

ふと気が付くと緋香里は真つ白な空間に一人立っていた。

（ここ、何処だっけ？）

緋香里は不思議な既視感に襲われる。

（一回ここ来た事がある・・・ような気が・・・）

上も下もはつきりしない中で緋香里は瞬きをする。

「ねえ」

ふと足元からそんな声が聞こえ緋香里は下を見る。そこに居たのはまだ小さい、五歳ほどの少年だった。

「どうしておねえさんはここにいるの？」

無邪気に少年が緋香里に言った。

「だってここは、うまれるまえにしんじやつたひとのすむところだよ？おねえさんはいきてるひとでしょ、どうしてここにいるの？」

その言葉に緋香里は思わずうつろたえつつもわからないと少年に言った。

「でも、おねえさんはこことおんなじにおいと、ちがうにおいにする。いきてるにおいとしんでるにおいがする」

よくわからない事を言いながら少年はそつと緋香里の手を引く。

「こつち、こつちのほうにいりぐちがあるから、たぶん、おねえさんはいきてるからかえられるはずだよ。ぼくはもう15ねんもまえにしんじやつたんだ。だからかえれない、でも、おねえさんにいっただけおねがいしていい？」

少年はまっすぐ緋香里の目を見る。

「ぼくの、うまれることができた、いもうとにぼくのおはかにいってっていつて。そこならばくもいもうとのかおがみれるから」

そう言つて少年が力なく微笑むと緋香里の体をぼんやりとした赤い光が包んだ。

「さよならだね、これでおねえちゃんのかえられるよ。じぶんの、からだに」

その顔が緋香里はよく見知つた誰かに似ている気がしてはつとした。

「まって、あなたがもし生まれてくることが出来たらどんな名前だつたの？」

とつさにそんな言葉が緋香里の喉からこぼれる。

「月夜、いもうととつになるようにおかあさんがつけてくれた」

「上の名前は！」

一瞬見た目とは違ふ大人びた表情を見せてから泣いているような笑っているような表情で緋香里に言う。

「そんなの、すぐにわかるよ、だつておねえちゃんとは――」

そこまで月夜が言つた時点で緋香里は察した。

「待つて！」

緋香里がそう言つて赤い光に包まれ消え行く視界の中月夜に向かつて手を伸ばす。

「もうおそいよ。たのしかったよ、なんにもしらないこどものふりしてすこしだけどいっしょにはなしができてさよなら――」

徐々に聞こえなくなる声、それでも緋香里ははっきりと最後の声を聞いた。

——だいすきなぼくのうまれることができたもつと、緋香里」

#

緋香里が目を覚ますとそこはさきほどまで自分が踊っていた広場だった。

ゆっくりと体を起こし緋香里は頬に着いた土や草を落とすため手を顔にやる。

頬が微かに涙で湿っている。その事に付き緋香里は先ほどの事を思い出した。

「っ！」

次から次へと緋香里の目から涙がこぼれる。

「う・・・あ、うあああ」

気が付くと緋香里は声を上げて泣いていた。

子供みたいだから、強くありたいからという理由でずっと4年以上流したことのない涙をぼろぼろと流しながら。

#

「くそっ」

少女は野々夏に囚われたまま毒づくを上を見上げて大声で言った。

「作戦失敗、ただいまより本部に帰還します」

次の瞬間少女は消えうせる。

その声を聞いた男は目の前で立つ戸一に言う。

「あ、お嬢が負けを認めたみたいだから俺帰るわ。一個言つてきたいことがあるから言うけど俺は傭兵、いつかどつか出会う事があると思うがそんな時はお手合わせ頼むわ。まだ少年は若いし強くなれる、ムリするもんじゃあないよ。んじゃ、俺は敗戦者の回収逝ってくるわ」

そう言つと男はくるりと戸一に背を向けて走り出す。

（背中の傷は剣士の恥だもんなあ、ほっとこ）

ユイと戦っている少年もまたその声を聞いていた。

「チイツ！」

少年は軽く舌打ちをすると一瞬で体のこと無視した大ジャンプをする。

「お前、死ぬ気か！」

「ばいばーい」

そう言つと少年の姿が空に掻き消える。

「逃げたか」

ユイはそうぼそりと言つと喰滅^{クメツ}を消し壁に寄り掛かる。

こうして宮岸市全体を襲った敵は去つて行った。

戦死者4名、重軽傷者70名、行方不明者1名、これが後に宮岸争乱と呼ばれる戦闘である。

第43話 さよなら、わたし

あの戦いから数日後、緋香里は市内にある墓地へ来ていた。

「ちよつと遅くなっちゃったね」

一回も来たことのない両親と生まれる事が出来なかった兄、月夜の墓に。

「もう、全部終わったよ。それに全部思い出した。お母さんとお父さんは私を守ってくれたんだね。私の心が壊れちゃわないように守ってくれてたんだね」

あの日、緋香里の両親は自宅の近辺に開いた異界への門から攻めてきた者たちの力に触れて生まれつき無かった魂の半分のせいで存在そのものが不安定になった。それを防ぐために緋香里の母親、静葉は自らの魂の半分を緋香里に与えその反動で死亡、父親、久那はそれを支えていたため静葉同様死亡。それを後から聞いた話では野々夏の母親が看取っていたらしい。全てが終わった後、病院で検査入院をすることになって直ぐに野々夏の母親が来て、謝罪の言葉と共に全てを話してくれた。

「ごめんなさい、お父さん、お母さん。ずっと忘れていて」

より正確に言うとは緋香里にはその時の記憶が存在しない。

だが、緋香里は兄と会ったときにその時の記憶を手に入れた。

いろいろ調べてもらった後にその事を聞いたら皆がとても不思議な顔をしたことを緋香里は覚えている。

白苺、と言う白衣を着た少女が言うには現在緋香里の魂は元から無い半分や母親の物の代わりにいわばこの土地そのものと言うものと一つになっていてそのことが影響しているらしい。意味が全く分からない旨を告げると白苺は、

「ま、あいつらの目的はそれだったみたいだし。私の空論が実証されたから良しとしましょう」

とさらに訳の分からない事を言うと言ったため解らず仕舞

いだ。

だがそんな事よりも緋香里には墓前に報告したいことがあった。

「ねえ、聞いて。私、戦う事にしたの。だから明日から私ね星羽^{せいう}学園^{がくえん}ってところに通う事にしたの、お母さんやお父さん、お兄ちゃん^{あにちゃん}が誇れるような人になりたいって思ったからこの道を選んだの。許して・・・くれるよね」

自信なく緋香里は言つとそつと墓前に置いた家族写真を手に取る。

「これで、さよならだね」

マッチでそれに火をつけると緋香里はあたりに吹く風に任せて手を放し風に流す。過去への選別として。

燃える写真が風に煽られ灰になっていくのを見ながら緋香里はそつと涙を流した。

第43話 さよなら、わたし（後書き）

あとがき

どうも、はじめましてみなぎです。

この小説はもともとグロい、明らかに誰も読まなさそうな魔法少女ものとして考え始めたんですがパソコンの隅っこでホコリ被ったのを発見してそれが丁度、『魔法少女まどか マギカ』が売れている時でいけるのかなあと思いつつ文章を改定していった結果戦争ものへと姿を変え、みなさんにお見せ出来る形となりました。散々、お世話になった皆様にここで感謝の意を示します。

2011年8月17日

みなぎあやめ

P S . 第一章は19日あたりに公開を開始します。お楽しみに。

第1話 転入前日 前篇

「はい、これが寮の鍵ね。あと、制服、仕上がったのは部屋のクローゼットに入ってるから。訓練の予定表はパソコン机の上に置いてあるから一緒に置いてある校則とかカリキュラムとか選択授業なんかのプリントも合わせて見てね。それから――

野々夏は最も気になっていたことを緋香里に言う。

――なにこの大量のモデルガン？」

「モデルガンの方は、やってるMMORGの定期的にやってるオンラインの大会で入賞したときの景品、捨てるに捨てられずそのまま・・・ね」

緋香里は目を逸らしつつそう言う。

「ふーん、銃身に彫ってある『SORANA』って言うのはユーザー名？」

「ええ」

緋香里のその答えに納得したのか野々夏は部屋から出て行くことドアに歩み寄る。

「あ、言い忘れてたけど入寮手続証が書き終わったら下持ってきて。私、リビングで待ってるから」

思い出したかのように野々夏はそう言って部屋を出て行く。

誰かに似てると思いいながら緋香里はパソコン机の上に置いてある紙を手取る。

（もう転校するって決めてから一週間か）

緋香里が転校すると決めてからすでに一週間がたった。

（正直な話、話が早すぎて吃驚したわ）

野々夏の説明を受け、入学すると言ったら野々夏はあらかじめ用意しておいた保護者の同意サイン付転入手続の書類と雇用契約書、入寮に関する資料、その他諸々必要な書類を一揃え緋香里の目の前に出し用意は整っていると言って黒いインクの万年筆まで差し出し

てくるほどの用意の良さに緋香里は舌を巻いた。

そのおかげで全くと云っていいほど時間を掛けず緋香里はここ、星羽学園の敷地内にある宮岸支部所属第5学生小隊の寮に転がり込むことになった。

昨日のうちに事情によって来られない2名を除いた野々夏、戸一、夏目、天音、白莓、太郎、最早、ユイと顔合わせをし、今日、大量の荷物のオンパレードに慌てつつ自室の用意と明日から行く学校の事を考えながら自分に何ができるかどうかを考えていた。

（野々夏が言うにはバリバリの戦闘部隊らしいし、私なんかがやっ
って行けるのかな？素人だし）

兎にも角にも、本格的な戦闘訓練が始まるのは1週間後である。
緋香里はそこで思考を中断させると書類を荷物の整理を始めた。

第1話 転入前日 前篇（後書き）

ついに第一章です！やっと、いろいろ自由に書けるようになったー！
さて次話はどうしよう

第2話 転入前日 中編

「はああああああ」

思いつき溜息を吐くとベットのの上に倒れこんだ。

今は五時過ぎ、あれからしばらく荷物と格闘しつつ、昼食を兼ねた休憩を挿み、冬服などあまり使わない暫くはタンスの奥にしまいつぱなしになる物をタンスに納めたところで緋香里は見事に力尽きた。

（シャツとか下着とか夏物はすぐに使うしその都度段ボールから引つ張り出すからすぐに片付きそう、問題は、パソコン関係かあ）
まだ、段ボールの中に入れっぱなしのパソコンのことを考えて緋香里は憂鬱になる。

（明日帰ってきてからでいいか）

そう思うと緋香里はいったん下に降りリビングへ向かう。

「あ、荷物整理終わったー？」

呑気にドラマの再放送を見ながらソファに寝そべった野々夏が言った。

「一通り終わったわ。しまっていないのはこれからすぐ使うものだけだから」

「へーすぐ使うものはしまわないんだ」

「後で使うものはタンスの奥にしまっておけば嵩張らないし、今使うものはどんどん使ってその内全部開けちゃうからこうしておいた方が便利だから」

「それもそうよね」

そう短く言って野々夏は軽く伸びをした後、勢いをつけて立ち上がる。

「さて、夕飯作るから手伝いしてくれない？」

「あ、はい」

「うんでいいわよ別に、仲間なんだし」

そう言つと野々夏は二カツと笑う。

「は——うん」

それに満足したのか野々夏はすたすたと歩いていく。

緋香里はその後ろについて台所へと入る。

「さて、今日の夕飯は野菜スープとあと豆腐ハンバーグだから手
え洗つてその野菜置場の玉葱4玉出して皮むいて半分はみじん切
り、残りは1センチ角に切つて」

野々夏はそう言つと洗面所で軽く手を洗い、鍋とフライパンを出
す。

「さて、調理を始めましょう」

#

「つと、ぼちぼち来んだっけ」

そう言つて最早は手元の時計を見た。

今、最早は白苺に言われて彼女の身内を迎えに校門前に居る。

「もう五時半か、あと三十分してこなかったら白苺に電話してみ
つかな」

すでに予定よりも三十分以上過ぎていて、最早は少しばかりイラ
イラしていた。

と、その目の前に黒塗りのタクシーが止まる。

「ふーついたのねー」

「姉さん、頼みますから後ろから抱きつかないでください。動き
にくいです。それに僕が男だと言う事を忘れてませんか？」

「忘れてないのねー」

目の前で行われる即席コントを見ながら最早は溜息を吐く。

（さて、どうやって止めるべきか）

寮へ連れて行く前に最早の前には問題が山積みである。

「あ、いさつちなのねーお久なのねー」

「あ、どうも妹が常々お世話になっています」

二人が最早に気が付き声を掛けてきた。

「よし、虚城^{うつしろ} 栗夢、まろんただいま海外留学から帰還しました
なのねー」

第2話 転入前日 中編（後書き）

はい、ついにと言わねばいけませんが、いぶん前に言及していた双子の登場です。

現在第一回人気投票開催中です。ぜひ好きなキャラクターに一票を！

URL <http://vote1.fc2.com/browse/9816343/1/>

第3話 転入前日 後編

「よし、これであとは焼くだけだからいったん冷蔵庫にしまつて少し、休憩しましょう」

そう言つて野々夏は金属製のボールの中に入った豆腐ハンバーグの種をタッパーに移し冷蔵庫へしまった。

現在時刻は六時、ご飯時だがラクロス部に入っているユイやバスケット部に入っている天音、弓道部の紫月、美術部の夏目、戸一、実は文芸部の白苺などの部活組事考えるといつも夕食は七時から七時半の間になるらしく六時半までは何もすることがない。

「ヒマねー」

野々夏はそう言つてだらしく床に座りながらケータイをいじる。

（なんか、これだけ見てると男の子みたい）

はつきりと言つて野々夏の顔立ちが可愛いと言つよりもかっこいいや綺麗と言つた方が正しく中性的だ。

そのため少しだらしない恰好をしていると男性っぽく見える。

（胸、あるけど）

そう思いつつ緋香里はコップに水をくみ喉を潤す。

「あ、そうだ」

野々夏は何かを思い出したようにそう言つと立ち上がる。

「そーいえば今日、帰ってくるんだっけー」

すっかり忘れていたと言つ顔で野々夏は目を細めると窓の外を見た。

「あいつら」

#

「ふー日本は久々なのね、後時差も結構しんどいのね」

そう言つと栗夢はふわふわの淡い金の髪をかき上げるとまろんに

抱き着く。

「姉さん、良いですか？僕は男です。あと、姉さんは巨乳です。以下の点を踏まえて僕に抱き着くのを止めては下さいませんか？首の後ろに胸が当たって色々大変なんです」

かなり困った顔でまるんは言うとのろのろと実の姉の手を解いた。

「そんなの気にしないのねー、のーぷろぶれむなのねー」

「絶対姉さん、意味わかってないですよ」

軽く栗夢をにらみながらまるんは言った。

それを見ながら最早は、

（やっぱり、こいつら・・・めちゃくちゃすぎるだろ！）
と、思ったそう。

#

「ただいまー」

そう言ってリビングに天音と紫月が入って来た。

「ん、お帰り」

ソファに寝そべりアニメを見ていた野々夏がそれに気が付きひらひらと手を振る。

「野々夏、ソレだらしくないか？」

野々夏の格好を見て紫月は言った。

「別にいいじゃない」

そう言って野々夏はソファの背もたれに顎を掛け、にやにやと笑う。

（ぜってえこいつ自分が女だって自覚がないな）

紫月は心の中でそう思い拳を固めたその時だった――

「ただいまなのねー！」

ボタン、という大きな音を立てドアが開かれ、何者かが紫月に飛

び掛かる。

「ぎゃっ」

そのまま上に伸び掛かられ下敷きになる紫月、そして上に乗っかっている人物はケロッとした様子で言う。

「ののたん、お久しぶりなのねー」

そう言つてその人物——栗夢は紫月の頭を踏みつけ立ち上がろうとする。だが、

「ひあっ」

「ウギャー」

見事に足を踏み外し紫月の首が不吉な音を立てた。

「あー！姉さん、何やってるんですか！音更君が泡吹いてます！」と、そこにやや遅れてまろんと最早がやってきた。

「あう」

うつたえたように栗夢は言つとそつと足をずらし今度はちゃんと床に足を付ける。

「ごめんなのねゝ気がさせたなの責任なのねゝ」

そう言いながらガクガクとそこその速さで栗夢は紫月の上半身を揺さぶる。

「うわあ、姉さん、音更君が死んでしまいますからやめてください」

そう言つてまろんが静止に入った。

「うみゅー」

変な声を出すと恥ずかしそうに栗夢はその場でたいして小さくなつていないが膝を抱えて丸くなる。

「何事——つて、え？」

下に降りてきた緋香里はその光景を見て固まった。

「あ、どうも」

とつさにまろんは挨拶する。

「なのはドジ、なのはドジ、なのはバカ、なのはバカ」

一方で栗夢はその場で丸くなっている。

何が起こっていたのか、そんなことは緋香里には解らなかった。

第4話 美しの羽の君

栗夢とまるんが海外留学から帰国し、一通りの挨拶と紹介、そしてその後の馬鹿騒ぎから一晩、緋香里は寝不足の状態で職員室にいた。

（うう、まさかあそこまで騒ぐとは）

そんなことを思いながら緋香里は革張りのたいして座りここのよくないソファに座っていた。

「あ、あなたが棘木緋香里さんね」

緑のクリップボードを手にしたメガネの、いかにも気が弱く流されやすいと言う空気をまとったクリップボードよりも黒っぽい緑の凝ったデザインのジャージを着た女性が緋香里に話しかけてきた。

「はい」

「私の名前は花束^{はなたば}結利^{ゆいり}、緋香里さんのクラス、二年一組の担任よ」

そう言ってニコニコ笑顔で結利は緋香里の手を握る。

「よろしくね」

（う、うわあ、無茶苦茶目がキラキラしてる）

その目はちよつと引くくらいキラキラしていた。

#

「はい、と言うわけで今日から棘木緋香里さんがこのクラスの仲間になりまーす。みなさんよろしくねー」

緋香里のクラス二年一組はわかりやすく言うと戦闘訓練を主としたいわば将来最前線で戦う事を切望されているもしくは、すでに最前線で戦っている人が集まるクラスだ。

野々夏達、第5小隊も大学生の栗夢と高校一年生のまるんを除いた全員がこのクラスで緋香里は少し安心した。

「緋香里さんの席は——一番後ろの窓側、黒羽くろはねさんの隣ね」
そう言われて緋香里は一番後ろの窓側の席に向かって歩き、座る。
「さて、これでホームルームを終わります。起立、礼」
そう言って結利は教卓のイスに座る。
朝の勉強時間が始まった。

#

「ミウミウ」

昼休み、野々夏が手を上げて緋香里の隣の少女——黒羽くろはね美羽みうの肩に腕を回す。

「あ、ちよつと、やめて下さいよう」

そう言って美羽は野々夏の腕をほどく。

「えー、一緒にお昼食べよって誘いに来ただけ」

「それでも後ろからいきなりはやめて下さい」

そう言って美羽はずり落ちたハト眼鏡を元に戻す。

「いつまでたっても野々夏は子供なんです」

ぶくうと頬を膨らませ美羽は野々夏の方を見た。

（か、可愛い）

野々夏が野生の狼だとすると美羽は子リスだ。

それくらいに——

（可愛いッ！）

「何にニヤついてるのよ」

そこではつと緋香里は我に返る。

「何でもないわ」

「ふーん、さ、お昼食べに行きましょう。ユイが外の東屋確保してあるからゆつくり座って食べれるわよ」

そう言って野々夏に連れられるまま緋香里は教室を出た。

第4話 美しの羽の君（後書き）

一部設定の間違いを見つけたため訂正。

第5話 学生抗争

緋香里達が校庭に立つ小さな東屋に着くとそこにはすでに弁当を広げた第5小隊の面々が待っていた。

「あ、やつ^{やつときたのね}ほひたほね」

「はいはい、頼むから口をいっぱいにした状態で喋らないで頂戴」
リスのように口いっぱいには食べ物で頬張りながら喋る栗夢に野々夏はやりわりと突っ込みを入れる。

「早く座れ」

箸を手に紫月が緋香里に向かって言った。

「あ、うん」

緋香里はとりあえず一番近い丸太を単に切っただけに見えるイスに腰掛ける。

「はいこれ、緋香里の分」

野々夏が緋香里の分らしいピンクの顔に傷のあるハートの眼帯を付けた兎の『傷うさぎ。』と呼ばれるキャラクターグッズのクロスで包まれた弁当を緋香里に渡した。

「・・・」

「どした？」

青白く血の気の引いた顔で冷や汗をダラダラと流す緋香里に野々夏が心配して声を掛ける。

「な、なんでもないなんでもない」

明らかに引き攣^つった笑みを浮かべる緋香里。

その裏にある何か触れて欲しくないものを刺激しかねないと感じた野々夏はあえて聞かずそのまま放っておく。

一方、緋香里のいる出入り口傍とは離れた奥ではこんな会話が繰り広げられていた。

「なあ、白莓、今度の土日どっかいかねえか？」

「土曜日なら午後から空いてる」

「じゃ、午後から買い物行かねえか？服、破けちまったんだろ、俺が買つてやるよ」

「そ、そんな余計な事なくていいっ！」

「ん、じゃあ適当に遊ぶか」

「・・・」

顔を真つ赤にしなが^{つつむ}ら俯く白^つ苺。暫くして微かに首を縦に振る。

「じゃ、決まりだな」

最早が明るくそう言つと白^つ苺はさらに顔を真つ赤にしなが^{つつむ}ら顔の火照りを覚ますように冷たいお茶を一口飲んだ。

#

「覚悟はあるかー！」

教室の机で疲労のあまり緋香里が溶けそうになっているとそんな声が校庭の方から聞こえてきた。

（ユイの声？）

緋香里がぼんやりとそう思つた頃野々夏が窓辺に歩いて来て外を観る。

「あー、始まるのねえ」

呆れた、と言う表情で野々夏は開けっ放しになっていた窓を閉める。

「何が、始まるの？」

始まると言つても緋香里には全く見当もつかない。その事を見越したのかいつの間にか傍に立っていた太郎が簡単に説明してきた。

「あれは学生抗争と言うもので分かりやすく言えば生徒会、体育委員会、文化委員会、生活委員会、風紀委員会、部活長総会、部活小隊、一個人——まあ、要するにストライキと似たものですね。直接武力に訴えて反対している事をやめさせると言うものです。今やってるのはユイ率いる二年風紀委員グループ対遅刻組のペナルティーの廃止を巡った抗争ですね」

「へー」

なんとなしに緋香里は席を立ち外を見る。

ユイは身の丈を軽く超える木刀を手に20人程度の集団の戦闘で拳を振り上げ扇動していた。

「ぶっ潰せ！」

何やら不吉な言葉を言ったりしているが周りをうまく口車に乗せているため誰も突っ込まない。

「総員、かかれ！」

それから約30分後、結局は風紀委員側の勝利に終わり緋香里は単なるお祭り騒ぎで単なる普通の一般生徒の自分は参加しないものだと思っていた。

——そう、翌日起きた事件さえなければ。

第6話 実習訓練

翌朝、眠たい目をこすりながら緋香里が校舎に入るころ野々夏とユイは理事長室に居た。

「はいはい、私急いでるんだけどあと5分以内にとつと何で呼んだか言って頂戴」

ややいらいらした様子で野々夏は言うと歯軋りをする。

はつきりと言って野々夏は目の前のいかにも高級品と言う顔をした革張りのチェストに座る長く、良く手入れされた黒髪をくるりと頭の上で秘書風のお団子に結い上げたふんぞり返っている女性――

――理事長の事が苦手だ。

「ん、簡単な話――今の生徒会、適当な理由でつち上げてぶっ潰してくれないかしら？はつきり言って目障りなのよ、見事ぶっ潰してくればそれでよし、わかりやすく言うと雑用ね」

あくまで口元に微笑みを浮かべながら言う理事長、その笑みは鋭く日本刀を連想させる。

「はあ、何でこんなことしなきゃいけないのよ」

ぼそりと野々夏は言うとユイの方を見る。

ユイはいつも通り無表情で突っ立っている。

「じゃあ、うちのバカ息子の為によろしく」

そう言つて理事長赤原^{あかはら}綾奈^{あやな}は手を上げる。

あくまで気楽に。

#

その日の午前中の授業は一組から三組までの戦闘の実習だった。

(こ、怖い)

当然のごとく周りには銃器や刀剣の類、果てはチャクラムやハンマーなどのマイナーなものまでたくさんの学生が凶器を手にしてい

た。

緋香里が手にしているのは緋色の宝石で飾り立てられた豪華な錫杖を手にしている。

一通り錫杖のルーツやらと言ったレクチャーを受けたがそれでも緋香里の心の中には不安が残る。

（つて言うよりもこの状況、どうすればいいのよ）

そして今現在、緋香里はその組手の相手と対面していた。

組み手の相手はクラスメイトの井砂いすな波音はのん、武器は鞭だ。

「ほらやるでー、ひかにゃんは初心者さかい手加減してやるから安心しとき」

そう言つて波音は鞭を軽くしならせ構える。

（ひかにゃんつて何よひかにゃんて）

そう思いつつ緋香里は杖を構える。

『杖道の構えはたいして日本刀と変わらん』

とか紫月が言っていたような言っていなかったような気もするがとりあえず緋香里は目の前の波音をにらむ。

「ほな、行くで」

そう言つて波音は腕を軽く振った。

ヒュンと言う風を切る音と共に鞭が緋香里に向けて走る。

緋香里は殆ど勘でそれを回避し、そのまま杖で絡め捕った。

「ほう、絡めて攻撃できなくする作戦か、考えたな。けど、けどそんなのわいにはきかへん」

波音は鞭を腕の一振りで絡まりを解き自分の元へと戻すと腕を前に出す。

「奔れ黒風クロカゼっ！」

波音が思い切り鞭を振るう。

すると風が巻き起こり緋香里を包み目に砂が入り涙で視界がぼやけ緋香里は波音の位置が分からなくなった。

（このっ）

緋香里は目をこすらず涙でばやける視える界よりも肌で感じる風、

聴覚に頼る。

『いい、視界を潰されたときは肌で感じる風と聴覚に頼りなさい。よっぱどの物じゃない限りそれで避けられるはずよ。こういうのは実践とかでみがいたほうがいいから。頑張ってね』

組み手の前に野々夏から受けたアドバイスを思い出したからだ。

「もらたわ！」

そう言って波音の鞭が奔った。

第6話 実習訓練（後書き）

この人は鞭だろうと思って書いたらSMっぽくなったのでちと反省。理事長はその内忘れたところに出て来る予定です。ちなみにこれで50部目だったりしなかったり

第7話 不可思議現象

「で、何でこうなったのよ」

野々夏はそう言いながらポリポリと頭を掻く。

その目の前には直径10メートルほどのクレーター。

先ほどの組み手で空いた大穴だ。

「あー始末書面倒くさい。先生、一括で書いてくれない？教師にも責任行くと思うし」

野々夏はそう言つとそばで傷まみれになり治療を受けている緋香里と波音を見る。

（どうしてあんなふうになるんだか）

そう思つと野々夏は十分前の事を思い出す。

「もらたで！」

そう言つて波音が緋香里に向けて攻撃をしたとき野々夏は妙な気配を感じ鳥肌がぞわりと立った。

「やめなさい！」

とつさに野々夏はそう叫ぶ。

「――」

緋香里がなにかを小さく言つたのが野々夏の耳に入った。

そして次の瞬間波音は吹っ飛ばされ緋香里もその場に倒れた。

（しっかし、なんて言つたんだろ）

野々夏が何回思い出そうとしても思い出せず逆にどんどん頭に靄がかかる。

（でも、なんか詩の一節だった気がするのよね）

それ以上は野々夏には思い出せなかった。

（あとで聞いてみればいいわよね）

そう思つと野々夏はこれから書く羽目になる始末書の事を考えた。

「つつ」

緋香里が目を覚ますとそこは保健室だった。

「ああ、目エ覚ましたみたいだな」

そう言つて保険医の女性桂月^{かつぎ ちとせ} 千歳は緋香里の目の前でたばこを吸う。

「あ、言つとくけどこれ電子タバコだから気にしねエでよく」

（いや、明らかにヤニとかの臭いしてるんだけど）

そう思いつつも緋香里は口にしない。

「なアにイ、実習訓練でぶつ倒れたんだって？ま、よくある話だから気にすることはないよ。それで3日に一回は怪我人や原因不明のオ失神で運ばれる奴アいっぱいいるからな」

奇妙ななまりのある言葉で話す千歳の言葉に緋香里は胸をなでおろす。

「さて、軽い検査やつから座つてくれねエか」

そう言われ緋香里はゆつくりと体を起こしベットに腰掛けた。

「腕、出してくれ」

言われた通り緋香里が腕を出すと黙つて千歳は軽く手の関節の近くにあるでっぱりの下に触れ脈をとる。

「ん、脈は整つてるし、呼吸も同じく整つてるな。顔色も良さげだし帰つていいよ」

「はい」

緋香里はベットから立ち上がるとふらふらと保健室から出て行く。その後ろ姿を見て保健室を出るのを確認してから千歳は溜息を吐くと缶コーヒのプルタブを引いた。

「静葉と久那の忘れ形見ねエ、あの女^{アマ}どんだけ俺を苦しめたら気が済むんだ」

『千歳、早く行かないと学食無くなっちゃうよ』

頭の中にそんな懐かしい言葉が聞こえて気がして千歳は頭を振る。

「あいつらはもう死んだんだ。もう、2度とアリスや夏^か弥、俺、

火鶴、音菜、語と笑いあえる事なんてないんだ」

千歳の頬を涙が滑り落ちる。

その涙は過去への贖罪の涙だった。

第8話 オンナノコノヒメゴト。（前書き）

今回は少し前の話の緋香里のリアクションに関わる話です。

番外編で書こうか迷ったんですがそうすると本編との間に齟齬が生じるので入れました。ちょっとしたシリーズものになってます。

第8話 オンナノコノヒメゴト。

女の子は甘いものと素敵なもので出来ている——かもしれない。

#

「入るわよー」

あらかじめ野々夏はそう言い、ノックをしたうえで緋香里の部屋のドアを開けた。

余談だが緋香里の部屋は三階の角部屋でこの階には空き部屋が一つとユイの部屋がある。

「うわつとと」

緋香里が慌てたようになにかのサイトを最大表示にする。

「な、何かしら？」

「ん、いや別に服乾いたから持ってきたただだから」

「そ、それならいいわ、それなら」

「？」

緋香里の謎の反応に野々夏は頭をかしげる。

「なんかお取込み中ごめんなさいね」

そう言つて野々夏は部屋を出て廊下をやや速足で歩き階段を駆け下り、女子共用部分の小さな部屋の通り抜け男女共有部分のリビングへ通じるドアを開ける。

「うわっ」

そこにちょうどソファアの上で日本刀を解体しメンテナンスをしていた戸ーが日本刀の刃を取り落す。

「野々夏、言ったよねさっき。日本刀のメンテナンスやってるからドア開けるときはゆっくり、出来る限り音を立てずにつて。なのに今思いっきり音たてたよね、おかげで刃を取り落しそうになった

んだけど」

そう言って戸一は足の上に日本刀が落ちなかった事をいい事に戸一は野々夏に詰め寄る。

「あ、あはは」

「あははじゃないよ下手したら死ぬんだけど僕が」

「・・・ごめん」

「よろしい」

それだけ言って戸一はすたすたとその場を去りソファーに陣取る。

「それで何？」

（うわあ、態度冷たあ）

「い、いやね、さつき、緋香里の部屋に乾かした服持ってたらパソコンやってて私が来たたん見てた何かを隠したのよ。それが気になって」

暫く黙った後戸一は溜息交じりにこう言った。

「別に気にすることないんじゃない？秘密くらい誰でも持つてるだろうし、それくらいで特に詮索することもないと思うよ」

戸一はそう言うとは後は黙りこくったまま日本刀の整備をするだけだった。

#

（あああああ、そのうち話すつもりなのにやっちゃったー）

その頃緋香里は自室で一人頭を抱えていた。

その目の前には少々値の張る最新式のパソコン一式とペンタブレットがあった。

それらすべては全て緋香里が自分で稼いだお金で購入したものだ。
「うっ」

緋香里は机の上に突っ伏しながら呻く。

（私の馬鹿あ）

公開と自責の念とその他諸々複雑な思いで。

第9話 オンナノココロ。(前書き)

予告どおりに話が進みませんでした。

話の中に遺伝子疾患に関する表現があります。もし、間違いなどがございましたら言って下さると助かります。

第9話 オンナノココロ。

女の子の心はガラスよりも脆くて強くて綺麗でそれで。

#

延々、緋香里がベットの上で悶えている頃ユイはラクロス部の部屋に併設されているシャワー室でシャワーを浴びていた。

（少し、日焼け止めをケチって損したな）

ユイは生まれつき体で色素を作れない人間、先天性色素欠乏症つまりアルビノだ。

顔に日焼け止めを厚く塗り、長袖の衣類を着ないとあつという間に皮膚に火傷をしたように水膨れができ、当然肌は荒れやすく化粧水も手放せない。その上、本当に微かにだが物のがぼやけて見えるのがユイと言う少女の抱える疾患だ。

目だけに少し色素が残っているため葡萄酒色だがそれ以外は髪は白銀、肌は乳白色だ。

（目の症状が本当に弱くて助かったな。もし強かったらロクに戦えていなかった）

ユイの目に起きている症状は軽度の弱視だけであり、アルビノではよく起こる視界が細かく揺れる眼球振盪がんきゅうしんとうや虹彩で目に入る光を調節できない事が原因でちょっとした光でもまぶしく感じてしまう羞明しうめいなど症状は起こっていない。

もし、それらが起こっていたら。そう考えるとユイの背に寒気が走る。

（私は白苺の様な白変とは違う、だからこんなに考えてしまうんだ）

アルビノと白変の違いそれは遺伝情報の差異である。

白変とは遺伝によって生まれつき色素の量が少ない人間で欧州に

多い金髪碧眼やプラチナブロンドなどはこの白変に分類され、色素を作る遺伝子が存在するため日焼けしたり、肌にシミや黒子が出ることもある。

アルビノは元から色素を作ることが出来る遺伝子が殆どない、或いは全く無い突然変異が原因の遺伝子疾患であり一部の患者を除いて日焼けすることがなく、シミや黒子が出る事はない。

それがアルビノと白変の違いだ。

（こんなこと、考えるのはもうよそう。クヨクヨ悩むのは柄じゃないからな）

そう思うとユイは思考を断ち切るとシャワーの温度を下げ冷水の様な水を浴びるとシャワールームから出た。

#

「おつそーい」

夏目はそう言うのとやっと来た緋香里に開口一番そう言った。

すでに時刻は午後7時、第5小隊の夕食の時間である。

「もう少し早く下に降りてくるのね、そうしないとご飯冷めちゃうのね」

「あ、少し部屋で考え事してて」

緋香里は曖昧あいまいに笑うと席に着く。

（考え事ってなんだろ）

野々夏はそう思いつつ口にはしない。不文律のような気がしたからだ。

「さ、とりあえず早く食べるなのねー」

栗夢がそう言うって優雅な動作で肉じゃがのイモを口元へと運ぶ。野々夏は少しの不安を胸に食事をとった。

第10話 オンナノコノアイジヨウ。

女の子のヒメゴト、それは友情と愛情、それから素敵な願い事。

#

「ぶわアアアアか」

白苺は思いつきり最早に向けてそう言つと頬を微かに膨らませながらそつぽを向く。

「あ、ちよつと。俺、馬鹿にされる理由が見つからないんだけど」
最早が自分を指さしながらそう言つが白苺はそつぽを向いたままだ。

「バーカ、最早のバーカ」

「おい、白苺？」

「バーカ、バーカ」

その頬は心なしかほんのりと紅に染まっている。

「はいはい、うちのお姫様。俺が他の女と会話してるの見て何腹立ててるんだよ。あれは同じ保健委員会のハタナ力さんだから、別に浮気とかそんなんじゃないから、単に委員会のシフトがこの間の戦闘でめっちゃくちゃになってその調整に尽力して頑張ったハタナ力さんに『頑張ったな』って言っただけだから。なんでそれなのに嫉妬されなきゃいけないんだよ」

最早が理由を言うがそれでも白苺はそつぽを向いたままだ。

「他人はそれを言い訳と呼ぶわよ」

「俺の眼中には白苺しかねえって、それ以外のやつを見る余裕なんてねえよ」

最早がやや恥ずかしがりながらもそんなセリフを言つと白苺はそつとこつちを見てきた。

「そ、そんな恥ずかしい事、す、すぐ近くで言わないでよ・・・」

顔を真っ赤にしながらそう言う白苺に最早は戸惑う。

（うわ、なにこれ、すげえ可愛い。白苺がこんなに可愛いわけがねえ）

手を軽く口元へやってるのは単に恥ずかしいだけだろう。

目も軽くずらされ、どこか色っぽい。

「・・・何？その気持ち悪い目」

最早が我に返ると白苺が何か気持ち悪いものを見たような目で最早の事を見ていた。

「な、なんでもねえよ」

「ふーん」

白苺がずいっと最早に顔を近づける。

「まあいいわ、最早が私に弱いつてこと十分に分かったから」

どうやら自分は試されていたらしい、そう思うと最早は心の中で溜息を吐いた。

（やっぱ、姫は姫だなあ）

心中でそう呟きながら。

#

「おい」

声を掛けられ、緋香里は今日何度目かになる失神から目が覚めた。

「瞑想の最中に気絶するってどれだけ軟弱なんだよ」

「気絶なんかしてないわよ！」

「はあ？どう見たって」

「なんですって！」

ぎゃいぎゃいとわめく緋香里と紫月、その様子を見ながら野々夏は苦笑いしていた。

（気絶ねえ）

気絶した、その現象に野々夏は一つの仮説を立てる。

（んー、瞑想自体はちゃんと出来てるっぽいけどその代りに睡眠

状態に体が近付いて気絶したように見えるのね)

そう思いつつ野々夏は銃を構え天音に声を掛ける。

「じゃあやるわよー、いつも通りゴム弾だから安心してね」

最近、天音が無茶な銃弾を避ける修行をしたいと言いだしたのだ。弾丸を避けると言うのはかなりの動体視力と注意力がないとムリな事であり、野々夏は止めるよう言ったのだが熱意に押され、敵でもない天音に向けて銃を撃っている。ただし、弾丸は当たっても大丈夫な訓練用のゴム弾なのだが。

(顔は狙わない、顔は狙わない)

野々夏はそう心の中で言いながらパンパンと軽快に銃を連射していく。

それを天音は避けたり、喰らったりしながら前に進んでくる。

(私の命中率が総じて8割だってことから考えたらまだ伸びる余地はありそうね)

冷静にそう考えながら野々夏は銃を撃つ。

守るためでもなく、攻めるわけでもなく、ただ訓練の為に。

第10話 オンナノコノアイジヨウ。(後書き)

次回は天音の話です。

なんか最早のセリフが某ライトノベルのタイトルと若干かぶって
いますがたまたまです。

第11話 オンナノコノユウキ。

女の子は強くて、弱くて、優しくて、キツくて、格好良くて、見栄っ張り。

#

「えっとー」

天音が困った口調で目の前に立ち口喧嘩をしている緋香里と紫月に話しかける。

「喧嘩はやめてくれませんか」

今は朝学活後の移動時間、次の時間が移動しないことをいいことに緋香里と紫月が激しい口喧嘩を繰り広げていた。

「だから、どうしてそうなるんですか？私はそんな意味で言うてるわけじゃないですよ」

「ああ、何でも言うてやるね。お前が悪い」

完全にキレて丁寧口調で話す緋香里と同じくキレて周りの事が入っていない紫月、先ほどから天音と最早が頑張つて止めようとしているがなかなか止まりそうにない。

「わかってるんですか？音更君。何度も言いますが私はただ、あなたの教え方が悪いと言っているのですよ」
わたくし

「お前の理解の仕方が悪いんだよ、それに気が付け！」

緋香里の武器、鳳仙花^{ホウセンカ}は錫杖だ。

敵の鎧を押しつぶすための棍棒がルーツになったメイスとは違い錫杖のルーツは槍、もしくは薙刀がルーツと言う説がある。よく、時代小説などで『旅の僧が錫杖を持って』などの描写が見られるのはそれが護身用の武器として使われていたためであり先が尖っているのはその名残である。

だから野々夏は紫月にその扱い方を教えさせようとした。

だが、この二人野々夏が予想していたよりも相性が悪く喧嘩が絶えない。

しかも、野々夏は何を考えているのかにやにやと笑いながら二人の方を見るばかりで止めようもしない。

（最悪です）

天音は心の中でそうつぶやくと一度溜息を吐いてから口を開く。

（本当はこんな汚い口使いは嫌なんです）

「てめえら、喧嘩してねえで椅子に座れ！でねえとぶつ殺すぞ！」
いきなりの天音の豹変に固まるクラスメイトと喧嘩中の緋香里と紫月、その目はまさか大人しかつたクラスの委員長が元ヤンだった事を知ったと言う驚きと似たものに染まっていた。

——いい、天音。人を騙す時に必要なのは度胸とハツタリ、それと度肝を抜くことなのよ」

そうよく元詐欺師で自分を逮捕した相手と結婚した天音の母は口癖のように言っていた。

（これで第一段階クリアです）

天音は喧嘩を終わらせるために一芝居打ちつつ次喧嘩した場合は実力行使に出ると言う事を臭わせるためさらにドスの聞いた声を出す。

「次、喧嘩したらわかってるんだろっなあ」

その言葉に赫々^{かくかく}と頭を動かす紫月、だが緋香里は引き下がらない。

「何言ってるんですの？私はただ、正しい事を言っているだけですのよ？」

笑顔で、そして青筋をビキビキと立てながら緋香里は言った。

「ああ、そうかい。この強情野郎」

天音の目がずっと細められる。

「ぶん殴られる覚悟はできてんだろっな」

そこからは野々夏にはコマ送りのように見えた。

天音が一瞬で間合いを詰め、拳を緋香里に向けて放つ。

その拳は顔ではなく、腹部へ向け一直線にはなたれ、そのまま緋

香里の体を吹っ飛ばす。

「よつと」

緋香里を太郎は受け止め、そのまま地面に寝かしつける。

（あう、太郎君、ごめんなさい）

天音はそう思いながらも口にせず。アイコンタクトを取った後、椅子に着席する。

最早が緋香里の体を担ぐと保健室へと連れて行った。

これは後に星羽学園で語り継がれることになる事件である。

第11話 オンナノコノユウキ。(後書き)

次回でオンナノコシリーズ完結予定。

天音が静雄に見えてきたことはナイショだ。(たまたまです。)

第12話 オンナノコノカンジヨウ。

女の子の心ってややこしかったり、単純だったり。結局男の子と変わらない。

#

「・・・」

一週間もたたず保健室のベットに入る羽目になった緋香里は肩身の狭い思いをしていた。

（ダメ、恥ずかしい、死にたい・・・悶死する）

ベットの周りにはクラスの担任教師の結利と一応、緋香里が所属していることになっている第5小隊の隊長である野々夏、そして緋香里と同じクラスの全くと言っていいほど目立たない、一応その存在を覚えていると言う程度のかなり地味な頭の左右に一つづつおさげを下げたメガネのそれでいて委員長と言うよりもぼわわした空気をまとった可愛らしい少女がいた。

「あ、目を覚ましたみたいです」

少女はそう言うと言らかにほほ笑む。

「初めまして、私胡桃^{くるみ} 詩麻^{しま}って言います。大変でしたね、紫月君とあんな喧嘩して、それに天音ちゃんにも吹っ飛ばされていたみたいですがべつにそんなこと恥ずかしいとか思う必要ないですよ？だって緋香里ちゃんは何にも知らないんですから。あんまり頑張っちゃだめですよ？一番負担がかかるのは私みたいな治癒能力持った人なんですから」

その笑顔にたつぷりと毒がまぶされているような気がして緋香里はなぜか痛まれない気になった。

「あ、それに死んじゃっても私は知りませんよ。だって、医者には常に無実ですし、無理して過労死したり馬鹿やって大怪我して死ん

でも関係ないですもん」

正直言つてグサツと来た。これ以上ないくらいに。

「もういやああああ」

ついに緋香里はそう言つて頭を抱えた。

「こら詩麻ちゃん、毒吐かない緋香里ちゃんすごい傷ついてるから。緋香里ちゃんそう言うのにまったく耐性とかないから」

結利が慌てたようにそう言うが詩麻はそれを聞いていたのかいないのかさらに言つた。

「え、だって私は言つて当たり前の事だけを言つたんですよ？剣や銃なんかの武器を持ってバカスコやつてる人たちに言われても説得力とか皆無です」

「言つたー！ついに言つたー！いつかは言つてたけどついに言つたよこの子！言つたよ！」

野々夏がそう大声で言つた。

どうやらいつか言つて思つていた台詞らしくそんなに傷ついては見えないが明らかにショックを受けている。結利に至っては目が死んでいる。

「し、詩麻ちゃんこの世界には言つちやダメな事もあるのよ」

ガシリと結利が詩麻の肩を掴む。

「うふふふ、ここ一階だから窓の外に放り出しても大丈夫よねうふふふ。外、たしか池だもの大丈夫よね濡れ濡れ透け透けになるだけで大丈夫よね。うふふふふふふふふふ、あははははははは」

頭の中の何か大事なものが外れたかのように笑う結利、完全に目がイッていた。

「ちよつと、先生落ち着いて、お願いだから落ち着いて！」

野々夏がフォローに入るが結利はそれを振り払う。

「むぎやー！」

その後の出来事は決して口にしないと緋香里と野々夏が誓つたのだがそれはまた別の話。

緋香里が外に出ると既に外は夕暮れの紅に染まっていた。

「どれだけ私、気を失ってたんだろ」

思わず緋香里がそうつぶやくと野々夏がバカ正直に言った。

「ざっと8時間で所かしら、寝不足も重なってたかららしいんだけどなんかやってるの？」

心配そうな声音で言う野々夏、緋香里は少し考えてからこう言った。

「内緒」

それ以上でもそれ以下でもない。

ただ秘密にしておきたい、それが緋香里の心情だった。

「ふーん、じゃほっとく」

話してくれないならそれで構わない、それが野々夏の心情だった。

二つの心情は重なり合うことなく触れ合うだけでお互いは知らない。

それぞれの胸の内に秘めた感情と本当の願いを。

第12話 オンナノコノカンジヨウ。(後書き)

次話予告

星羽学園に体育祭の季節がやってきた。

そんな中緋香里の知らない所で理事長が自らの野望の為に暗躍を開始し、野々夏は自らのためにある行動へ出て、戸一はある事の為に覚悟を決める。

一方でユイはその裏にある物を見て――

ついに話が動き出します。お楽しみに！

第12話 赤白黄色

「体育祭?!」

野々夏がいきなり言った一言を思わず緋香里は聞き返した。

「そ、明日からその準備期間と称して全授業が停止、その代りにほとんどが体育祭の練習、後いつも通りの訓練があるだけで他は自由時間になるわね」

「かなり大規模ね」

「それも売りですから、あ、それから大規模な演習も兼ねてるから。えつとたしか、大規模集団戦に置いての心理状況考察と精神的なストレスによる運動量の推移の観察が建前になってるからそれ専門の人も来るしでも能力使用があつたり、最後赤白黄色全軍によつてのぶつかり合い?があるけどそれ以外は普通よ?と言つても人死にがでない程度だから」

野々夏がそうキツパリと言つてきたことで緋香里はなんとなく悟つた。

—— ああ、やっぱりこの学校は普通じゃないんだなと。

「人死にが出ない程度つて怪我する可能性があるの?」

「ん、去年私は腕の皮がべーろーんと手首から肘にかけて大きくめくれてすつごく痛い思いしたわよ」

「想像しただけで痛そうね」

「ん、でもすぐ詩麻に治してもらつたから—— 毒舌攻撃喰らいながらね」

ああ、と言い緋香里は椅子に体を沈める。

「そう言えばうちのクラスは一組だから白組ね。今年はだれが応援団長なんだろ」

野々夏は窓の外を見ながらそう言つとそつと溜息を吐く。

(あのバカ理事長がなんか企んでそうですごく怖いけど) 　　そう思いながら。

#

最早は森の中で一人佇んでいた。

一人になりたいとき彼はよくこの森に来る。

自分の心の傷と向き合うために。

「なあ、俺はこれで正解なのか？」

誰に言うともなくそう言うとも最早は木の根元に腰掛ける。

風がそよぎ、小鳥が歌う。ただそれだけ。

最早はただ、そこに居た。

#

「ふ、ふっふふーん」

鼻歌を歌いながら理事長、赤原綾奈は鼻歌を歌いながら目の前にある三枚の隠し撮りの写真を眺めた。

「まず、生徒会会長の凍月 愛木^{いっつき いとき}」

そう言つて綾奈は黒髪が目つきの強い少年の写真にライターで火をつける。

「次に第5小隊長の朝屋野々夏」

次に野々夏の写真へ火をつける。

「そして、正体不明^{アウノウン}、里焰^{さとほむら} 茉莉花^{まりか}」

そして最後にいかにも明るくて活発そうな少女の写真に火をつけた。

「さて、どの子が一番になって、どの子が委員会の言いなりになっちゃうのかしら」

灰だけになった写真の入った灰皿を綾奈はちらりと視界に入れたのち、それをわざと高そうな絨毯の敷いてある床にぶちまける。

「ほんっとーに楽しみだわ。アリスちゃん」

そう言うとも彼女は人の物とはだれも思いたくないような口を真横

に引き裂いたかのような笑みを浮かべた。

邪悪極まりない、人として超えてはならない一線を越えてしまった笑みを。

第13話 決定事項

何度巡り会っても僕は君を殺してしまうだろう。

#

早朝、また野々夏は理事長室に呼び出された。

「クソ、最早の母親じゃなかったら今頃ぶっ殺してるわ」

物騒な事を呟きながら特別教室棟を抜け、野々夏は理事長室を目指す。

初等部から大学院まであるためやたら多く第一から第十二まである理科室の前を通り抜け、渡り廊下を抜け理事長室のドアをやや乱暴に開ける。

「あ、お早う御座います」

そう言っただけこちらに挨拶してきた少女を野々夏は一瞥し、正反対の位置の革張りのソファに腰掛ける少年の方を見た。

（里焰茉莉花に凍月愛木、面倒臭いメンツがそろったわね）

この二人の事は野々夏はよく知っている。

方や実力一つで色々な意味で規格外の風紀委員をまとめる中等部一年の風紀委員長、方やこの学校の顔役ともいえる生徒会会長。

両方とも知らないわけがないと言っこの学園でも一二を争う有名^{いちに}人だ。

なぜ、呼び出したか。野々夏にはそれがよくわかっている。

「で、どうして俺たちを読んだんだ。理事長センセ。後、何でどの委員会にも部活にも所属してない奴がいるんだ」

そう言っただけ愛木は野々夏の方を指さす。

「うーん、秘密ね。それにしても全校生徒教員含めた4,136人全員覚えてるそうだけどすごいわね。完全記憶能力でも持つてるの？ちよっとした町の人口だけど」

はぐらかすように結奈が言いあきらめた様子で愛木は舌打ちをするとそっぽを向く。

「えっと、集まってくれた訳わかってるわよね。時期が時期だしあなた達にやつてもらいたいのは――
それは野々夏の予想通りの言葉だった。

#

「オイ」

掲示板の張り紙を眺めていると緋香里は後ろから声をかけられた。
「どいてくれ」

それはクラスメイトの男子で左目にキャラづくりの一環なのか黒い眼帯を付けていて常に白い執事がはめていそうな手袋をしている。

「ふーん、今年は大変だぞこりゃ」

その男子が言った意味はなんとなく緋香里にもわかった。

理事長連絡

今年の体育祭応援団長決定

紅組 中等部 1 - 2 里焰 茉莉花 (さとほむら まりか)

白組 高等部 2 - 1 朝屋 野々夏 (あさや ののか)

黄色組 大学部医学科 凍月 愛木 (いてづき いと き)

そうとだけ、掲示板の張り紙には書かれていた。

第14話 我が兄妹

何度でも何度でも君に会いに行くよ。
死ぬまでね。

#

「お前ら、俺の話聞く気があんのか」

そう言つて青筋をビキビキ立てる少年の前ではずいぶんと寛いだ様子で野々夏が黒いコートのようなものに白い糸で刺繍をしていた。

「ないわよ、持ち合わせてないわよそんなもの」
ブチと何かが切れた音がした。

「てめえらしいかげんにしろおおおお」

この少年の名前は時羽^{ときはね}来夢^{らいむ}。いつぞや廊下の張り紙の前で緋香里にどいてくれと言つた少年である。

「俺の苦労も少しは考えろよ、マジできついんだよ、最近白髪増えたんだよ！」

「それはあんたのストレスが多いからじゃないの？このストレス男」

「その原因を作っているのはどこの誰かさんですかねえ！」

思いつきり机に拳を打ち付ける来夢、その姿はまさしく上司にコケにされリストラ寸前のサラリーマンだ。

「うわああああ、俺、どうすればいいんだよ！眼帯キャラなってるし！どうすりゃいいんだよ！」

「知らないわよ」

すつぱりと野々夏がそう言つたが来夢は全く聞いていない。

「あーもう、どうにでもなりやがれー！」

来夢が思い切りそう叫んだその時――

「お兄様！大丈夫ですか？」

頭にヘッドドレスを付けた少女が教室に入ってきた。

「もう、お兄様を苛めないでください。あなたのおもちやではありませんから」

そう言うてはいつてきたのは時羽ときはね 鏡花きょうか。来夢の再婚の関係で兄妹になった来夢と同じ年の少女でクラスも同じだ。

「いや、そう言うわけじゃ――――」

「お兄様さえよければ私はいつでもいいのですよ？安穩な日々等今すぐにでもぶっ潰して非日常の世界へと、私とお兄様のめくるめく美しき世界を二人で作り上げましょう！」

何処か遠い世界へと行く鏡花を余所に来夢と野々夏はこそこそと耳打ちをする。

「（ねえあの妹大丈夫？頭のタガの一つや二つ吹っ飛んでない？）」

「（ああ、明らかに逝つてる。俺派遣団の世界に足を踏み入れたくはないのに。俺に対して兄妹超えた感情持つてる時点でアウトだ。エロゲじゃねえんだエロゲじゃ。昨日なんか婚姻届に母印無理やり押されかけたぜ）」

「（婚姻届？あれ、日本の法律だと二等親以上、つまりはとこよりも血のつながりが薄くないと結婚できないんじゃないかなかったつけ）」

「（いんや、養子だったり親の再婚相手の連れ子で血がつながってさえいなければ結婚できるらしい）」

「（可哀そうに、好きな子いるんでしょ・・・鏡花以外に）」

「（まあな）」

そこで言葉を切ると野々夏は強化を追い出しにかかる。

「ほら出た出た」

「お兄様ああああ」

大声で叫ぶ鏡花を頑として無視する野々夏と来夢。

静かになったのはそれから十分ほど後だった。

「おにーちゃん」

星羽学園、図書室内。そこにいきなり明るい声が響いた。

「おにーちゃんは どうして勉強するですか？ 暁^{あかつき}には意味が解りません」

そう言っ てせいぜい小学校3年生でいどにしか見えない少女が大学生のいかにも遊びまくっていると言っ 見た目の青年と言っ よりむしろ少年と呼んだ方がしっくりと来る学生に抱き着く。

「あんな、暁。頼むから自分と他人を比べるんじゃない。こっちが傷つくから」

「なんでですか？」

キラキラとした瞳で兄の方を見つめる少女。少年は追い込まれる。

「よし、とりあえず野々夏の所いこう」

「わ、お兄ちゃん逃げたー」

少年の方の名前は朝屋^{あさや} 秀^{しゅう}。少女の名前は朝屋^{あさや} 暁^{あかつき}。

両方とも野々夏の兄妹である。

第15話 過去少女

君が望もつとの望まないと君には関係ない。それが世界の理不尽さなんだから。

#

息が上がる。自然と脈拍が早くなる。

それでも私は走る。目の前には一人だけ、抜かしたい。でも、追いつけないのは何故だろう？

早く一番前を走りたいのに？

もつと、もつと早く。ただひたすらにもつともつと――

#

「っ！はあはあ」

息を荒げながら緋香里はスपोर्टリンクを浴びるように飲んだ。ここはグラウンドのトラック。緋香里は200メートル走の選手として体育祭に参加する。

そのために200メートルトラックを全力速で走ったのだ。

「すごいですね、私なんかよりも全然早いです」

そう言つて天音が疲労のためか力なく微笑んだ。

この間の体力テストで緋香里は周りの全員をぶっちぎつて100メートルを走った。

一番足が速かった天音でも5メートルほど突き放して走ったのが野々夏^{団長}の目に留まったらしく200メートル走、そしてリレーに出る事が決まっている。

「ふう」

緋香里は溜息を吐くと木陰でこそこそと集まっている男子の方を

見た。

（あれ、何かに似てるのよね・・・ああ、アスキーとに似てるんだ）

そんなことを思いつつ緋香里は木陰に横たわる。

「つかれたー！」

久しぶりに全力を出し切ったと言う快感の中で、ほんの少し自分の過去を思い出した苦さの中で。

#

「んー、応援合戦どうしようかしら？」

そんなこと言いながら野々かはぺたぺたとホワイトボードに写真を張り付けていく。

「まず天音でしょ、美羽でしょ。あ、一年の三島もいいわね」

順調に参加者を決めていく野々夏、その顔はとても楽しそうだ。

「ふっふーん」

鼻歌も出た。

——コンコン。

「入るぞー」

そのよく見知った声に野々夏はくるりと振り向いた。

「あ、秀兄イに暁。どうしたの？」

「ん、妹を激励しに来て悪いかよ」

そこに居たのは野々夏の兄の秀と妹の暁だった。

「単位一個落としたって聞いたけど大丈夫？」

「う、それは聞かない約束だ」

そんな他愛もない会話をしつつ野々夏は笑顔でぺたぺたと写真をホワイトボードに張り付けていく。

「ん、何だこれ？応援合戦のメンバーか？」

「うん、チアリーディングにする予定なの。男子票を根こそぎ奪うためにね」

「おまえらしいなあ」

苦笑しながら秀はポリポリとでこを搔く。

いつも通りと言っ言葉が野々夏の頭の中を過る。

「ん？」

そう言っ秀は一枚の写真を手に取る。

「あ、それうちのクラスのクラスメイトの棘木緋香里って言っ名前の子」

その写真には緋香里が写っている。

「いや、そりやないだろ。確か俺の記憶が正しかったらスポーツ系の大学付属の中高一貫校に通ってるはずだぞ？小学校の時100メートルで県大会で一位になっ記録まで塗り替えたっ話だったから推薦で入学したはずだからな」

その言葉に野々夏は固まる。

「え、それっでどういっ事？あの子つい最近まで隣町にあるごく普通の高校に通っっていたのよ？」

「ああ、中体連を3年の時に出なかつたらしい。両親が死んで転校したにしてもでなきゃおかしいだろ。それに期待の新星だなんだってかなりの騒ぎになつたの覚えてる。俺の中学最後の大会で華麗に抜き去っていきやがった。おかげで予選は2位通過って言っ思い出があるからはつきり覚えてるんだ」

野々夏はその言葉に返す言葉が見つからなかつた。

「たぶん、あいつはもう2年の時にあつた何かで選手として駄目になっちまつてる」

第16話 Things broken

僕が君を望んでも君は僕を望まないのだろう。

#

ここに居る事、緋香里はその言葉を口の中でそつと転がすとベツトに横たわり天井を見た。

（もう走らないって決めてたはずなのに）

緋香里はもう走らないと父親と母親が死んだこととは関係なくその前から決めていた。

（どうしてこうなっちゃんだろう）

元はと言えば緋香里が足を速くしたいと思ったのは自分を傷つける何かから逃げたかったからだ。

それでも人の悪意は止まる事を知らない。どれだけ足が速かろうがそんなことは関係なく悪意は人を傷つける。だから緋香里は走らなくなった。

—— なった、はずだった。

「もう、いいのに。走らなくていいのに」

緋香里は小さくつぶやくと枕に顔を押し付けた。

#

深夜の演習場、そこに何発もの銃声、そして人の声が響いていた。「ほら、緋香里そっちいたあ」

今、やっているのは柔らかい幼児用の音の鳴る小さなボールを弾きあうと言つもので野々夏は銃身、もしくは弾丸で、戸一は木刀で、緋香里は杖で、そして天音は拳で弾いている。

「えい」

ピイと言つ中の笛の音と共に天音の方へ弾くとそれを天音は拳ではなく蹴つて緋香里の方へ帰してきた。

「ふえっ！」

いきなり自分の方へ向けて飛んできたボールに反応しきれず杖にかすらせることも出来ず地面に落ちた。

「今の記録は22回ね。最初の5回とかよりは断然伸びたわ」

これはチームワークの練習らしく全員が参加することもあれば用事で数人が抜ける事もあった。

今日は用事でいないユイ、最早、紫月、白莓、栗夢、まるん、太郎、夏目を除いた4人でやっている。

「はい、緋香里。腹筋じゅっかーい」

野々夏はそう言つと他人事のように地面に座り込むと溜息を吐いた。

ちなみに一番地面にボールを落としているのは白莓、次点が夏目と緋香里だ。

緋香里が10回腹筋をしたとき、リリリリとブザーが鳴り交代の時間を告げた。

「あ、ちょうど交代だから。帰りましょ」

そう言つて野々夏は立ち上がると銃を担ぎ上げそそくさと退散する。

その時だった。

「あれ、棘木さん。お久しぶりですね」

緋香里は声を掛けられ、足を止めた。

「どうしてあなたがここに居るんですか？僕からすべてを奪つて嘲笑い、全てを奪つて行つたあなたが」

そう言つと緋香里の正面に居た少年がどす黒い笑みを浮かべる。

「ねえ、棘木さん」

駄目だ、もうこれ以上関わってはいけない。野々夏はそう思い緋香里に声を掛けようとした。

「また、僕の全てを奪いに來たのかな？でも、遅いよ今度は僕が

君の全てを奪ってあげる。全部奪ってあげる」

その言葉の一つ一つに野々夏は詩麻の物とは違う毒が含まれている気がした。

「ハア、ハア、ハア」

緋香里の息がどんどんと早くなる。

その顔はすっかり青ざめていた。

「緋香里？」

野々夏は緋香里の肩を掴みゆする。

「だい、じょうぶ、だから」

緋香里は切れ切れにそう言つと気を失った。

「その女に関わる必要はないよ、経歴不詳が多すぎる小隊長さん。その女にそれ以上関わるのなら僕が君を壊すよ？全部ね」

嘲るように少年は言つて緋香里に顔を近付ける。

「君が壊れてしまうまで」

第17話 レモネードと過去の問題

たえ僕が君を傷つけたとしても、君は笑い僕の元から離れるだけなのだろう。

僕はそれでも君を――

#

緋香里が目を覚ますとそこは第5小隊の寮の一階にある男女共有のリビングのソファの上だった。

「大丈夫？」

野々夏が心配そうに声を掛ける。

「え、あ、うん」

緋香里は弱々しく微笑みながら野々夏に言った。

（大丈夫、少し嫌な事思っただけ。すぐに忘れる。きっと、あの時みたいに）

緋香里は心の中でそう言うゆつくりと立ちあがる。

「後で来夢に何とかしてもらいましょう」

野々夏はケータイに手を伸ばすとピポパと手早く短縮ダイヤルを押し、来夢へと電話を掛ける。

「もしもし、来夢。こんな夜遅くに御免なさいね、ちょっとこっち来てくれない？小隊メンバーじゃないんだし名目はそうね――

――ま、テキトーにでっち上げておくわ。だからそこところよろしくー。ん、10分以内に来る？ああ、鏡花ちゃんから逃げたいのね。部屋余ってるからどうせならここで寝てけば？勉強道具と明日の支度していらっしやいな、むしろいい加減腹くくってうちにいらっしやいな。あの事故の事なんて誰も気にしてないから」

そう言う野々夏は通話を切り、緋香里にまだ寝ているように手で合図を出した。

「あの事故って？」

「んー、後で嫌と言うほどわかるから今は説明しないで置く」

野々夏は短く言い捨てるとキッチンに入り冷蔵庫からレモンをはちみつに漬けたものをだし黙って炭酸水で割る。

「飲んで、ハーブの蜂蜜を使ったレモネードよ。体に良いし、落ち着くわよ」

野々夏が差し出してきたコップを緋香里はそうつと受け取ると口に一口含んだ。

（酸っぱい・・・）

ほのかな甘みと一緒に広がった作り物でも何でも天然の果物の酸っぱさに緋香里はなぜか安心感を覚えた。

「ねえ、これから私と来夢がする事を赦してね。あなたはそれで怒るのかも知れないし、悲しむのかもしれない。でも赦して、あなたが少しでも幸せになつてくれるように思つてやっている事だから」

野々夏はただただ、ゆっくりとそう言った。

#

「おい、来たぞ」

そう言つて来夢が来たのは20分後だった。

「鏡花を追い払うのに時間を食つてな、少し遅れた」

その理由に緋香里は首をかしげ、野々夏は苦笑いした。

「それで、これから何をする気？」

緋香里のその問いに野々夏はこう答えた。

「これから少しだけ来夢に緋香里の過去を見てもらうの嫌なら嫌で構わない、けれど私はあの男と緋香里の間に何があつたか知りた。緋香里はそれを拒むことができる。さあ、どうするの？」

野々夏はそう言つと逆に緋香里の瞳を見つめた。

「自分だけでいろんなこと抱え過ぎてぶっ倒れるのか、それともいつそのこと全部吐きだしてすっきりするのか自分で決めなさい」

第18話 記憶潜航 前編

君は微笑んだね、僕を見ながら。無様な姿の僕を見ながら。

#

野々夏の問いに緋香里はほんの少しだけ考えた後に首を縦に振った。

「そう、良い答えね」

その言葉に来夢は手袋の右を脱ぐ。

「で、こいつの過去を見ればいいのか？」

「うん」

野々夏はそう言うところりと体を来夢の方へ向けた。

「よろしくねー」

ひらひらと他人事のように手を振る野々夏、来夢はそんな野々夏に見向きをせずに緋香里が横になっているソファの方へ歩み寄った。

「はあ、じつとしてるよ」

そう言って来夢が右手を緋香里に見せる。

「俺の能力は人に触ると右手で過去、左手で未来が見えるんだ。ある程度コントロールは出来るけどな。これからその能力を使ってお前の過去を見る。出来る事なら氣を楽にしてくれ、リラックスしてくれと見やすい」

その説明よりも緋香里は来夢の手に走る醜^{みにく}く、見るからに痛そうな傷跡の方が氣になった。

「あ、この怪我は事故で他人庇った時に出来た傷だから氣にすんなって。目もその時に使い物にならなくなっちゃったし、背中と左腕はもつと酷いぞ」

そう明るく来夢は言つと手を緋香里のでこにかざす。

「行くぞ」

そう言つと来夢は右手で緋香里の頭に触れた。

#

人の過去を見る。いつもその最初の瞬間は水に飛び込んだかのように来夢は感じる。

そして少しづつ体が慣れるにしたがつて様々な光景が目の前に広がってくる。

（どこだ？）

ついこの間やかなり昔の緋香里の過去と言つべきものが来夢の目の前を映像となつて流れていく。

これは全て緋香里の記憶だ。忘れているつもりでも殆どの事は覚えていた事が多い事を来夢は知っている。

（たぶん、つい最近思い出したことだからすぐ近くにあると思うんだがな）

来夢はそう思いながら次々と緋香里の記憶を覗いていく。

血に塗れた記憶もあった、全てを失い泣き叫ぶ記憶もあった。

それらは全て緋香里の経験したことだ。

（酷い、たった一人にこれだけの物を背負わせていいのか？）

来夢はその光景を只々眺める事しかできない。

（さて、探さねえと）

きよろきよろあたりを見渡す来夢、そして見つけた。

（あれか！）

野々夏が電話を切った後にメールで送ってきた写真、その写真に写っていた虫も殺せなさそうなほど優しい顔の少年がいる記憶を。

（よし、潜るか）

来夢はその記憶の方へ手を伸ばす。

そして来夢は――

#

「やっぱり、君は強いんだね。強くて弱いんだね」
そう言って淡く微笑む少年。緋香里は屋上の柵の上に座っている。
「だから僕は決めた。君を壊すって、僕みたいだね」

第18話 記憶潜航 前編（後書き）

長くなりそうなので前後編に分けました。
来夢がやたら頑張っているのです。よろしくです。

第19話 記憶潜航 後編

僕はただ、君の事を思っていた。

#

微笑む少年に来夢は怖気^{おそけ}以外の何物も抱かなかった。

その目は静かな狂気に燃え、微笑みも薄っぺらいものだ。
だからこそ、だからこそ来夢は怖いと思った。

「どうやって壊すの？」

緋香里は興味半分でそう言った。

「たとえば———こうやって」

そう言つて少年は屋上から、飛び降りた。

グチャリ、と言う湿っぽい音が響いた。

そこから先は緋香里にとっては生き地獄だった。

助けられなかった、生死が分かっているにもかかわらずかけられる心もとない言葉。そして軽蔑。

やがて緋香里は他人を拒絶してろくに食事もとらず、殻にこもるようになり両親の元へ帰された。

どんな目で緋香里の両親は見たのだろう———生きた人形のようになつた実の娘の姿を。

どんな目で緋香里の見舞いに来た人は見たのだろう———変わり果てた少女の姿を。

そして来夢やいろいろな人の運命を変えたあの日、緋香里は守ってくれた、支えてくれたものが根こそぎ無くなってどう思ったのだろう。

来夢には何が正しいのかわからなかった。

（もうこれ以上、見るのはやめよう）

来夢はそう思うと目を開けた。

「見たのね」

憤るのでもなく、悲しむでもなく緋香里は淡々と言った。

「ああ、お前の始まりを見た」

来夢はそれに答えると緋香里から手を放した。

「少し、整理したいから話は明日にしてくれないか？」

来夢のその言葉に緋香里は頷いた。

「私もその方がいい」

眠たそうに野々夏は言うとおくびを一つ洩らした。

「何より、もう夜遅いしね」

#

翌朝、来夢は緋香里や第5小隊の面々の前で自分が見たすべてを話した。

「・・・そんなことがあったのね」

以外にも一番最初に口を開いたのは夏目だった。

「あたしには傷ついたとか傷つけられたとかそんな事全然わかんない。けど、すごい辛かったのよね。辛くて、苦しくて、悲しくて、むなしくて、いろんな感情がごっちゃ混ぜになって心が耐え切れなくなつてそれで壊れちゃったのね。あたし達にそれを受け止める事なんてできないけれど支える事も出来ないけど話して吐き出して少しでも楽にすることはたぶんできると思う。あたしも野々夏も戸一もみんなそうやって来て初めて今ここに立ってるんだよ。あたし達は強いんじゃないの、弱くてそれでも支えあえるから強く見えるの。緋香里、もう意地っ張りはやめよう？泣きたいときに泣いて、笑いたいときに笑って、怒りたいときに怒る。それでいいの。当然少しは抑えないといけないけどそれがあたしの言う強さなの」

夏目はそう言って胸を張った。

「緋香里もそんな生き方でいいんだよ」

すとつと緋香里は胸の奥の重いものが落ちていくのを感じた。

まるでずっと抱えていた重荷が落ちるように。

「う、ああ」

緋香里は嗚咽を漏らした。

「だから、一回自分の心の傷と向き合お。結局大切なのは自分の気持ちなんだから」

キユと夏目が緋香里の体を抱きしめた。
過去の自分達と重ねながら。

第19話 記憶潜航 後編（後書き）

第5小隊の過去話ですが第二章以降で徐々に詳しく語る予定です。

第20話 夜明け前に（前書き）

章タイトル変更しました

第20話 夜明け前に

君がいた。君が僕の目の前にいた。
それだけで十全で十分だった。

#

「ここなの？」

「ええ、シフト表から言っただけ第1小隊関係だからね」

翌日の夜明け前、自分の寮と正反対の方角にある瓜二つの外観の寮の前に緋香里と野々夏、そして来夢はいた。

「と言うよりなんですぐわかんのよ」

「ん、シフト表は完全公開制だからね。練習の時間帯だけでもわかれればすぐに調べがつくのよ」

「へー、初めて知った」

緋香里が素直に言っていると緋香里はそれに満足そうに笑い、その後顔を引き締めた。

「さて、行くわよ」

野々夏はインターホンを押した。

#

——ピンポン——

間抜けなインターホンの音に新聞を読んでいた少年は顔を上げた。

「誰か来たのか？」

「あ、転ころが出来ます」

そう言っただけ髪をキャラメル色に染めた少女がソファから立ち、玄関へ向かう。

「あ、戻るついででいいから芦個ろこにミネラルウォーターをぷりーず」

「芦個姉それくらい自分でやってよ」

「ぷう」

膨れる姉を無視して妹は受話器を手を取った。

「もしもし、第一小隊隊長胡桃くるみ ころう 転です。なにかご用でしょうか？」

#

【もしもし、第一小隊隊長胡桃転です。なにかご用でしょうか？】
インターホンを通じて聞こえてきた声と苗字と喋り方に緋香里はなんとなくクラスメイトの三つ編み毒舌の少女を脳裏に浮かべた。

「はいはい、***君っているかしら」

【あ、いますよー。用事ですか？今、開けますので少し、そちらで待っていてくださいね】

プツツと言う音と共にインターホンの通話切られ少ししてからガチャリとドアが開いた。

「野々夏ちゃんお久しぶり。秀君と暁ちゃん元気？」

「ええ、この間来てました」

「よかったー最近見ないからどうしたのかなって」

その会話に緋香里は疑問符を浮かべた。

「秀君と暁ちゃんって誰？」

「私のお兄ちゃんと妹」

野々夏はあっさり言い、緋香里は啞然とした。

「兄妹いる事すら知らなかったんだけど」

「そう言えば言ってなかったわね」

野々夏はしらを切るつもりでそう言う前を見、転に言った。

「さて、会わせてもらおうかしら」

転がそつとドアを開け緋香里と野々夏は玄関へ入った。

「少し、待っていてください。今、彼をリビングに呼ぶので」

そう言つと転は靴を脱ぎてととと廊下を歩きリビングへ入った。

「*****くん、*****くん。お客さんですよー」

大声で言う転。その名前が呼ばれるたび緋香里の心があの日へと戻りかける。

（落ち着いて、落ち着くのよ私）

息が少し荒くなり目の前が暗くなる。

その時だった。

「こつち来てください」

転の声が遠くから聞こえた。

「行くわよ」

野々夏がそう耳元で囁く。

緋香里は靴を脱ぐと過去と向き合つたため歩き出した。

第20話 夜明け前に（後書き）

あれ、こんな予定じゃなかったのに。

ユイ大活躍の予定が予想以上に夏目が出しゃばりこんな展開に。
来夢の方は予定通りだったけど！

次回緋香里と****の関係に決着が付きます。

名前が伏字なのは考えていないからではなくワザとです。

第21話 T o . D o

君は僕を傷つけられない。

僕は君を傷つける事しかできない。

ゆがんだ関係に僕は満足しきっていた。そのはずだった。

#

「・・・」

気まずい空気を肌に感じながら野々夏は緋香里が喋り出すのを待っていた。

「どうして、どうして私に話しかけてきたの？」

その後続く言葉はなんとなく推測できる。

けれど野々夏はあえて黙ったままだ。

「そうすればもう誰も傷つけずに済んだのに」

悲痛の色をにじむ声音で緋香里は言った。

「どうして？」

その言葉に少年は何のリアクションも示さない。

「どうして・・・なの？」

少年はゆっくりと口を開いた。

「君がまた僕の目の前に現れたから」

その一言に緋香里は辛そうな表情になった。

「僕からすべてを奪った君が僕の目の前に現れなければ、僕はよかったんだ。君さえいなければ、君が陸上さえ始めなければ、君が僕に勝たなかったらよかったんだ」

その言葉にどれだけの数の緋香里に対する呪いの言葉が入っているか野々夏には分からなかった。

その言葉を掛けられ緋香里がどんな感情を抱いたか野々夏には分からなかった。

「君が、君がこの世界に生まれてこなければよかったんだ！」

緋香里が下唇を噛み、冷たい吐息を漏らす。

「そんな人、この世界にはいない。生まれて来ちゃいけない人なんてこの世界にはいないのよ」

これは緋香里が出した一つの決意だ。こたえ

昨日の夜遅くまで一人考え、ありとあらゆる受け答えを考えだし、そうやって見つけた自分の本当を声に託して緋香里は少年に伝える。

「あなたの考えが間違つてるとは言わない、その代り肯定もしない。私にはその権利がないのだから。でもあなたはその考えだと自分を否定していることになる。逆説で自分を自分で否定して何が面白いの？私はあんな状態になっても自分を否定したりしなかった。だから今ここにいます。あなたはただ私に逃げ道を求めているだけ、ただ私に甘えているだけ。もうこんなこと止めて、私はあなたのおもちゃじゃない」

その言葉にはまだ続きがある。

「だから私はあなたを拒絶するわ、細木 亨介。ほなき じょうけい 存在を肯定したまま、あなたの事を拒絶する。これが私の選んだ道だから」

そう言つと緋香里は席を立て黙つて第1小隊の寮から出た。

「あ、ちよつと緋香里？」

慌てて野々夏は緋香里を追いかけた。

幸い、緋香里は出てすぐの所で待っていた。

「いろいろ吹っ切れちゃった」

嬉しそくに、そして残念そうに緋香里言つと空を見上げた。

「それに私の能力が何かこれで分かったから」

「は？」

緋香里はそう言つとそつとポストに封筒を入れた。

おそらく彼ならわかつてくれるだろうと言つ推測と共に。

その宛名はこう書かれていた。

——君から僕へ、僕から君へ。恐らくはたまにしか合わない君へ

そうとだけ書かれていた。

「何入れたの？」

野々夏が悪戯っぽく緋香里に聞いた。その問いに緋香里は微笑みを返すだけだった。

第21話 T o · D o (後書き)

あとがき

ども、ずいぶんとあっさりと第一章が終わってびっくりしているみかなぎです。

これで緋香里にまつわる話は終了、次からは体育祭の話となります。お楽しみにー

実は来夢が理想のタイプだったり

みかなぎあやめ

第1話 祈る母（前書き）

第二章スタートです。

第1話 祈る母

少しでも君が幸せになれるよう祈ります。
だってそれが役目だから。

#

「もうおまいら全員死ねええええ」
心の底から来夢は叫ぶと教卓を思い切り拳で叩いた。
（いや、いやな予感バリバリしてたけどさ。たしかに、でもこれはねえだろおおおおお）

今ここに居るメンバーは朝屋3兄妹、第5小隊の面々、詩麻、そして紅月くつきさお 紗生と言う非常に空気の読めない天然少女のみでかなりの個性派にして約一名を除いたらそれなりの実力を持った人物ばかりの構成だ。

「お前ら話聞く気あんのか！ほらそこ、パソコンで二〇二〇見てんじゃねえ！20やん〇るはもつと駄目だろうが！」

そんなことを大声で怒鳴る来夢に同情の目を向ける人物が二人、それはもちろん紫月と最早だ。

（（同じツツコミ担当として心の中で言う、とりあえず頑張れ。お前が頑張れば俺たちは平和なんだ））

まったく同じことを心の中で思う二人、その姿は激しく怪しかった。

#

「ちよつと、これはどう言う事なの！」
そう言って声の主の赤毛の女性は机に体育祭の案内のパンフレットを叩きつけた。

「何がしたいのよ、そんなに私の娘を苛めて楽しいの!？」

「まあまあ落ち着いてよ」

そう言って理事長、赤原綾奈は目の前の相手をなだめようとする。
「ねえアリス・アベラール。あ、結婚してるからもう朝屋アリスだっけまあいいや。苛めてるわけじゃないわよ。ちよつと遊んでるだけよ、上層部のお偉いさん相手にね」

にこやかに笑う綾奈にアリスは嫌悪感を隠そうともせずと言った。

「そのせいでこっちの商売がやりにくいっいたらないわ」

商売、その言葉に今度は綾奈が眉根を寄せた。

「まだやつてるの？確かにアリスは今この世界にたった二人しかない予知系の能力持ちだけどそれ商売にしてどうなのよ？」

予知能力、それはつまり未来が見えると言う事だ。もちろんそれ相応の代償を能力の持ち主は払う事になる。

もう一人の予知能力を持つ者である来夢は全身に負った消えない傷がその代償と言える。

そしてアリスの払う代償は――

「だってあなたは自分の感覚が代償なんでしょう？少しずつ視覚と聴覚を除いた感覚が鈍くなっているはずよ、ホントはもうこの部屋が暑いのか寒いのか、今自分の体に何が触れているか、物を食べてもどんな味がするか、体が傷ついても痛みすらも感じないんでしょう。もうこれ以上能力を使わないで、私があなたの事をどれだけ心配してるか分からないの？」

その言葉にアリスの顔に暗い影がよぎる。

「ええ、それはわかってる。確かに私はもう殆ど何も感じないわ、けれどそれでも私は守りたいの。だいじな夫も野々夏も秀も暁もみんな守りたいの。幸せになってねって祈ってるの。だから止めないで、止めなくていいの。リスクは自分が一番わかってるつもりだから」

綾奈にはその気持ちが痛いほどわかった。同じ子供を持つ母親として。そのために彼女は理事長となったのだから。

「さて、これからが本題。綾奈、一体どうするつもり？」
いつか、いつか一緒に肩を並べて戦った時と同じ悪戯^{いたずら}を考えている子供と同じ顔でアリスは言った。

綾奈は言葉を選びつつすべてを話すことにした。

第1話 祈る母（後書き）

第二章は体育祭編の残りと父母兄弟姉妹従姉妹叔父叔母祖父母など家族関連の内容を予定しています。

それと今書くペースを計算したら夏休みの話を冬休みシーズンに書くことになっててわろた。

兎にも角にも頑張ります。

第2話 背中合わせの命題

「むー」

午後九時、緋香里は何故だか知らないがお腹がすいていた。

今日は訓練もなく、ただ体育祭の用意と練習に追われたただけでも平和だった。

「おなかすいた」

緋香里はそつというとベットから立ち上がり財布を掴む。

余談だが緋香里は寝るときは白いタンクトップに紺色のカーゴパンツと言うのがお決まりのパターンでありこの格好でそのまま外に出ても今の季節なら何も言われない。

一階に降りると野々夏が録画していた深夜アニメを見ながらポテトチップスを食べていた。

「なんか夜食に買って来るんだけど野々夏は？」

「なんとなく緋香里が聞いてみると野々夏は。」

「コーラ飲みたいから買ってきて、カロリーカットじゃない奴」

「わかった」

緋香里はリクエストをしっかりと記憶し、緋香里は足早に夜間外出用の門へ向かった。

#

緋香里はこの学園に来て寮関連で驚いたことが三つあった。

一つは小隊ごとに個別の寮に男女関係なく共同生活し、そのほかの生徒は共同寮に住むこと、一つは寮でペットが飼える事、これは現にユイがウサギを飼っている。

そして最も驚いたことは高等部以上は夜間に無断で外出ができると言っ点だ。

「はい、発信機」

そう言つて門番の女性は発信機能付きトランシーバーを緋香里に手渡す。

これは昔この町が襲われたときに外に出ていて連絡が付かない生徒が出たため携帯よりも回線が混み合わず一括して指示の出せるトランシーバーを持たせるようになったらしい。事實は不明だが。

「行つてらっしゃーい。外でむやみに能力使わないでねー」

そんなことを注意されたがあいにくと緋香里にはそれがどういうものかはなんとなく見当がついても使い方は全く分からないため意味がない。

緋香里は門を出ると目の前のコンビニに入った。

「いらっしゃいま——つてうお、緋香里じゃねえか！」

「あ！」

なんとコンビニのレジには幸が何とも薄そうな来夢がいた。

「なにやってんの？バイト？」

「いんや、家の手伝い。俺の家がこのコンビニの店長で暇見つけでは手伝いに来てんだよ」

「思つた以上に親孝行者なのね」

「思つた以上につて！お前さらつとひどいこと言つたな！」

家族がいる、その事に対しほんの少し緋香里は憧れを抱いた。

「つて言つても本当に血が繋がつてるわけじゃねえけどな」

来夢は面倒臭そうに言うとポリポリと頭を掻いた。

「本当の親父は俺が生まれる前に死んでるし、俺が三歳の時に再婚したのが今の親父で六歳の時に母さんが死んでさらに再婚して鏡花が妹になったんだ。だから鏡花とは完全に血が繋がらねえし、戸籍上の両親とも血が繋がってねえんだ」

さらつとそんなこと言う来夢、その孤独は緋香里にも痛いほどわかった。

家族同然に扱ってくれていても血のつながりがないと言う事に怯え、孤独を余計に感じるという事が。

「ま、それでも生きていくには何の支障もないけどな」

そう言つて全てを笑い飛ばす来夢。

緋香里はそんな彼の事がほんの少しだけうらやましかった。

第2話 背中合わせの命題（後書き）

あれ、変なフラグ立った。

第3話 青空の下、始まるもの

「ふふふ、ふふふふ、さあこの日が来たわよ！」

野々夏が怪しげに笑う後ろで緋香里達は苦笑いした。

「ねえ、アレ大丈夫？」

「わからん」

野々夏をアレ呼ばわりする緋香里。野々夏の耳には入っていない。

「と、言うよりあれくらい燃えてもらわないと困るけどな」

来夢はぼそりと言うと空を見る。

雲一つない快晴の元、体育祭が始まる。

【それでは、理事長。開会に置いて一言どうぞ】

少し離れたところにある壇上へ理事長が上がっていくのを見て緋香里はぎよつとした。

「え、若いよ予想してたより」

「年増なんだよ」

真実を知る最早が隣でぼそりと言った。

【はあい学生諸君、元気にやってますか！。怪我はした場合は各自、自分の組の治療担当の生徒に見てもらおうように。それともう一つ——絶対に後悔しないように各自自分の持てる全力を出しなさい！以上！！】

そうとだけ言うつと理事長は壇上から飛び降りた。

「ねえ、うちの理事長大丈夫？」

「たぶんアウトだろ」

最早はそう言うつと頭を抱える。

（年考えろよ）

今年40うん歳になる母親に関する悩みは尽きないようだった。

【第一競技、能力使用無100メートル走に出場する生徒の皆様は本部テント前にお集まりください】

開会式を終え白組の休憩所として割り当てられた初等部校舎に入ったところでそんな放送が入り緋香里はスポーツドリンクで喉を適当に潤すと校舎を出る。

「それじゃ行っていくわね」

「全力で頑張ってるねー、私ちょっと着替えあるから」

そう言っただけで野々夏と分かれ緋香里は一番大きな第3グラウンドへ向かう。

ウォーミングアップがてら緋香里は軽く走る。

第3グラウンドまでは約100メートル、歩いても十分間に合うのだが緋香里は軽く走る事にした。

ほんの少しの胸騒ぎと共に

#

「いっやーよく晴れたわねえ」

そう言っただけで綾奈はどっかりと本部テントのパイプイスに腰掛けにひひと笑った。

「そうね。それで大丈夫なの？」

その隣には野々夏の母、アリスがいる。

「ん、計画通りよ。ただあいつらが過干渉してこなかったらもうちょっとやりやすかったんだけど」

綾奈はスポーツドリンクを一口飲むとテントの外にいる黒髪を腰まで伸ばした少女を指さした。

「ほら、あの子。あの時、静葉が残そうとした子、緋香里ちゃんよ」
線が細く今にも壊れてしまいそうなガラスのような印象を与えるがそれでも彼女は両親が死ぬと言う出来事から立ち直り、真実を知りたいと望むだけの精神力を持っている。それはすなわち、人として芯が通っていると言っただけだ。

だから、静葉は全てを託したのだとアリスは思った。

だから、今度は自分たちが荒波にもまれそうな少女を助ける番だと心に誓った。

「さ、競技が始まるわ」

てくてくと歩いていく少女にアリスは心の中で大好きだった親友の姿を重ねた。

第4話 スタートライン30分前

はつきりと言って緋香里と同じ第9走者は緋香里以外一般人よりも少しだけ足が速いと言うだけの人間が多く緋香里とは2馬身以上ゴールするタイミングが遅かった。

「本当に骨がない」

緋香里はそう言うのと初等部1年1組の教室に入った。

「すごかったわねー、あれだけ突き放されればそりゃ途中から走る気、失せるわ」

野々夏はニコニコと言うと胸を張った。

「……………ねえ、その格好何？」

今野々夏の格好は胸に晒しを巻きミニスカートの下にスパッツと言う格好でその上からド派手な白虎の刺繍が入った長ランと言う如何にも古風な不良っぽいものだ。

「ん、応援合戦の衣装。言っとくけど晒しの下にはチューブトップタイプの水着着てるからね」

「だからってそれは無いわよ……」

「ま、最初は天音ちゃん案もあつたんだけどね」

「もつと危ないわよ!」

かるくFカップはあると緋香里は見ているのでもし、天音があんな衣装来た日には自分の女性としての尊厳が傷つけられることが目に見えていた。

「天音にそのこと言ったらばこられまして、夏目にも同様の反応取られたから自分出来る事にしたんだけど——似合う?」

「どうでもいい」

——それを自分が着ることにさえならなければ。

心の中でその言葉を付け加えると緋香里はスポーツドリンクに口を付ける。

「あ、でも緋香里ちゃんに着せるって話もあつたんだよ。隠れ巨

乳だし」

ブツと言う音と共に緋香里は盛大にスポーツドリンクを口から噴き出した。

「ゲホツゴホツ、いきなり何言いだすのよ」

むせる緋香里にユイは黙って顔を吹くためのタオルを差し出す。

「あ、ユイありがとう」

「気にするな、この馬鹿を止めるのに私がどれだけの苦労をしたか」

ブツブツと何やらつぶやくユイ、どうやらあの衣装を自分が着る案自分が知らぬ間にが没になったのはユイの目に見えない苦労があったらしい。

「チアリーダー案もあつたんだけど来夢と紫月が女そ———そげふっ」

紫月と来夢が投げた体育祭の栞が見事野々夏の頭にヒットした。

「ま、これは後のお楽しみと言う事で」

さすさすとぶつかった場所をさする野々夏、少し涙目だ。

「さて、ガンガン行っちゃいましょう！」

野々夏はそう言ってイスから立ち上がる。

これからあと30分もすれば応援合戦だ。

おそらく最終調整をしてその後第3グラウンドへ向かい応援合戦を始めるのかと緋香里は考え火照った体を冷ますためスポーツドリンクをがぶ飲みした。

「私はこれからやる棒倒しに参加してくるから出るがそのテレビで10チャンネルで第一、11で第2、12で第3グラウンドの競技が見えるようになってるから適当に見て体を休めてくれ」
そう言うユイも教室から出て行った。

第4話 スタートライン30分前（後書き）

まさかの2話連続投稿。次回はユイの競技の模様を送る予定です。
夏目も出るよ！

【んー、よくわからないわー】

【そうですか、それでは一番最初に紅組の演技ですどうぞっ！】
明るいノリの放送が終わると紅組の生徒と思わしき生徒がわらわらとアリのように動く様子をテレビ越しに緋香里は見る。

【ぬおおおおお】

と、一番先頭の生徒がいきなり服を脱ぎだした。

【見よ！この筋・肉・美！】

周りの生徒が一斉にその生徒を取り押さえる。

「うわあ」

天音が隣で何か言ったようだが緋香里はそれよりもあの生徒の方が気になった。

（たぶん、後でクラスメイトから変態って目で見られるんだろうなあ）

そんなことを呑気に見ながらいつの間にかお花畑に少々お待ちくださいと言うテロップに差し替わったテレビ画面を眺める。

数秒後。

【エホン、紅組の演技ですが諸事情により継続が困難になったので黄色組の演技をご覧ください】

放送部の少女の声と共にテレビのお花畑が再び第3グラウンドに変わる。

【行くぞー！】

【【【【オウ！】】】】

はつきりと言ってそれらすべてはかなり普通だった。

普通過ぎて無難過ぎて先の紅組の演技のせいで全く記憶に残らなかった。

「なんかすごい無難って感じにえ」

いつの間にか戻って来たのか夏目がそう言ってクーラーボックスの中からパウチパックに入ったゼリーの様な栄養補助食品を取り出して吸う。

（また嚙んでたわよ）

相変わらず噛み癖が抜けない夏目、緋香里は苦笑いしながら画面に目を戻す。

【これにて黄色組の演技は終了です！続いては現在トップ独走中の紅組の演技です！どうぞ】

そして後々学園内で伝説となる紅組の演技が始まる。

第5話 フェイト急上昇の要因（後書き）

祝通算70話！（間章は含まない）

さて、次回はどうなってしまうんでしょうw

第6話 ファイアーアンドサンダー

「行くわよ！」

野々夏が大声でそう言った瞬間あたりが炎の紅蓮に包まれた。

うねる炎の中で複数に男子が野々夏の体を担ぎ上げたり配置に着く。

おそらく外では炎の形が竜や鳥に見えて観客の度肝を抜いているはずだ。

（さすが戸一、熱くなくして他の物に引火しない炎が作れて凄いわ）

応援合戦では危害を与えない限りでの能力使用が認められている。それを応用しド派手な演出で観客の度肝を抜くと言うのが野々夏の考えた作戦だ。

「戸一、そろそろフェーズ2に入って。紫月と連絡を取れ次第開始」

【わかった】

無線で連絡を取ると野々夏は前を見据える。
バチバチと音を立て炎の表面を雷が走った。
炎が破裂する。

#

「あの、理事長。アレ大丈夫なんですか？」

「ん、大丈夫大丈夫。あれは錯乱用に炎使いが使う熱くない炎よ。使用者の指示ひとつで簡単に消えるしそもそも多少視界が奪われるだけで火傷しないし」

「そうですかー」

呑気に会話する放送部員と理事長、アリスは綾奈を殴り飛ばした

くなくなった。

——なんかすごく腹が立つわ。

そんな事とは関係なしに白組の応援合戦は続いていく。

#

「やーすごかったわよ野々夏！」

感嘆符付きで夏目は言つとやや汗のにおいのする野々夏に抱き着いた。

「え、ちょ苦しい」

その腕はがっちりと野々夏の首をホールドしている。

「あ、ごめんなさい」

夏目は野々夏から離れた。

「あんなにド派手なの私じゃ思いつきませんよ」

そう言つて天音は柔和に微笑んだ。

これから天音は綱引きに参加する。

綱引きには組の中でも体重があつたり力の強い生徒が多く参加するのでガチガチに鍛えている天音が出るにはぴったりの競技だ。

「それでは私、行つてきます」

天音は教室を出て行つた。

「さて、これから2日目の作戦会議始めるわよ」

ここには応援団長の野々夏と参謀役の来夢、実質的な指揮官のユイがいる事からここでの会議は決定事項に等しい。

「まず、一番最初にぶつ潰すべきなのは紅組ね。頭じゃなくて高等部以上を中心に叩いて初等部と中等部はまるん率いる遊撃隊に潰させるわ。遊撃隊には初等部中等部潰しのほかには敵の攪乱をしてもらつて本部の指示とは関係なく動いてもらう。緋香里」

いきなり緋香里は名前を呼ばれ野々夏の方を見た。

「あなたにはうーん何て呼んだらいいかしらね。暗殺部隊？と大
学生部隊の情報系統を任せたわ。知ってるわよあんたが株取引とか
先物市場とかで大暴れしてるの。その上学校のメインパソコンをハ
ッキングして例のあの人の個人情報引っ張り出したんでしょ？だか
ら情報戦は得意よねっ」

ばれていた——その事実には緋香里の心は折れそうになる。

たしかに株取引や先物取引をやって儲けていたのは本当だが何処
からどうやってばれたのか、それがはっきりと言って不明だ。

「お前、何気に凄いな」

来夢から褒められたがそんなことどうでもいい。緋香里は只々シ
ョックだった。

「さて、ここからが本番。メインの大規模演習よ。みんな気を抜
くんじゃないわよ！」

野々夏が気合を入れるように大声で言った。

緋香里以外のこの部屋にいる全員が頷きを返した。

第6話 ファイアーアンドサンダー（後書き）

ざっと十二日ぶりの更新です。

いろいろあったのさ。

これから更新ペースが私情により遅くなります。ご注意くださいませ。

第7話 満月の下、花を抱いて

体育祭初日の夜は満月だった。

緋香里は目が冴えて眠れずぶらぶらと校内をうろついていた。

月光は冷たく冴え、辺りを銀色に照らしている。2時を回った今では時折、見回りをしている先生と顔を合わせるくらいでそれ以外に人影はない。

緋香里はそんな中を一人歩き、学園内にある森の中へ伸びる道を見つけ何気なくそちらの方へ歩き出した。

シン、とした中を一人歩くと心が落ち着く。

「はあ」

溜息を洩らし、歩を早める。

静寂が耳に痛い。苦しい。

しばらく歩くと広場のような場所に出た。真ん中に小さなベンチがある。

緋香里はそこに腰掛けると目を閉じて呼ぶ。

「御出で鳳仙花^{ほうせんか}」

赤い蛍の様な光が現れ長い錫杖の形を取った。

緋香里はそれを無言で抱く。

どんな能力を持っているかはなんとなくわかっている。

組み手で空いた大穴、あの時なんとつぶやいたか覚えている。

「『私に触らないで』か」

自分の武器と同名の花の花言葉。それを無意識下で選び自分は囁いた。

それだけで攻撃が跳ね返った。

『私に触らないで』つまり拒絶。それが緋香里の能力だ。

自分に害なす物を拒絶する。使いようによっては敵をそのまま吹っ飛ばすことが出来る能力。

なぜ自分がそんな能力か、それはわかりきっている。

自分が他人を拒絶したからだ。何度も、自分がぼろぼろになって一度壊れてしまうまで。

（怖い、怖い、怖い、怖い、怖い）

今も強がる裏では人と接する事を恐れる自分がいる事に緋香里は気が付いている。

だから、いきなりの重圧に潰れそうになり、怯えていた。

「おい、大丈夫か？」

いきなり、そんな声が聞こえ緋香里は恐る恐る声の方見た。

「顔色悪いぞ」

そこには心配そうな顔をした来夢がいた。

「ど・・・して？」

「どうしても何も夜中の2時過ぎても帰ってこないから探すの手伝えって朝屋が言ったからお前が来そうな所見て回ったら案の定いた」

そう言うとき来夢は緋香里の前にしゃがむ。

「怖がるな」

来夢はそう言うとき緋香里の目を見つめた。

「お前が何で人と関わることが怖いのはわかっている。一人で抱え込みすぎるな、潰れるぞ」

「わかってるわ、そんな事」

しばらくの沈黙の後緋香里は気が付くとそう言っていた。

「でも、私を支えてくれる人はいない。私に追いついてくれる人はいない。私は人を拒絶する事しか出来ないから。人を傷つけて、絶望させてそれしかできない人間だからッ」

なぜ、ここまで話してしまったのかわからない。似ているからと言う理由が頭を過ったがそれは違くと頭の中で否定した。

「だから、だから一人で抱え込むしかないのよ。あなたになんか私の気持ちかわかる訳ないッ」

本当は苦しくてたまらない。けれども緋香里の傍には自分を支えてくれる人間はいなかった。

「知ったような口聞かないで、あなたに私の事は絶対分かんないわよ」

ぽたぽたと生暖かい雫が頬を滑り落ちる。

「もう、ほつといて、一人にしてよ」

涙を流しながらそう訴える緋香里。来夢にはひどく孤独に思えた。一人になりすぎ、人と触れ合う事に怯え、その事が原因で傷つき弱りさらに人を遠ざける。その繰り返しで緋香里はどんどん孤独になり苦しみ、もがいているのだ。

孤独で、震えていて、強がってばかりのその姿に来夢はずっと昔の事を思い出した。

母親が亡くなってすぐの事、来夢もあんな風に人を拒絶した事があった。

その事が原因でとても大切な人を亡くし、結果として今の能力と全身に今も残る傷跡が残され人を拒絶するのもやり過ぎはいけないと言う事を学んだ。

だから、それを今度は来夢が緋香里に伝える番だ。

今はもういない風の様な自由な少女の代わりに。

「そんな風にしてると本当に大切な物を失くすぞ。失くしてまた人を拒絶して最後は命以外何も残らなくなる。お前は一人で頑張り過ぎなんだよ。頑張つて、頑張つて勝手に自爆してんじゃねえ！お前は本当にそれでいいのかよ、本当にこのまま自分がぼろぼろになつてみんな失つて行つていいのかよ！」

その言葉に緋香里は声を詰まらせた。

「もう、もう何も失いたくないわよッ。けど、けどッ――」

「けどけど言つて自分から壁作つてんじゃねえ！だからみんな失うんだよ。大事なもので拒絶するな！」

そう言つと来夢は緋香里の事を抱きしめた。

「俺の体温感じるか？声、聞こえるか？気持ちにはわからなくても、分かり合えなくても近くにいて支えてやることは出来る。何にもわかつてくれないからと言う理由で勝手に人を拒絶するな！それで自

分を傷つけてもがき苦しんでんじゃねえか、だから一人で苦しんでんじゃねえ」

その温度に緋香里は涙があふれてくるのを感じた。

「ほらほら泣くんじやない」

トントンと来夢が背中を叩いてきた。

手の温度が心に染みだ。

「俺が出来る限り支えてやるから」

その言葉に緋香里は固まる。

「ん、どうした？」

固まつた緋香里に來夢は声を掛ける。

「……今さらっつぽいと言われた気がするんだけど」

「……そんなこと——言っただな」

その事実には、香里は顔を真っ赤にする。

「え、ちよまつ」

「ははっ、言っとくけど嘘じゃねえからな。お前の事好きなの」

そう言って来夢は緋香里の頭をぐしぐしと撫でまわす。

「最初見たときは単にきれいだなーって思ったけど気が付いたら

目で追ってそれで気が付いた時には好きになってた」

その顔をじつと緋香里は見据える。

「バカみたい」

「バカで構わないさ」

そう言つて来夢は緋香里の事を抱きしめる。

緋香里は抵抗しなかった。

第7話 満月の下、花を抱いて（後書き）

おかしいな、緋香里は来夢とカップルにする予定はなかったのに。まあいい、これで間違った部分を無理矢理無かった事に出来るし。

第8話 夜の少女

来夢が緋香里に告白しているころ、ユイは緋香里がいるのとは別方向の森の中にいた。

（静か、だな）

ユイはそう言って空を見上げた。

「来い喰滅^{クメツ}」

ユイは躊躇いなく手首の動脈を深く切る。

血がドボドボと地面に滴り落ちた。

そこから流麗な金色の剣が現れる。

ユイはそつとその剣に手を触れ、引き抜く。

（まだ私はこの剣を使いこなせていない）

この剣は感情を喰らう、憎しみや悲しみを喰えば醜い姿に喜びや愛情を喰えば美しい姿になる。

ユイはまだこの剣の憎しみの面しか見ていない。

（私はまたあの日と同じ間違いを繰り返したくない。だから――

あの雪の日の出来事が頭の中身浮かびユイは頭を押さえた。

――だから望んだんだ。力を）

あの日ユイはなにも出来ず地べたを這いつくばり血に塗れながら泣いた。

白い雪が足元で自分の血に染まり、体温を奪って行く感覚。

そして自分に実質的な力が無い事を悟った時の絶望。

無力を嘆き、全てを捨てて願ったのだ。

こんな体ボロボロになっても構わないから戦うための力が欲しいと、自分の思う正義を貫くための力が欲しいと。

だからユイの能力は治癒系能力の変化型である血液操作。文字通り自らの身を削る力だ。

能力を手に入れてからユイは全てを捨てて強さを求め、学生とし

ては最も強い部位にあたる少年兵とも呼べる学生小隊に入隊した。けれどユイは気が付いていた。

結局何も変わっていないと。

「ここまでにするか」

ユイはそう思うと剣から手を放す。

剣はあっという間に真つ赤な血に戻るとズルズルとユイの傷口へと入っていく。

何か別の生き物に犯されているようにユイは感じるのだがこうしないと自分が失血死しかねない上、ここを通りかかった人の心臓に良くない。

ちなみに雑菌、ゴミなどは一切侵入はしてこないらしく感染症に感染したことは一度もない。

血が一滴残らず体内に還るのを見てからユイは手首をさする。

そこには赤い線のように傷口が見えるだけだ。

「本当に化け物だな」

血が体に戻るのを見るたびユイは本で読んだ吸血鬼の話思い出す。

不死の夜にしか生きられない血を吸う化け物。

絶対的な回復力を持つと言うその化け物は大概の場合銀の髪に赤の瞳をしているらしい。

ユイはアルビノであるため夜以外は肌にたつぷりと日焼け止めを塗らないと肌が火傷したようになるため第5小隊の訓練は大概夜が明ける前か日が沈んだ後だ。室の窓には紫外線防止のシートが張られ常に席は廊下側、ラクロス部のユニホームも露度をかなり抑えている。

光を避けるように。

光を浴びすぎたら死んでしまうと言わんばかりに。

「さて、寮の部屋に戻るか」

ユイはゆっくりと歩き出す。

10分ほどかけて森の中を散歩しながら戻る事になるとユイは森

の中を歩く。

だが――

「・・・」

見ていけないものを見た気がして木陰に隠れた。

そこにはベンチに座りながら真つ赤な顔で俯く緋香里とその隣で話しかけている来夢の姿があつた。

（何やってるんだ？）

そんなことを思いながらユイは気づかれないようそつと木の影を歩いた。

それからしばらく歩き、開けたところでユイは足を止める。

「静か・・・」

ユイは月を見上げた。

冷たい銀の光が照らす髪はより一層透き通つて見える。

化け物の様な自分も月光の下なら少しは綺麗に見えるだろうかと思いつながらユイは息を吐く。

「早い所戻ろう」

ユイはゆつくりと歩き始めた。

自分が自由になれるときは少なく、一生胸の奥にある傷跡は消えそうにない。

それでもユイは歩いていく。

自分の願いを抱いて。

第9話 電腦

翌朝、体のだるさと帰ってから作った頒布用の資料による睡眠不足でくらくらする中、緋香里はトーストをココアで流し込んだ。

「うー」

「なーに陰気くさい顔してんのよ」

「昨日、学校のパソコンにハッキングしてたら追跡凄くてブラジルあたりでやつと振り切ったと思ったらもう4時過ぎだったから全然寝れてない・・・」

「ねえ、何で敷地内でそんな壮絶な電腦戦を繰り広げてるの？なんか別の世界の事のように聞こえるんだけど。それ以前に何でそんなにクラッカーの腕前が凄いのよ・・・」

「色々ね、昔はやんちゃしてたわ――」

「何、遠い昔の事にして記憶を美化しようとしてるのよ。てか、やんちゃって何？なんか物凄くヤバい事に首突っ込んでますってさらつとカミングアウトしなかった!？」

緋香里はその言葉に意味深な笑みを漏らすとココアを啜る。

「少し、某国のサーバーを覗いて不正の証拠をIPアドレス偽装した上ネットカフェから公開してやったくらいよ」

「ねえ、それ少してレベルじゃない気がするんだけど。一国の政治揺るがしてる気がするんだけど」

そんな野々夏の必死のツツコミもどこ吹く風で緋香里は朝食をすべて食べた。

「ねえ、大学生に資料頒布したいんだけど」

「ああ、それなら初等部校舎の職員室のプリンター借りてやったら？紙もインクもタダで使わせてもらえるし」

野々夏は諦め半分でそう言うところとコーヒーを飲む。

「なら、今から印刷しに行ってくる」

「いつてらっしゃーい」

緋香里がいなくなつてしばらくして、ユイが下に降りてきた。

「ん、ユイおはよー、昨日また一人で練習してたみたいね。血の臭いしてたし」

無言でユイは椅子に座り、入れ替わりで野々夏は立ちユイの分の朝食の用意を始める。

「なあ、昨日と言うよりも今朝と言つた方がいいのか？隣の部屋から凄い勢いでパソコンのキーボードを叩く音が聞こえたんだが」

「・・・。ほつときましよう、私達にはまだ知らないことがたくさんあるのよ」

「さつぱり意味が解らん」

ユイがそう言つて席から立ちキッチンに入るといい香りのするアップルティーを淹れた。

「さ、ユイも早い所朝ご飯食べて。体育祭二日目、張り切つていきましよう」

「そうだな」

野々夏は手早くソーシたにんじんとソーセージを皿に盛り付けると一緒にキュウリやブチトマト、レタスを盛り付けこんがりときつね色のトーストとバターと一緒にテーブルへ持つていく。

「いただきます」

礼儀正しくユイは言つとフォークを使って人参をポリポリとかじる。

（あはっ、ホントに兎みたい♪）

白く長い髪を腰まで伸ばし、光の加減で赤く見える紫の瞳もアルビノの特徴だが野々夏にはユイが兎っぽく見える要因の一つとして受け取れない。

「なんだ、そんなに見つめてきて、恥ずかしい」

ユイは非難するように言つとバターをたっぷり塗つたトーストにかぶりつく。

その動きさえもどこか小動物じみていた。

『さて、体育祭二日目。ついに本番が来ましたねー』

『ええ、紅組白組黄色組。みんな用意が整ったみたいね』

『それでは理事長、開始の合図お願いします』

理事長が空に向けて鉄砲を向けるのを緋香里はテレビの画面越しに見ていた。

緋香里がいるのは1年3組の教室、今そこはカーテンを閉め切れケーブルとモニター、そして数台のパソコンが円形に配置されていた。

「作戦ね。こっちは自由にさせてもらうわ」

『ん、りょーかいりょーかい。序盤は好きに暴れさせちゃって、中盤辺りからはこっちに指示を聞きつつ行動してもらうけど』

通信で入ってくる野々夏の声聞きながら緋香里は息を吐く。

モニターには昨日の夜、ぶらぶらしながら仕掛けた何百台ものカメラ（放送部が一枚噛んでいる）映像が生で送られてきている。

（それにしても放送部だけ体育祭に選手として参加しないとわね）
そのおかげで今、情報網を敷けたことを感謝しつつ緋香里はパソコンのキーボードの感度を確かめる。

『5、4、3、2、1』

バン、と言う音が聞こえ緋香里は指示を飛ばす。

「A-36エリア、第一部隊行けっ」

疑似戦闘が始まる。

第10話 神速

大規模演習開始から2時間、白組の大学生は驚くほどの快進撃を遂げていた。

「第一から第四、全員いったん退避！それを埋める形で第六と第九は前に出てっ、深追いは禁止だから」

緋香里は素早く指示を飛ばすと通信系統のチャンネルを分化させたりつなげたりを繰り返す。

「うわあ、まじかよ」

その予想外の活躍に来夢は息を飲む。

通信を任せたところにきて緋香里のチート性能が明らかになった。それはパソコンの扱いが凄いと言う事だ。

もう、何度キーボードを叩いているのか来夢には分からない。指が別の生き物のように動きキーボードを叩くたび通信のチャンネルが目まぐるしく変わる。

それだけでもすごいのに緋香里はモニターをチラチラと見つっ状況を脳内で組み立て神速で指示に変え、周りの被害を少なくするよううに気を付けつつ相手を叩き潰していた。

「よし、ハッキング成功」

「え、今お前なんて言った!？」

「え、ハッキングに成功したって言ったけど——あ、第十少し下がって退路開けて!」

緋香里の怒涛の指示に一糸乱れぬ動きで対応する大学生を見つつか来夢は溜息を吐いた。

「さて、これから見せ所になるかしら」

緋香里はエンターキーを押す。

「さて、私特製のウイルスよ。これ喰らってしばらく大人しくしてなさい」

(うわ、こええ)

緋香里が組んだウイルスプログラムはしばらくの間相手のパソコンの動作を妨害すると言うものだ。

しばらくすれば勝手に自壊するがそれまでは相手の指示系統が確実にボロボロになる。

そしてその隙に悠々と敵に攻め込み勝利をもぎ取る。

「さて、死んでもらいますか」

緋香里はそう言う悪魔のプログラムを起動させた。

#

——さて、指示によると今ここでは演習とやらが行われているようですがそれを潰すと同時にこの間私^{わたくし}たちを虚^{こへ}仮^けにしてくれた人間を全員殺せとの事です」

「ふーん、殺し合いか。嫌いじゃない」

そう言う男と少女はビルの上から星羽学園を見下ろした。

「僕も、あいつだけは倒さないね」

「そうですか、スルベとスルガは置いてきましたから二人を除いた全員そして、あのお方の直属の人。これだけの戦力があれば充分です。今度こそこの町を落とさないとあのお方がどんなに私に対して絶望する事か——この町は意地で落とします。皆さん手を抜かないようにお願いします」

そう言う少女はゴシッククロリータの裾を翻し同士の方を見た。

「それでは皆さん、あのお方の為に死ぬ覚悟は出来ていますか」

その言葉に瘦せた男以外が頷く。

彼は傭兵だ。世界を渡り歩きながらある人物を探しているらしいが少女の知った事ではない。

「それでは、参りましょう。あのお方との未来の為に」

第11話 クラッキング o p . i 対応速度

——「っ、今の何？」

その気配に一番最初に気が付いたのは緋香里だった。

そして、それからやや遅れて理事長、赤原綾奈がそれに気が付いた。

「なんで、こんなタイミングで」

そう小さくつぶやくと綾奈は放送部員に指示を出した。

「全校放送の用意！気が付いてる人間は気が付いてると思うけど外で大変な事が起きてるの」

その言葉に放送部員は素早くそれに頷くとマイクを手渡した。

「全校生徒に次ぐ、これは緊急であり至急速やかに従うべき指示である。戦闘配員以外は全員手身近な教員の指示により大講堂地下の避難所へ避難せよ。戦闘配員は全員武器庫より武器を取り出し戦闘配置に付け。外敵が侵入した。もう一度言う、これは緊急であり至急速やかに従うべき指示である。戦闘配員以外は全員手身近な教員の指示により大講堂地下の避難所へ避難せよ。戦闘配員は全員武器庫より武器を取り出し戦闘配置に付け。外敵が侵入した。行動をそれぞれ開始せよ！」

#

——「それぞれの行動を開始せよ！」

その一言に野々夏は身の震えを感じた。

恐怖から来た物ではない。嫌と言うほど自分が興奮しているのがわかる。

「野々夏、僕らも行動を開始しないと」

戸一がそつと耳の戸で囁く。

「ええ、そうね。一度戻らないと、来夢、聞こえるかしら」

『ああ、聞こえてる』

無線独特のノイズ越しに来夢の声が聞こえた。

「緋香里ちゃんは一応立場的に第5小隊の人間だから戦闘配員扱いになつてはるはずよ、あの子にはここから指示を取ってもらふ。それなりの情報網もあるし、来夢あんたもついていてくれるからこつちとしても行動しやすいから。その事を冷静に説明してくれない？大丈夫、いざと言う時の責任は最早のお母さんが取ってくれるみたいだし、何よりたぶんユイは何らかのアクションを紫月と一緒に起こしていると思うからこつちも急いで行動した方がいい空気になつてるし」

『ああ、それはわかつてるよ・・・言にくい事なんだがこの通信すでに緋香里に傍受されてるぞ』

「・・・はい？」

来夢の一言に野々夏は固まる。

『その程度で野々夏は私の事騙せると思ったの？言っておくけどさつきまで紅組白組黄色組、全部の通信聞き流しつつ情報取捨選択して指示だしてただけ』

緋香里の声に野々夏は深い溜息をつく。

「ほんと聖徳太子か何かの生まれ変わりなんじゃないの？そんな特殊能力、普通の女子高生が持つていい物じゃない気がするんだけど・・・まあ良いわ状況はわかったわねあなたはそこで指示を出していればいい。私たちはそれに沿って行動するから」

野々夏は頭を抱えた。

『こつちからもさらに言にくい事があるんだけど・・・』

「え、なに？」

どうやら緋香里からも言にくい事があるらしい。それも通信の傍受を超えるかなりの爆弾のようだ。

『さつき連絡が入って通信系統と全体の指示任された・・・』

もうどうにでもなりなさいよ、野々夏は心の中でそう言う戸一の方を見た。

「綾奈さんならやりかねないから……。と言っより喜び勇んでやりそうんだけど」

戸一が半ば諦めたような表情で言っのを見て野々夏は半ばヤケクソになった。

「ああもう好きにしなさい！ 緋香里、あんたはそこで大人しく指示でもしてなさい！ 外の雑魚は私達で片すから！」

野々夏はそこで立ち上がった。

「さ、行くわよ戸一！ こうなったら徹底的に叩きのめしてやるんだから！」

その目は苛立ちを含んでいた。

#

「こ、怖いです」

そう言って詩麻は空を見上げた。

詩麻の手にはフルートが握られている。これが詩麻の武器だ。

音色を鳴らし、周りの草花を操ると言っ能力だ。範囲は現在最強の最早に劣るが精度はかなり高い。

「私もたたかわなくちゃいけないんですね」

詩麻はそっとフルートに唇を付ける。

音色が流れだす。

#

「白苺！」

「ええ、わかってるわよ。ばっちり」

白苺はそう言っと手を虚空へ突き出した。

「首狩り大鎌」
ギロティン

スウと空気の中から滲む様にして現れた玉鋼で出来た凶器を白苺は担ぐ。

「さて、まずは私の研究所へ向かうわよ。あそこなら必要な物資はあるしね」

「だな」

そうしてそれぞれは動き出した。それぞれの目的を胸に。

第11話 クラッキング o p i 対応速度（後書き）

さて、これからが第一部の本番です。

いろいろな主要キーワードが出てきます。第一部で明かされる謎があれば最終部まで明かされない謎もありますがまったく付き合ってくださいまし。

第12話 クラッキング op・2 交戦状態

一番最初に第5小隊の武器庫へたどり着いたのはユイだった。

素早く掌紋をスキャンさせドアのロックを外すとずかずかと武器庫の中の自分の剣を手取る。

ユイの剣は状況に合わせ大きさや重量、諸刃の物や片刃の物が用意されている。これをユイは状況に合わせて選び戦闘へと赴く。

「よし、これだな」

ユイが選んだのは諸刃の両手剣だ。長さは長身のユイの胸くらいまでで一メートルはある。この間振り回していた剣は4メートル近くあったがそれに比べたらまだ小さい方だ。

「あ、ユイ。先に来てたんだ」

ふと野々夏の声が聞こえユイはそちらの方を見た。この間と同じ黒いコートを着ている野々夏と戸一の姿があった。

「今、着替えてこつち来たところなんだけど——紫月は？」

一番近くにいるはずの紫月が一番最初に来ていない事を野々夏が告げるとユイは少し考え込む。

「何かあった、そうとしか考えられないな」

「やつぱりそうよね。そう言えばユイ、通信ちゃんと入れてる？」

「あ、戦闘配置に付けと言われた時点で切った」

「あんたね、ちゃんと入れときなさいよ。緋香里が無線で指示やつてる——と言うより赤原家マミーに押し付けられてやつてるから」

「む、わかった」

ユイは無線の電源を入れた。すると——

『ほら、第4サボるなあ！第1小隊は総員南門付近で敵を撃退しなさい。第3小隊は第7小隊と連携取りつつ既に侵入した敵を遊撃する事！』

緋香里の激しい怒鳴り声がユイの耳を刺激する。

「・・・」

「まあ、そう言う事」

ユイのポカンとした顔に野々夏はそれだけ言う銃器を慣れた手つきで準備し、戸一は無言で大太刀を腰に提げた。

「もしもし、緋香里。聞こえてるかしら」

『もちろん聞こえてるわよ、ふう昨日学校のパソコンハッキングして戦闘配員のデータパクつといて正解だったわ』

「今さらつと怖いこと言ったよね。これ突っ込んでもいいよね。

まあ、それは置いて紫月から通信無かった？」

『無かった、けど――』

「けど？」

『間違はなく、今紫月は戦闘に入ってる。たぶん敵の幹部級とみていい相手とね』

その言葉に野々夏の背中には冷や汗が流れる。

野々夏はある程度ならどこで誰が戦っているかすぐにわかるがこれだけの乱戦状態ではほとんど判定出来ない。だが、緋香里はそれを判定している。野々夏以上の精度で。

「わかるの？」

『ええ、たぶんだけど攻めてきているのはこの間と同じ奴らよ。

違う気配とかがいっぱい入ってきてるけどこの間とおんなじ気配の人間が何人もいる。さっき映像で見たんだけど太郎君が戦った相手がいたから間違いないと思う』

その一言に野々夏は戦慄を覚えた。野々夏でもやつと気配を感知できる程度の幻で身を隠していた太郎の相手を緋香里は完全に視認していた。明らかにその能力は素人のレベルを超えている。

（緋香里ちゃん的能力と関係あるとみて間違いないのかしら？けど緋香里ちゃん的能力っていったい何？この間の作戦の事もよく聞かされてないし、どうして一般人も同然の人間にこだわるの？とりあえずわかっているのはこの土地とあの日に関係があるってことだけだけ。でもどうして？）

野々夏の脳は瞬時に緋香里に関して気になっていることをはじき出すが、野々夏はそれを振り払い、喋る。

「そう、私たちはどうすればいい？」

『出来る限り、別行動でいいから敵の排除をお願い』

「わかった」

野々夏は全ての謎を追いやり頭を戦闘状態に戻す。

体が戦いの興奮に震え、自然と筋肉に力が入る。

「さて、第5小隊。行くわよ！」

その言葉にユイと戸一は頷き緋香里は通信を操作し第5小隊専用のチャンネルを作った。

小さな、子供たちによる理不尽な世界への戦いが始まる。

#

「ふふん、少年よ。お前の様な戦い方をする人間を僕は初めて見る。驚嘆に値する」

そう言っそて目の前の初老の男が髪をかき上げるのを見て紫月は双

槍そう——レイライ黎雷を構える。

「ああ、そうかい」

「雷と双槍、両方とも厄介ではあるが私の敵ではない」

そう言っそと男はにやりと笑った。

第13話 クラッキング op3・遭遇戦闘

ブロロロと言う音が戦闘中の星羽学園に響く。

「失せる！」

その声の主はユイだ。その姿は漆黒のバイクの上、彼女は道路交通法を無視したノーヘルメットでガンガン敵をバイクで轢いている。
「マジかよ」

その姿を見て男子生徒がそうつぶやいたがユイの耳には入らない。ユイは急いでいた。だから今、目の前にいる敵は単なる邪魔な物としか受け取らず強引にバイクで轢き自分が通る道から退かす。それだけだ。

と、そこに一人の大男がそんな彼女を止めようと道に出る。

「邪魔を――」

ユイは片手でバイクを御しつつ、剣へ手を伸ばす。

――するなあ！――

バイクを男が捕えたその時、ユイは剣を一気に引き抜き居合の要領で敵を切り裂いた。いやな水音共に男が倒れるがユイは気にせずそのまま轢いていく。

剣も体も服も敵の血の赤に染まっているがユイは一切気にしない、気にする必要はなかった。

ここは戦場、敵の血に染まる事は誇りであり、自らの血に染まる事は屈辱にしかない。

ユイはバイクを走らせる。与えられた指示のままに。

#

「うおおおおお！」

最早は馬鹿でかいハンマーを振り回し敵を一気に跳ね飛ばす。そこへすかさず白莓は劇薬を投げ込み次々と戦闘不能にさせていく。

このコンビネーションですでに10人近い敵を打ちのめした。

「最早！」

白莓は大声で最早の名前を呼ぶと最早は白莓の目の目にいる敵に向かつて雷の塊をぶつける。

「えげつないわ」

「しかたねえだろ、戦争なんだし」

最早如何にも仕方なさそうに言う。とハンマーを振り回す。

「情けはかける必要はねえし、全力でかからないとこっちが死ぬ。だから俺は絶対手を抜かねえよ、それが相手に対する必要最低限のマナーだし、自分の命を守るのにも必要な鉄則だからな」

最早は戦闘では決してどんな雑魚相手にも手を抜かない。それが礼儀で自分なりのルールだと定義し、常に全力で敵と戦う。はつきりと言つて白莓はそのひどくまっすぐな戦い方に賛同は出来ても真似は出来ない。白莓は自分がずるく、弱い人間だからだ。それに比べたら最早は謙遜しているものの強く、まっすぐで優しい人間だ。本当ならば白莓の様な人間とは出会わない種別の人間だ。だから白莓は決めていた。せめて最早だけは自分の元で悪意から守ろうと。

「そんなことはどうでもいい、早いところ片を付けましょう」

「だな」

白莓の問いに最早は素直に答えると前を見る。

その横顔がひどく眩しくて白莓は目を伏せた。

#

ユイは適当なところでバイクを乗り捨てると森の中に入る。

この先から気配がしていた。ずっと、この戦闘が始まってすぐから。

別行動でいいから敵の排除を優先しろと緋香里は言った。だがユイはそこに向かわなければ行けない気がした。

（私は何やってるんだ）

ユイはそう思うと溜息を吐き森の中、そこにいる人物の元へ急ぐ。

「あれ、来たのは女の子か」

そこにいたのはこの間戸一と剣を交えた痩せた男だった。

「まあ、剣士ならいいか」

男はそう言っではしばみ色の目をユイに向ける。

「さて、お兄さんと手合せ願おうか」

第14話 クラッキング op4・少年少女

第一体育館、その前に敵が十数名いた。

「ここを潰すぞ」

そう言つてリーダー格の男は不用心にもドアに近付く。

「あなた達程度に潰されるほど甘くはありませんよ」

ドアの向こうからそんな声が聞こえ、男が何事かと首をひねったその時。

——バゴオツ。

ドアが吹っ飛んだ。

「ふふ、何をぼんやりしているのですか？」

ドアが吹っ飛んだ時に起きた土煙の向こう、そこに誰かがいた。

状況から考えてドアを吹っ飛ばした本人としか男には思えなかった。

「確かに年を取りました、それでも強さには変わりないと思うんだけどねえ」

そして、晴れた土煙の向こう。そこにいたのは、年を取ったお婆さんと呼んでも差し支えない見た目の女性だった。

「さて、全力でこちらから潰しますか」

そう穏やかな笑顔で言う女性、その手には身の丈とたいして変わらない長さの刀身の大剣が握られていた。

「失せなさい」

あくまで穏やかな声と共に剣が振られ、敵は全員一瞬で地に伏せる事となった。

「ぐあ」

そして女性はそのまま、一番近くにいた男性の股間を鉄入りの見た目は可愛らしいブーツで蹴り上げる。

「その程度で私に勝てると思いますか？」

男の事を完全に無視し、女性と言う。

「私は早い所、孫と弟子の元へ行かなくてはいけないので全力でお相手しますよ」

そう言つて女性——
胡桃くるみ 葵音はつねは微笑んだ。

#

『どうして、そこまで強さにこだわるの？あなたは充分強いじゃない』

ユイは戦いながら昔の事を思い出していた。

『あなたは私とは違つ答えを出せばいい、あなたなりの強さを見極めて行けばいいのよ』

そう言つて頭の上に置かれたその手のぬくもりが妙にあたたくて戸惑つたあの日、そしてあの人が籠の鳥だと知つた日。ユイはいつも無力だった。

「どうした！」

剣を交えている男が大声で叫ぶ。

『どうして、どうしてお前たちはそれだけでこういうことが出来るんだよ』

その声を忘れた事はない、ユイはその言葉を言ってくれた人の事を忘れない。

だから剣にすべてを乗せて戦う。

「うおおおおお」

ユイは一気に間合いを詰め、剣を振りかぶる。

ためらいなどすでに捨てた。自分の追い求める強さだけが必要としてそれだけを追い求めた。

それが和音ユイと言う一人の人間に求められる唯一だと言わんばかりに。

「失せろ！」

ユイは剣を振り下ろした。

神速で迫る槍を大男は避けるとに見た目からは予想できない非常に滑らかな動きで紫月に向けて拳を向ける。だが紫月はそれを半ば間で避けカウンターを決めようと槍を払う。

「少年、なかなか良い動きをしているな」

「ああ、そうですか！」

大男は紫月の攻撃をひよいと避け距離を取る。

「さて、少年に敬意を表してこちらにも全力で相手せねばな」

大男は深呼吸を一つすると再び紫月に向けて拳を放つ。

「それはそれは、俺としてはさっきのを本気だと思ったとこだけだな！」

紫月のそんな声を無視つつ大男は拳を繰り出す。

（ふうん、戦闘スタイルは天音とほぼ同じ。天音と違うのは足技を入れてこないところか。速度はやや天音より遅いけどたぶん体重がパツと見１．５倍くらいあるから威力は上だと見ていいな）

戦いながら紫月は冷静に敵の戦力を判断する。

（見た目以上に動きは早いし、体も柔軟。けど、やれないわけじゃない！）

「届けっ！」

紫月は全身を使いしなやかな動きで一撃を繰り出す。

その必殺の威力を孕んだ一撃を大男は——素手で受け止めた。

「嘘だ！」

思わず口にする紫月。大男はにやりと笑う。

「その程度で儂を倒そうなど１００年早い！」

だが何度も戦闘を経験した紫月がタダで引き下がる訳は無く、紫月はチアリーディングのバトンの要領で槍を回し遠心力で大男の手から槍を放させる。

「ほう、その手があったか。すぐ手を放してなかったら手が切り

裂かれたうえで顔にまで怪我をすゐるとろだったわい」

大男はガハハと豪快に笑い構えを取った。

「さて、まだ少年は行けそうだな。ここで老人より一つ良い物を見せて経験をさせてやろう」

その言葉に紫月は緊張を高める。

「儂のとおっておきの一撃を喰らうがよい！」

第14話 クラッキング o p 4 . 少年少女（後書き）

ユイ視点楽しいんだけど書きにくい。紫月視点はなんか普通。
緋香里をハブった？そんな事にしない。

第15話 クラッキング o p 5 ・ 白魔咆哮

緋香里は薄暗い部屋で指示を出しつつ敵の出方をうかがっていた。
（何を狙っているの？何が目的なの？）

緋香里がどれだけ考えても解決の糸口は見つからない。

（この学園を潰すには動きの詰めが甘い、それに動きに統一性が見られない。明らかに何かがおかしい）

緋香里は思わず親指の爪を噛む。音菜からはいつもはしたないからやめなさいと言われていたのにやってしまった事に苦笑を漏らしつつ緋香里は指示を飛ばす。

本格的に敵の幹部級とぶつかり始めたユイと紫月、そして今もなお敵を次々と屠っていく生徒たち。緋香里の方には無数の命がかかっている。

（躊躇いは捨てろ、敵の命は命と思わない。全てを斬り捨て最小の犠牲で最高の勝利をもぎ取る。私はそれをしなくちゃいけない、うつん絶対にしてみせる！）

緋香里は覚悟を決め、心を戦場へと戻した。

#

ズブリ、いやな水音が自分の肩口から聞こえユイは地面に膝を折った。

肩と腕はかろうじてつながっている。どうやら骨に到達した時点で相手の瘦せた男は剣を止めたらしい。

それよりも、ユイには聞きたいことがあった。

「今の一撃、今の一撃で間違いなく貴様は私の事を殺せたはずだ。何故、殺さない」

失血で目の前が霞む。ユイはそれでも目の前の男をにらんだ。

「面倒臭エから、と言っても納得してもらえないか」

言葉の途中でユイの目に宿る怒気が強くなつたのを感じ男は慌て言いつくろつ。

「似てんだよ、お前の顔が。ずっと、もう何年何十年傭兵として世界をさまよい歩きながら探している人間に殺された俺が大好きだった女に」

男は遠い目をして語り始めた。

「だから、俺はお前を殺さない。剣士としてどれだけお前に恥をかかせることになるうとお前は殺せない。それは昔の俺を否定することになるからだ」

その言葉はユイに痛いほどわかった。

だからこそ、ユイは大怪我を負った体を押して立ち上がる。

「それが何だ。貴様の気持ちなど知らない」

本当はわかつている、その事を隠し齒を食いしばってユイは霞む視界と体を濡らす自らの血に耐え剣を杖代わりに前を見た。

「勝手に、私に死んだ人間を重ねるな。私は、どんなことがあっても私だ」

ユイの目には強い光が浮かんでいた。

そして、名乗りを上げる。

「我流剣士、和音ユイ。貴殿のお相手申すッ！」

名乗りとは絶対に退かないと言う意思表示だ。

ユイはここを退けない。退くとう事はあの日、心の中で守ると誓った人間と自分自身を裏切り、捨て去ると言う意味に等しい。だからこそ名乗りを上げた。

男は苦笑し髪を軽くかき上げる。

（どうしてこうも異界の人間があいつと重なって見えるんだろうなー）

自分の、もう手が届かないほど遠くに行ってしまった愛しい人とそれを笑いながら殺していった化け物の顔が頭をよぎり、男は全力でこの少女にぶつからなければいけない事を悟った。

（ああ、そうだ。確かにこの少女はあいつとは違う。けど、あい

つとどうしても重ねてしまつのは俺がまだ未熟で冷酷な人間になりきれていないだけだ)

男はその少女の名乗りに答える。

「同じく我流剣士、フォウセロ・アグリオラ。行かせてもらおうか」

ユイは驚きもせず男の名を聞き、自分の血だまりへ手をかざし

—— やめた。

喰滅クメツを呼び出したところで何にもならない。

次の一撃で決まるとユイの本能は囁いていた。

ズルズルと血が体に戻る。

男はそれを眺めるだけで手出しはしない。次の一撃にすべてを掛けるべく集中しているからである。

そして、血が全て体に戻り傷が癒えたのち、ユイは再び剣を構えた。

そして二人の唇が同じタイミングで同じ言葉を紡ぐ。

「いざ、——」

ユイは全身が心地よい緊張に包まれる。こんな気持ちは剣の師である人物と初めて全力の打ち合いをした時以来だ。

男もまた、それと似たような感覚に包まれながらその続きを同時に紡いだ。

—— 参るッ！「」

ユイは本能的に足を踏み出し下段からの攻撃を、男は上段からの攻撃をする。

剣と体が交錯し合う。

バチバチとやたら五月蠅く音を出す雷の中紫月は平然と立っていた。

「どう・・・して、どうして音更家の血はお前を選んだ！なりそこないのお前を！」

わからない事を聞かれても紫月は只々困るだけだ。才を持つ人間は二つのグループに分けられる。

先天的に生まれ持って力を持つ者と外因性の何らかのきっかけで力を手に入れる者だ。

音更家は先天的に能力を持つ人間を集め、出来る限り沢山の能力者を生み出すことが運命づけられた家だった。

おもに現れる力は雷、最高の雷使いこそがこの家で代々当主を務めてきたものだ。

そして、今代に置いて最も優れた雷使いは紫月だった。

紫月の母は何ら能力を持たない、だから何も家で権力を持たない家の者のさらに末の子となるとだれも見向きはしなかった。今日までは。

紫月は間違いなく今代で最高の雷使いだとこの家の者に認証された。

ただ、生まれついた力を使っただけでだ。

その才能にある者は畏怖し、ある者は驚嘆を漏らした。

——あのような者の子があれだけの才能を秘めているとは。

それまで紫月の従兄弟に向けられていた感情が紫月に向けられる。その感情は紫月の目にはぐじぐじとしたとても汚らしい物として映ったが子供だった紫月には拒否権は存在しなかった。

こうして紫月は押し付けられた未来に雁字搦めに囚われた。

未来に絶望したまま、希望すら見いだせずもがき苦しみながら。

視界の端で雷が激しくスパークするのを捕らえながら紫月は大男の元へ突っ込んでいく。

戦いの興奮に血が沸騰しそうになるが紫月はそれを抑え双槍を振るい、大男を追い詰めるべく舞うように戦っていた。

この戦闘スタイルは誰から勧められたと言うわけではなく、紫月が試行錯誤の末に編み出した戦闘スタイルだ。少しずつ無駄と言う無駄を減らし、槍を引くと言う動作にも攻撃の意味合いを持たせ、双槍のメリットを生かそうと曲芸の様な事も出来るように密かに特訓もした。

血の滲む様な努力の末に紫月はこの戦闘スタイルを確立してきた。「ほほう、面白いなあ。曲芸のようなまねができるとは驚いたわい」

だから大男が素手で雷に包まれた槍の穂先をパシパシ弾いているのを見るとかなり腹が立つ。

（くそ、何で平気な顔していられるんだよ！）

紫月はそう思いながらも攻撃の手を止めない。

紫月の戦法はスピード勝負だ。素早く動き敵を翻弄する。

だから攻撃の手を休める事はそのまま隙を見せる事につながりかねない上、防御力が対してない紫月は今、目の前にいる相手の一撃を喰らったらかかなり危ない。

だからこそ攻撃の手は休めない。

「うおおおお！」

「ぬっ！」

槍の穂先が肉にめり込む感覚がして紫月は双槍をバトンの要領で回し、その場所にもう一撃加えようとするが大男はここに来て初めて後ろへ下がり避けた。

（思い上がりなんかじゃねえ、間違いないける！）

紫月はスピードをもう一段階上げた。

この間のスルガと言う少女との戦いは単に紫月の戦闘スタイルとスルガの能力の相性が悪かったのが原因だと紫月は判断していた。だからこそ、いけると紫月は思った。

「届けッ！」

紫月は思いきり槍を振るう、記憶の深層にある少女の事を思いながら。

#

紫月が戦闘している様子を眺めながら緋香里はユイを回収する指示を出した。

「もう、無理しないでよ。死んだら、死んだらどうする気だったのよ・・・」

緋香里はそうそつと口にすると涙をぬぐい、指示を出しながら紫月の戦いに見入った。

緋香里はいつも不思議に思った。どうして紫月が自分に対してあも辛く当たるのか。

そして、たまたまその理由を聞いてしまった。

——俺は、自分のちよつとした思い上がりで咲弥さんを、戸一の姉を見殺しにした。だから、だから俺は俺と同じ間違いをあとに犯して欲しくない。何もせずに戦闘部隊に入隊してそれで思い上がって人を見殺しにして苦しんでほしくないんだ」

緋香里にはその相手が紫月にとつてはとても大切な人だったと言う事が分かった。

戦友の姉と言うだけではない意味での大切な人だと。

だから緋香里は紫月がつらく当たってきても自分のためだと言い聞かせた。

自分と同じ過ちを繰り返してほしくないと言う紫月の望みを知ってからは。

だからこそ、緋香里にはこの戦いを見守らなければいけない。自

分の師の戦いの行く末を。

飢えた獣、彼女はそう呼ばれた。

母親がどれだけやめろと言ってもやめられない。体が血の興奮を覚えきっていた。

両親は彼女に暴力をしつけ上、必要なレベル、あえて言うなら大切なものを壊されたときに軽くごつくくらいの事しか与えなかった。彼女もしばらく反省したのちにそれが相応だと思ったので虐待などとは思わず、誰が聞いても教育的指導だと口をそろえて言うレベルの物で彼女は周りから見ても自分から見ても幸せな家庭に育ったのだと彼女は思っている。

ごく一般的なとても優しく穏やかな優等生として育った彼女は中学生の時、護身として振るった暴力で血の味を覚えた。

そこからはもう堕ちていくしかない、彼女の周りには常に彼女と中身は同種の人間が集まり、彼女はそれを拒み更なる暴力を振るう。その過程で少女は能力を手に入れ星羽学園に入学する運びとなり、そこで大切な人間を見つけた。

これが神谷天音と言つ一見とても大人しい少女の略歴である。

そしてその少女は今、倒れた仲間の和音ユイの回収へと向かっていた。

「急がないと！」

天音にはほかの人が言う『あの日』よりも後にこの町に来たため一番緋香里の立場に近い。

けれど天音は傍に居る権利が自分にはないと思っている。

自分の、周りの人間以上にドロドロした闘争本能を持つ自分には戦場がお似合いだと思っているからだ。

だからこそ、天音は一番前に出て、自分の戦う姿をあまり人目につかないようにして来た。

怖がられ、離れて行ってしまわないように。

天音は全力で走りながらユイのの元を目指す。

急いで回収しないと敵に見つかり殺されてしまう可能性が出てくるからだ。

（絶対に助けないと）

天音は無線に耳を澄ませた。

#

ユイは頬をなでる風に目を覚ました。

腹部がざつくりと斬られたらしく、もう治ってはいるが布地がぱつくりと開いているため腹部が直に陽光に当たっているのが分かる。最後の、今自分に出来る最高の一太刀をあのフォウセロと名乗った男はまともに喰らった。

ユイも相手の剣をまともに喰らったので勝負は引き分けだった。

（引き分けか）

体が極度の疲労によって動かない。ここまでぼろぼろになったのは最後に剣の師と打ち合いをした時以来だ。

不思議と心は満足している。師匠との打ち合いによる理不尽な一方的攻撃とは違う自分の全てを問答無用で叩き込み、それを返すべく相手もまた全力で答える、こんな打ち合いは初めてだった。

視界が暗転し出す。どうやら思った以上に体が疲労しているらしい。

ユイはそつと瞳を閉じ——いきなり腹部に入った蹴りで目を覚ました。

「ゲフツ」

思わず咳き込むユイ、こんな理不尽な仕打ちをする知り合いと言えはユイにとっては一名しかないない。

「し、師匠……」

「どうしてこんなところで寝ているのかい？」

優しく、柔和に笑う師匠——胡桃葵音にユイは心の中で溜息

を吐いた。

優雅なシニヨンに結い上げた年を経てすっかり白くなった髪、可愛らしいわくちや顔立ちどこかの物語に出てくる善良な魔女や優しい小金持ちの老婦人のように見えるが中身は真逆。ドが付くサデイストで人が苦しむのを見ながらにこにここと笑い、食事や飲み物にクエン酸やハバネロパウダーを混ぜて渡す。その上この人はどうやら法律では縛れないらしく銃刀法違反もさらつとやってのける。

詩麻曰く、最強ならぬ最凶だとの事。

「ふふ、お馬鹿さんねえ、本当。私は今日、孫の戦いぶりを見に来たのですよ？それなのにどうしてこう言う事になるのか・・・。この借りはもちろん返していただかないと」

そう言って微笑みながらぐりぐりと見た目には可愛い鉄入りのブーツでユイの手を踏むその所業は悪魔と呼んでいいだろう。

「さて、そこにいる人は捕虜施設に連れて行かないといけませんね。もちろん、怪我が治った後で地獄を見せてやりますけど」

その言葉に男ではなくユイの顔の血の気が引いた。

（気の毒に・・・）

普通の人と言う地獄を見せると言う言葉よりも明らかに数段上の地獄が待っているであろう男に心の中で合掌。ユイは体を動かそうと腕に力を入れる。

「そう言えば、無線を少し貸してくれないかねえ。少し、指示を出している人に言いたいことがあるから」

そう言われてユイは素直に無線を差し出す。

「聞こえているかい？」

しばらくのノイズの後、緋香里の声が聞こえてきた。

『ええ、聞こえているわ』

「初めまして、詩麻の祖母です。少し、お話しいかしら？」

『少しなら』

かちやかちやと言うキーボードの音が無線の向こうから聞こえる。「どうして、あなた自分の周りの防御をあえて全くなくしている

のかしら」

ここに来る途中、葵音はある男子生徒（紫月）からかつぱらった無線の有効範囲や指示で大方の拠点の場所を割り出しておいた。

無線を盗まれた紫月が現在進行形でひどい目に遭っているが葵音にとつてはどうでもいい。

それよりもあえて拠点を手薄にする意味が分からなかった。

しばらくの沈黙の後、緋香里は口を開いた。

『言えない』

「そう、ならいいわ」

それだけ言つと葵音はユイに無線を返した。

その口元には何かを懐かしむ様な笑みが浮かんでいた。

第17話 クラッキング o p 7 ・ 最凶老婆（後書き）

天音はいきなり横から来た物を転がるようにして避け、そちらの方を見た。

「あーザンネンザンネン。ぼくが一発で仕留める予定だったのに」
そう言つて少年は嗤^{わら}う。

「まあ、いいや。殺す予定に変わらないし、それにこのあいだのおねーさんにも仕返ししなくちゃ」

その化け物の様な少年を天音は冷たい目で見つめる。

自然と自分と重なった。

「殺すなどとは殺しながら、吐く台詞ですよ。相對している時点で言う言葉ではありません」

天音はゆっくりと真実を語る。

「もつともあなた程度に後れを取る気はありませんが」

天音は構えを取る。

天音の攻撃方法は単純そのもの、殴って蹴って力のゴリ押しで相手を圧倒するそれだけだ。

飛び道具を少年が使った様子だが天音には関係ない。ただ戦って勝つ、それしか考えず敵を見る。

戦いに倫理は要らない、良心などただ足を引く張るだけだ。

体がかあつと熱くなるのに対し、頭の中は冷たく冷えていく。自分が研ぎ澄まされ、一本の剣になったような感覚。天音はこの戦いの前の感覚が好きだった。

（私は道具、戦うためにだけ存在する考える道具――）

天音は自分に言い聞かせると声に出す。自分にとって最高の武器の名を。戦いに飢えた狼として。

「来いっ、双牙^{ソウガ}ッ」

神谷天音はこの瞬間だけ優しさを捨てた。

バチバチと雷が鳴る。耳元で。

紫月は立っていた。目の前の大男はすでに地に伏せている。

紫月が倒した。

「ふう、こんなもんかな」

全身が雷に包まれているが気にしない、スパークする雷光が周りを明るく照らしている。

ピクリとも動かない大男、あえて紫月は止めを刺さない。

「さて、この辺にいる奴らまとめてやつつけてもいいかな」

紫月の言葉に周りの草むらがガサリと動く。どうやら紫月を襲うタイミングを狙っていたらしい。

「よつと」

紫月は軽くそんな声を出すと槍の穂先の片方を地面に突き刺す。

次の瞬間、バチバチバチツと言う大音量と共に光が雷と共に炸裂した。

焦土と化すあたり一帯、そして周りに転がる敵の骸。紫月はそれに一瞥もくれてやることなくその場を後にする。

まだ敵は学園内にたくさんいる。それを倒す前に紫月にはすることがあった。

「無線、何とかしねえと。あの葵音さんからどうやって取り返せばいいんだッ！」

その事で紫月は頭を抱えた。

葵音を追った所で葵音はすでに無線を鉄入りブーツで踏み砕き、土に埋めて処分すると言う悪魔の所業をやったため取り返しようが無いのだがその事を紫月は知らない。

「そうだ、葵音さんから取り返せなくても一回本部に行けば――

――本部ってどこだよ！」

紫月の悩みは尽きない。

「邪魔、邪魔、邪魔、邪魔、邪魔、邪魔、邪魔ア！」

夏目はそう叫びながら一直線に走っていた。

目指すは大講堂、学校の関係上、多宗教の人間が集まるため大講堂はキリスト教の教会も兼ねている。

その鐘楼が付いた尖塔の上、そこが学園で一番見晴らしがいいポイントであり、死守すべきポイントを守るには絶好の場所でもある。夏目は一番移動速度が速く機動力があり、尚且つ遠距離からの攻撃が出来るため緋香里からそこに行き、そこからの敵の討伐とそのポイントの死守を命令された。

夏目もその意味にすぐに気が付いたので文句一つ言わずこうして大講堂を目指している。

夏目が今やっていることは単純かつ豪快。思いつきり相手を脚力に物を言わせ蹴り飛ばし、その勢いで相手をなぎ倒すと言うものだ。それにより人ごみを味方を巻き込みつつ快走していた。

（急がないと）

踊るように軽やかに、風のように素早くかけるその姿は生徒には猫に見えた。

だがそんなことを一切気にせずに夏目は駆ける。全力で、まっすぐ。

第18話 クラッキング o p 8 ・ 瞬神舞踏（後書き）

やっと第二章の予定の三分の一にきました。

まだ長い、まだ長い。野々夏と天音と緋香里の水着はいつ書けるんだあああ！

野々夏は飛んでいた。否、歩いていた。空の上を。

これは野々夏と言う一種の自称ひねくれた人間に与えられた二つの能力、その内の気体を操ると言う能力によるものだ。

空中に足場を作り、その上を移動すればあたかも飛行しているように見える。

強度の限界は試したことはないが何キロ乗つけても大丈夫かは調べた。結果は20×20×20の立方体に100キロ程度、野々夏の体調、メンタル面によって変わるがその前後と見積もっている。

体重が40 60キロ程度の野々夏なら楽勝だ。

「さーて、どいつ狙おうかしら」

野々夏はそう言う空中に作り出した足場に腰掛け銃のスコープを覗いた。

敵が蟻か何かのように動いているのが見えた。

「ん、とりあえず手榴弾^{バイナッブル}投げときますか」

野々夏はそう言うて手榴弾のピンを指にひっかけ、一番固まっているポイント目掛けて投げた。

ボンと言う軽い音がした。

そして野々夏は再びスコープで狙いを付ける。

幸い、的はすぐに見つかった。

#

天音は襲い来る人形の腕と足を確実に折りつつ確実に相手の戦力を削っていた。

「あはは、面白いなー。お姉さん体力一本勝負なんだー」

そう笑いながら少年が言っているのも今の内だ。

（大丈夫、本質は見極めた。だから後は一番の混乱を引き起こす

まで！)

奇しくもそれはユイが取った作戦と同じだった。だが天音には関係ない。

天音は自らに与えられたの能力を行使する。

#

最早が大鎚を振るうたび敵が薙ぎ払われ、雷に打たれ絶命し、水に押し流され、鳶に首を絞められる。

その光景は大自然による一方的な虐殺と呼んでも差支えない。

白莓はその光景を見ながら最早と背中合わせに戦っていた。

2年前、最早は当時最強だった胡桃葵音を激闘の末に倒し、最強となった。

それが誰のためか、白莓はそれが誰のためか嫌と言うほどわかっている。

だから白莓は最早の傍に意地で立ち続けている。

どれだけの傷を負おうとも絶対にこの少年だけは裏切らないと心に決めて。

「白莓、少し離れていてくれないか？」

最早に囁かれ白莓は黙って頷く。

最早がこう言う事を言うと言う事は何か強い敵が傍に居ると言う事だ。

「俺、やつぱかつこつけるの無理だわ」

そう言って曖昧に笑う最早、白莓は最後になると言う可能性を踏まえその顔を脳裏に焼き付ける。

白莓は逃げ道を作ってくれた最早に感謝しつつ背を向けて走り出した。

『最早、聞こえてる？』

緋香里の声が無線越しに聞こえ、最早は自分の野生の勘があつていたことを悟る。

『近くに強いのがいると思うけどお願いできるかしら』

「ああ、上等に決まってるだろ」

やや噛みあつていない返答を返すと最早は鎚を肩に担ぐ。

『そう、頑張つて』

緋香里はそれだけ言つと一方的に通信を切つた。

最早はいつの間にか最早以外誰もいなくなつた広い研究室前の広場の森の方を見た。

「ふふ、差し詰め、お姫様を守る騎士と言つた所かしら」

そう言つて黒のロングドレスを着た女性がいきなり目の前に現れた。

「好きに言つてろ。俺は騎士なんて性分じゃねえけど」

最早は面倒臭そうに頭を掻くと女性をにらむ。

天音の顔を絶世の美女にしたこうなるだろうと言う女性に最早は単に敵と言う感想以外抱かない。

「あら、そうかしら。ねえ、私を守る騎士にならない？」

色っぽく誘うように女性は言つが最早はそう言うタイプが苦手と言つよりもむしろ嫌いだ。

「残念だな、俺はもう一生かけて守るつて誓つた女がいるんでな」
格好つけでも何でもなく最早は言つた。

覚悟を決めて。

第20話 クラッキング op10・ 飢狼双牙

シャアンと言う澄んだ音がして少年は後ずさった。

——とても嫌な予感がしたからである。

「逃しましたか、でも次で事足ります」

天音は静かにそう言うのとローキックを繰り出す。

その無駄のない動きを半ば勘で避けると少年は自分の忠実な僕しもへである人形たちを向かわせるがすぐさま天音の拳こぶしによって無力させられる。

「あなたはとても怖いんですね、周りの人間が」

「五月蠅いやない！」

少年はそう大声で叫ぶと天音に躍り掛かった。

「外では人好きの皮をかぶって好きなフリをして本当は怖くて怖くて仕方ない、だから願ったんですね。自分の言う事を聞く意思のない人形の兵隊を」

天音は思いつきり少年の腹部を殴る。

「ゲウエツ！」

潰されたカエルの様な声を上げ少年は地面に伏せた。

「けれど、何も考えない故弱点があります。たとえば——

天音は優しく微笑みながら言った。

——たとえば私のように他者の能力をそっくりそのまま真似する能力とぶつかった時、いとも簡単に統制が瓦解するとか」

人形の内、数体が少年の統制を離れる。

少年は指示を出す間もなく、赤い液体を零こぼしながら倒れた。

「な・・・」

「何を言っても無駄ですよ。私は戦うために存在している人間、その中でも特に性質が悪い戦って相手と潰し合っていない限り生きているという実感すらない戦闘狂なんですから」

天音はそれだけ言う少年に対して冷酷に止めを刺した。

緋香里は感じていた。ここに近付いている敵がいる事を、そしてそれが敵の本命であることを。

「来夢、ほんの少し指示代わってもらえる？ 私少し行ってくるから」

来夢はその言葉をきちんととらえ頷く。

「死ぬなよ、昨日の夜の返事まだもらってないんだからな」

「それ、死亡フラグよ？」

微かに笑いながら緋香里は返すと全体に戦闘指揮が変わる事を告げ、席を立つ。

「はは、でも約束は守れよ。意地でな。それが戦場では一番大事なんだからな」

その言葉を背に緋香里は部屋を出て屋上へ向かう。

（もう、躊躇わないうって決めた。全て誰かのせいにないうって決めた。だから、前を見て歩く）

緋香里の目に躊躇いの色は無い。

ほんの少しだけ自分の立場が明らかになった気がして緋香里は笑った。

自分は大人でも子供でも無い、けれど戦う事で誰かを守れる。それだけで緋香里には十二分だ。

逃げてばかりだった過去を捨てて現在に立ち向かって行く理由とそれだけの勇気が出来た今になつては。

「よし」

緋香里は気を引き締めると一度目を閉じて深呼吸した。

そして、今度は自らの意志で生きて帰れないかもしれない戦場へ足を踏み入れた。

自分なりの戦争に対する考えを持って。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2920r/>

バイバイ、バタフライ。?理念戦争

2011年11月17日13時08分発行